
盗賊ブレイブ@復活！自称勇者

ブレイブ&秋留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盗賊ブレイブ@復活！自称勇者

【Nコード】

N8293E

【作者名】

ブレイブ&秋留

【あらすじ】

【ブレイブシリーズ6】とうとう人間に戻ったカリュー！快気祝いも兼ねて、久々の冒険だ。目指すは新しい霊獣。そこで遭遇する赤い制服の男達。彼らは霊獣を捕らえて対魔族用兵器を作ろうとしている研究所の兵士達だった。

プロローグ

「うははははは〜！」

頑丈な金網に囲まれたステージの中心で、剣士風の男が襲い掛かってくるモンスターを切り倒している。モンスターの返り血を浴びて全身真っ赤になっているが、全く気にするような素振りも見せない。

まるで修羅か悪魔のような戦いっぷりだ。

ここは聖都アームステルにある闘技場。一般的に闘技場とは捕獲してきたモンスターと冒険者を戦わせる、平和な日常に飽きた金持ち達の道楽施設を指す。

しかしこんな施設も金に困った冒険者には有難いものである。

それにしても聖都と言ってもこのような道楽施設はいくらでもあるんだなあ。

この闘技場の隣にはカジノもあったし、その更に奥には誘惑的な服を着た女性が客引きをしている怪しげな通りも目に付いた。

人間、所詮欲には勝てないのだろう。

「さすがに嬉しそうだね」

俺の隣で一緒に観覧席に座っている女性が言った。俺と同じパーティーのメンバーである幻想士の秋留だ。

ピンク色の綺麗な髪が特徴の、魅力的な女性である。

秋留の性格からいってこのような施設は好きではないのだろう。

あまり楽しそうな顔はしていない。

美の女神が舞い降りたかのような風貌、そして慈愛の天使のような優しい心の持ち主である秋留だから……。

「……あまり興奮し過ぎないで欲しいな」

「う、うん、そうだね」

秋留と意味ありげな会話を交わす。

実は目の前で戦っている剣士はただの剣士ではないのだ。

「そこですぞ〜！」

俺の思考を中断するかのように秋留の更に向こう側にいる老人が叫んだ。

「ぶちかませ〜！」

「そうじゃねえだろう〜！」

老人に呼応するかのように観覧席にいた他の観客達も叫び始めた。血に飢えたモンスターは、金網の向こう側で牙を剥いている獣か、観客で叫んでいる人間達なのか分からなくなりそうだ。

「いやあ、興奮しますな。ワシの若い頃を思い出しますぞ」

先程叫んだ老人が無邪気な子供のように話している。

聖騎士のジエツト。

秋留と同じく俺と同じパーティーの一員だ。いつもは温厚で声を荒げる事などほとんど無いのだが……。まさかこういう隠された性格があったとは。

「頑張るのですぞお！」

ジエツトは再び金網の内側で行われている戦闘に目を向けた。

片手に賭け用のチケットが握りながら……。

「……聖？ 騎士だよな」

「あはは……」

俺の疑問に秋留も苦笑いだ。

聖騎士とはガイア教会で認定を受けた聖なる職業のはずなのだが、ジエツトは酒も飲むし今日のように賭博に燃えていたりする。

不思議なジエツト。

しかし一番不思議なのは酒を飲むことでも、賭博をすることでもない。

ジエツトは秋留の力によって蘇ったゾンビなのだ。

普通に食事をして普通に睡眠をとる。夜早くて朝早いことなどは老人の代表的な生き方でもある。

人間よりも人間らしいゾンビのジエツト。魔法が使えない俺には、より一層理解が難しいのかもしれない。

俺の職業は盗賊だ。一般的にあまり盗賊に良いイメージを持っていない一般人も多いのだが、全くの誤解だ。

よそ様の物を盗んだりしないし、素行が悪いなんて事も無い。

現に俺は童顔で装備は真っ黒なスーツだ。……まあ、人間、見た目で判断は出来ないが。

ちなみに俺はトラップを解除したり宝箱を開けるだけが取り柄ではない。

腰に下げている二丁拳銃であるネカー&ネマーを扱う事もプロ並だ。銃士にも引けを取らない自信がある。

『只今のチャレンジ、戦士カリユートの勝利です！』

闘技場の中にアナウンスが響き渡った。

「俺は勇者だあー！」

ガッツポーズを取りながら、カリユートと紹介された振り返り血で真っ赤な戦士が叫んだ。

「兄ちゃん、勇者は金色の眼をしているんだぞー！」

「そつだ、そつだ！」

「ガハハハハハ！」

観客席から笑い声が巻き起こった。

言い返せない黒い瞳の戦士が顔まで真っ赤にして控え室に戻っていった。

「又ツハツハツハツ」

ジェットまで笑っている。

「ほら、ジェットもいつまでもふざけてないで、カリユートと合流しに控え室に行くよ」

「……おほん、そうですね」

急に熱が冷めたかのようにいつものジェットの口調と顔に戻った。今まで金網の中で戦っていたのは、俺達パーティーのリーダーだった、いや、最近リーダーに返り咲いた自称勇者のカリユートだ。

色々複雑な理由があってリーダーどころか人間も辞めていたのだが、つい最近、人間とリーダーの座を同時に取り返した。

「うおおおお！ 俺は勇者じゃないのかあ！」

「あ、暴れないで下さい！」

控え室では暴れているカリューを必死になだめている係員の姿が目についた。

「カリュー、落ち着いてよ？」

秋留が優しく問いかける。

「おお！ 秋留、聞いてくれよ！ 皆が俺の事を勇者じゃないって言うんだ！」

カリューが秋留に顔を近づけて叫んだ。

最近まで人間を辞めていたせいで、少し性格が荒くなっている。先程の戦闘中にもなぜか四本足で戦っている時もあったしな。

「とりあえず外に出ましよう。皆さん困っているようですし、クリア殿達も待っていますぞ？」

ジェットに諭された俺達は、闘技場の裏口から聖都アームステルの裏通りへと出た。

「俺は勇者だよな？ な？」

「しつこいなあ！ 人語を話せるようになったと思っただらそればかりじゃないか！ 獣のままの方が良かったんじゃないか？」

外に出ても相変わらずカリューが俺達に話して聞かせてくる。

あまりのしつこさに俺はカリューに言い返した。

「何だと！ ブレイブ！」

俺とカリューが言い合いをしていると、向こう側から真っ赤な犬を連れた金持ち丸出しの娘が近づいて来た。

「うるさいなあ！ 凄く遠くまで醜い言い争いが聞こえてきたよ！」

全身黄色のレース付きの豪華な服に身を包んだ少女が言った。少女が連れている犬は真っ赤な毛並みで首にはトゲトゲの首輪が付いている。典型的なドーベルマンといった感じだ。

「どうでしたか？ ストレス発散出来ましたか？」

少女の後方で大量の荷物を持った執事風の男が言った。

「え、あ、ああ……」

急にカリューが大人しくなる。

「カリュー、はつきり言いなさいよ！」

少女が腰に手を当てて言った。

「え！ ああ、はい。ストレス発散出来ました。ありがとうございます……」

天地が逆になる程に態度が変わったカリューが言った。

「あつはつはつは！ カリューはまだクリアに慣れないのか！」
腹を抱えて俺は笑った。

「う、うるせえ！」

反論にもどこか力が入っていない。

カリューはつい最近まで獣だった。そして獣だった時のご主人様は獣使い見習いのクリア。この豪華な服を着たお嬢様がご主人様だったのだ。

その影響でカリューは人間に戻ってからも、クリアがいると面白い位に縮こまってしまう。

「そちらは今日も買い物ですか？」

「え？ そ、そんなに買い込んでないよ？」

クリアの教育係りになりつつあるジェットが、後方にいる執事シートの持つ大量の荷物を睨みつけながら言った。

商家の一人娘であるクリアは贅沢な暮らしを続けてきた。金に頓着が無いのは仕方ないのかもしれないが、旅を続ける冒険者にとつては金は重要だし、必要かどうか分からない大量の荷物も邪魔なだけだ。

ま、そもそも、冒険者じゃなくても無駄遣いは駄目だろう。

命の次、いやいや、秋留と俺の命の次に大事な金だからな。前回の冒険でクリアにはすっかりと叩き込んだはずなのだが、最近また浪費癖が復活してきたようだ。

「んじゃ、カリューが闘技場で稼いだ金を使って豪華にディナーに

でも行くか！」

「な！勝手に話を進めるな！」

カリユートの拳が俺の目の前をかすめる。

ああ。

まあ、カリユートとこんなやりとりをするのも久しぶりだ。獣だった時のカリユートには殺されかけた事もあるしな。

「じゃあ、あつちにステーキ屋さんがあったから行こうよ！」

クリアがはしゃいでいる。

まだまだ育ち盛りだからな。肉が食いたくて食いたくてしようがないんだろうな。猛獣だ、そう猛獣だな。

「！ブレイブ！何か変な事考えているでしょ！」

クリアが俺の方を見て怒鳴っている。

俺は口よりも先に顔に出る性質のようだ。他のパーティーのメンバー、特に勘の鋭い秋留には俺の心の中を読まれっ放しだ。言葉がいらぬんじゃないかと本気で考えたこともある。

「？ ジェット行くぞ！」

「……」

ジェットが後方を寂しそうに眺めている。その視線の先にはカジノの隣の怪しげな通りがある。客引きの女性のうちの一人がこちらを振り向き手招きをしているのが確認出来た。

「お、おい、ジェット！ 飯食べにいくぞ！」

俺がジェットの肩を叩きながら言っつて、やっと正気に戻ったようだ。

「お、は、は、う……」

「うるたえ過ぎだ、大丈夫か？」

「ははは、御飯でしたな。行きましょう」

老人ゾンビのくせにまだああいう場所に興味があるのだろうか？俺は色々と疑問に思いながら、パーティーのメンバーと一緒にクリアの案内するステーキ屋目指して歩き始めた。

「やっぱりよ、闘技場じゃ緊張感が無いよな」

食事を終えて一息付いている時にカリューがポツリと呟いた。

「お、たまには良いな。久しぶりに依頼でも受けにいくか？」

そろそろ自由に使える金も心細くなってきた事だし、高額の依頼を一つや二つこなすのも良いかもしれない。

俺は新規購入リストを頭に思い描きながら、目の前の炭酸飲料を飲み干した。

「うん！ 久しぶりに冒険したい！」

珍しくクリアもやる気になったようだ。確かにこのアームステルに到着してからは依頼と言えるような依頼はこなしていないからな。

「クリアお嬢様？」

クリア専属の執事であるシープットが焦っている。執事として、クリアお嬢様を危険に晒す訳にはいかないという所だろうか。

「というか、一番危険な存在なのはクリア本人だから問題無いと思うのだが。」

「冒険か……。じゃあ私のわがままに少し手伝ってもらおうかな」
食後のメロンジュースを飲んでいた秋留が突然言った。

「おう！ 何でも手伝うぞ！」

秋留の問いに俺は即答した。

「……ブレイブの意見は分かったわ。他の人は？」

「いいよ！」

元気良くクリアが答える。

「うむ、秋留殿のお願いとあらば例え火の中の中」

不死身のゾンビであるジェットの台詞ではあまり誠意が伝わってこない。

「身体を動かせるならどんな所にも付いていくぞ」

頭の中も筋肉で詰まっているカリューらしい台詞だ。

「私は勿論、クリアお嬢様の行く所にはどこまでもお供致します」

模範的な執事としての台詞だろうが、額には大量の脂汗が浮かんでいるのが見える。

まあ、シープットは非戦闘員だからな。

「ピシッ」

「パシッ」

そして不気味なラップ音。お前らも憑いて来るのか。

そう、俺達のパーティーには色々な複雑な事情があって、カップルの幽霊と行動を共にしているのだ。

「ツートンとカーニヤアも手伝ってくれるの？　ありがとう！」

嬉しそうな秋留の声とは裏腹に、幽霊を気にする俺とシープットは大きく苦笑いした。

ゾンビのジエツトも少し嫌そうにしているが「同類だろ！」とはさすがに言えない。

「で、秋留のわがままって何だ？」

俺達パーティーのリーダーであるカリューが話を進める。

「新しい霊獣が欲しいんだよね」

秋留が可愛く笑った。

秋留の案内で、俺達はアームステルから馬車で三日の距離にある殺風景な谷へとやってきた。どの木にも葉は無く、地面には環境に負けない強そうな雑草がビッシリと生えている。

「あ、蜥蜴だ〜！」

クリアが無邪気に辺りを歩き回っている。

「蜥蜴はどうでも良いんだけどよ……ここは色々出そうだな」

カリューが舌なめずりをしながら拳をバキバキと鳴らして言った。ここに来るまでの街道は冒険者の通りも多く、モンスターもほとんど出現しなかったから、暴れたい盛りのカリューには相当退屈だったに違いない。

平和な事に不満を言っているのは、勇者の資格はいつになっても貰えなさそうだが。

ちなみにカリューは自称勇者だが、なぜそこまで勇者にこだわっているのかは教えてくれた事は無い。

「おいで、おいで、モンスターに魔族……」

不気味な笑顔を作りながらカリューは背中中の剣を両手に構えた。

魔力を持つ剣、業火の剣。名前とは裏腹に微弱な炎が立つだけの中途半端な剣だ。しかし切れ味は良いようだ。

「モンスターは沢山いるらしいけど、さすがに魔族はいないんじゃないかなあ……」

秋留が心配そうに呟く。カリューめ、秋留を困らせるな！

「そっか。ま、でもモンスターがウジャウジャいるんだろ？ よし！」

カリューがズンズンと谷の中へと進んでいく。

「良いね、カリューみたいに身体一つでどうにでもなっちゃう人は……」

思わず愚痴る。

冒険者として生きていくにはそれなりに装備は重要だし、回復アイテムなどの消耗品も大事だ。

しかしカリューは全くと言っていい程、アイテムなどを保持しない。

アイテムを使用したり罫を設置したりするのは卑怯な手段だ、といつも言っているからだ。

そんな事じゃいつか命を落とすぞ、と言いたいのだが、実際アイテムなどを使わなくてもカリューは何とかしてしまっているから文句も言えない。

まあ、カリューが傷つけば秋留やジェットが回復するからな。作業分担出来るのがパーティーの良い所なのかもしれない。

「よしと」

俺は乗ってきた馬車から装備品や道具を取り出し終わると、カリューの入っていった谷を睨んだ。

「じゃ、銀星待っててね。他の子たちも良い子にしてるんだよ」

クリアが馬車を引っ張ってきていた一頭の白い馬を撫でた。

ジェットの愛馬であり、ゾンビ仲間でもある死馬の銀星だ。ジェ

ツトと同様に秋留の魔力により蘇ったエロ馬だ。

「ヒヒーン！」

「ふふ、ありがとう！」

クリアは獣使い見習いであるため、動物と会話をすることも出来る。「気をつけてね」とか言っていたのだろう。

「今日も可愛いね、だって！」

あのエロ馬め！ 幼児趣味までありやがるのか！

というか、クリアの言語理解も怪しいが。自分の聞きたい台詞が聞こえてくるっていう危険な種族じゃないのか？

「ではカリュー殿が一人で暴走してしまう前に出発しますかな」

ジェットが厚手のコートを翻した。全員準備万端のようだ。

「暴走されたら色々厄介だからなあ」

そう。

カリューは一見、元の人間に完璧に戻ったように見える。

しかし……。

「ほら、ブレイブ、格好付けてないで行くよ！」

秋留に呼ばれて俺はコートを羽織直して谷へと進んでいった。

「ふう、遅かったなあ！」

俺達が急ぎ足で十分程進んで、ようやくカリューのいる所に辿り着いた。

カリューの後を追うのは簡単だった。モンスターの死骸のある方に進んでいけば良いのだから。

目の前のカリューは既にモンスターの返り血を浴びて全身が汚れていて、運動量のせいかな身体からは湯気が上がっている。

「満足してそうだね」

「おお！ ここはそれなりに手応えのあるモンスターがウヨウヨしてるぞ」

俺は辺りを見渡した。

相変わらず素材の剥ぎ取りは行っていないようだ。

冒険者というものは先程言ったように消耗品のアイテムや装備、その他宿代など常に金を消費していかないと生活出来ない。そこで目を付けたのがモンスターから取れる毛皮や牙などの素材だ。

高いものでは牙一本で一万カリムを超えるものも存在する。

俺は手近なモンスターの頑丈そうな牙を死体から剥ぎ取った。

「ブレイブ、あの赤毛のモンスターの皮は高く取引されれているみたいよ?」

秋留の指摘で俺は首の無くなった赤毛モンスターの皮を剥ぐ。

「うつつ」

相変わらずこういう作業は苦手だ。それでも金のためだからしょうがない。

「ふふつ。頑張ってるね。魔族討伐組合で情報を仕入れておいたんだよ」

さすが秋留。

霊獣が目的の冒険でも、金を稼げるようにあらかじめ情報収集は怠っていないようだ。

「ほら! ブレイブもそんな事ばかりしてないで、奥に行くぞ!」
カリューがモンスターを捌きながらズズンと谷の奥へと進んでいく。

「カリューは放っておいても大丈夫でしょ。それより皆で手分けして解体しよ」

秋留の指揮の元、俺とジェットはモンスターから取れる素材を秋留の指示に従って解体し始めた。

クリアは興味津々に俺達の作業を覗いている。

かなりオゾマシイ光景なのだが……さすがオテンバが服を着ているという形容がピッタリのクリアだな。

ちなみに非戦闘員である執事のシーPUTTは器用に大きめの包丁を使って、食用の肉を切り分けている最中だ。さすが執事、料理はお手の物といった所か。

「さて、こんなもんだろ」

俺達は重要そうなアイテムを大きめの袋に収めるとカリューが突っ走った方角へ歩き始めた。

「うおおおお、勘弁してくれ〜！」

俺達がかリューの後を追いかけてよととした矢先、遠くからカリューが叫びながら近づいてくるのが見えた。

「何だろ？」

俺はカリューの背後を観察した。盗賊になつてから日々鍛えられている両目に神経を集中する。

「少し大きめの八チの大群に襲われているみたいだ。……つて、こっちに来るなあ！」

俺はネカーとネマーを構えてカリューの足元に弾丸を発射した。

「ばかつ！ ブレイブ！ ちゃんと狙いやがれ」

いやいや、俺の銃から発射された硬貨の弾丸は狙い通り、近づいてくるカリューの足元に命中したんだ。

「それはちよつと酷いでしょ？ まかせて」

秋留が杖を構えて呪文を唱え始めた。

「業火の身体を持ち 煉獄の心を抱く者よ」

お、秋留の十八番だ。

この魔法は高温の熱風を広範囲に放出する威力の高い魔法だ。

……え？ カリューもやられちゃわない？ 俺よりも酷くないか？

「灼熱の息吹を知らぬ哀れな者達を汝の舞で焼き崩せ、コロナバーニング！」

俺の疑問を肯定するかのようにかリューを含めて巨大蜂のモンスターもろとも、熱風に巻き込まれた。

「あちー！ あちー！」

カリューは一瞬早く射程範囲内から脱出していたようだ。それでも身体のお大半が軽い火傷を負っているように見える。ちなみに巨大蜂の大量の死骸は地面に転がっている。

「あ、秋留ー！」

半分焦げたカリューが目くじらを立てて秋留に抗議しにやっ
た。

「勝手な行動取りすぎた罰！」

問答無用に秋留がカリューに言った。

さすがに自覚したのか、カリューは黙って秋留の回復魔法の治療を受け始めた。

「昆虫系の小さなモンスターは、カリュー殿のように力でゴリゴリ行く冒険者には向いてないからのお」

秋留の熱風から外れた巨大蜂モンスターを素早いレイピアの突きで串刺しにしてジェットが言った。

相変わらず正確無比な武器捌きだ。ジェットの攻撃は動きに無駄が無い。

「久しぶりの実践でよ、ちょっと調子に乗りすぎたわ、悪い悪い」

たつぷり反省しました風のカリューが秋留や俺達に謝った。

「本当に分かったの？」

クリアがカリューの目の前で睨みつけながら聞いた。

「はい、もうしません、ごめんなさい、許してください」

カリューが一気に小さくなった。

クリアの釘刺しのお陰で二度と勝手な行動は取らなくなったに違いない。まあ、この無鉄砲ぶりも獣だった時の名残かもしれないが……。

「情報によるとそろそろなんだけど……」

カリューを回復してから二時間以上は谷の奥へと進んできただろうか。秋留がキョロキョロと辺りを見渡しながら呟いた。

今までの景色と同様に殺風景さは変わっていないが、近くを小さな川が流れているため少し神秘的な景色に見えなくもない。

「ん？ あそこに人が見えるぞ？」

川の向こう側にある大きな岩に、もたれている数人……三人の人影が見えた。

俺達は辺りに警戒しながら大岩へと近づく。

「気絶させられているようですな」

怪しげな時は無敵のジェットに先方を任せるのが俺達パーティーの基本だ。まあ、ゾンビであるはずのジェットなのだが、不思議に痛覚はあるようなので少し可哀想な気もする……。

『う、うん……』

ジェットがペシペシと全員の頬を叩くと、三人仲良く意識を取り戻したようだ。

「ここで何かあったのですかな？」

ジェットが落ちていて話掛けたのだが、気を失っていた男達三人は辺りをキョロキョロと確認すると、悲鳴を上げながら慌ててその場から逃げ出してしまった。

「お、おい！ 礼金ぐらいよこせ〜！」

俺の叫びは谷間に悲しく響いた。パーティーの嫌な視線も感じる。おまけにこの嫌な感じは憑いて来ている幽霊二人のものも含まれているに違いない。

……幽霊にまで白い目で見られる俺って一体……。

「へっへっへ……空しい野郎だ」

俺達じゃない何者かの声にパーティーのメンバーは全員戦闘体勢を取った。

「ぐはっ」

目の前で突然カリユーの身体が吹き飛ぶ。

動体視力が高いはずの俺の眼にもほとんど分からなかったが、何者からの攻撃を受けたらしい。

「ぬへえっ！」

「きゃああー！」

先に聞こえてきた悲鳴は非戦闘員らしい気の抜けた叫びのシーブツトだ。後者はクリアだ。二人とも攻撃を受けてその場に倒れこんだ。

「ブレイブ！」

「分かってる！」

タフなカリューが既に武器を構えて俺へと指示を出してきた。この攻撃の出所を察知出来るのは俺だけと判断したためだろう。

一体、何をされているんだ！

「恐らく高速攻撃だよ！」

秋留の台詞に俺は眼と耳に意識を集中し、他の感覚は邪魔になるだけなので閉じる。

「！」

風を切る音と地面を蹴る音を察知して俺は慌てて秋留をかばう。倒れこんだ俺と秋留の頭上を何かが通り過ぎたようだ。

地面で体勢を立て直しながらも咄嗟にネカーとネマーを発射したが、相手を捉える事は出来ない。

俺が発射した方へカリューとジェットが攻撃を仕掛けたが、同じように捉える事は出来なかったようだ。

「ほっほお、空しい野郎の癖に俺の攻撃を避けるとはなあ……」
「ぐっ」

一瞬で意識が遠くなった。全く見えなかったが俺は顔面に攻撃を食らってしまったようだ。

遠くなる意識を必死に抑えながら俺は目の前にネカーとネマーを再び発射した。

「甘い！」

背後から何者かの攻撃を食らった。こいつ、以前戦ったチヨロチヨロと素早かった海賊よりも何倍も速い！

「ちっ！」

カリューが舌打ちをして剣を振るったが、相手にダメージを与える事は出来ないようだ。

「ま、参りましたな……」

チェンバー大陸の英雄と言われたジェットも手が出せないようだ。どうした、もう終わりか？」

姿の見えない相手だが、ダメージの受け方を見ると格闘術を使っ

ているように思える。

しかも声の出所が一定しないという事は常に高速で動き回っているという事だろうか。地面への衝撃がほとんどないという事は相当身軽な奴に違いない。

「勝負よ！」

秋留が突然立ち上がって叫ぶ。今までそこから中から発しられていた気配が一箇所で止まった。

「勝負だと？」

殺風景な崖を背負うようにして人……いや、人と同じ姿形の何かが目の前に現れた。

一見すると子供の頃に絵本で読み聞かされたヒーローの話に出てきそうな感じではある。しかし、よく観察すると紫色の毛並みの猿が派手な黄色のヘルメットを被って真つ赤なマフラーを巻いているだけのようだ。

「趣味の悪い奴が出てきたぞ」

「！　こら！　お前！　趣味が悪いとか言ったか！　この豪快もみあげ野郎があ！」

ボソリと呟いたカリユートの台詞に目の前のヒーロー猿が言い返した。

「！」

クリアに叱られた位に大きく落ち込むカリユート。獣だった時の名残なのか、カリユートのもみあげは以前人間だった時よりも物凄く豪快に生えている。

「娘！　勝負と言ったな？　このマツ八様と勝負がしたいと？」

腕を組んでヒーロー猿が言った。

マツ八？　最近どこかで聞いたな。それにあの姿、どこかで見た気がしてきたぞ。

「一人、お付の召喚士がいなくなったでしょ？　暇してると思って」

「！　お前か、ギヤスターを葬ったのは！」

そうか、マツ八……。以前、俺達と戦った魔法剣士のギヤスター

が使っていた霊獣の名前だ。ちなみにギャスターは俺達が直接葬った訳ではないのだが、ここで突っ込む必要は無いだろう。

「良いだろう、この勝負受けて立とう！」

ビシツと秋留に指を突きつけている。霊獣の癖にヒーローに憧れているに違いない。

「さて……勝負の方法は？」

ポリシーなのだろう。組んだ腕はそのままに話し続けている。口の横にハエが止まってモゾモゾと動いているので相当痒いに違いないのだが……。

「……素早さの勝負なんてどう？」

秋留は愛用の杖を折りたたむと腰のフックへとぶら下げた。本当に素早さの勝負をするつもりか？ 秋留はそんなに素早さがあったのだろうか？

「す、素早さの勝負だとお！」

今まで勝負にワクワクしていたマツハの機嫌が一気に悪くなったようだ。スピードには誰にも負けない自信があるに違いない。

相手を怒らせて冷静さを無くした所でスピードで勝てるとは思えないのだが……秋留はどうするつもりだろう？

「そ。まさか自信が無いとか？」

「ふ、ふざけるな！ 速さで負ける俺様じゃないぞ！」

そう言ったマツハの左手にはいつの間にか果実の生った枝が握られていた。

「あそこに生えているこの谷で数少ない果実の木……あの枝を今取ってきた」

『！』

俺達は同時に驚いた。あそこの木ってここから五十メートルは離れているぞ！

「……同じ事、もしくはそれ以上が出来たら、私の勝ちって事で良いかな？」

秋留が腰に手を当てて言った。

マツハは両拳を高く挙げて唸っている。相当怒らせてしまったよ
うだが大丈夫だろうか。

「同じ事が出来れば良い！ ただし！」

そう言ったマツハの拳が秋留の目の前に突き出されていた。また
しても何も見えなかったぞ。

「出来なかった時は、その綺麗な顔に海より青い青タンを作らせて
貰うぞ！」

「てめえ！」

俺は問答無用にネカーとネマーをぶっ放した。

しかし両銃から発射された硬貨がマツハの身体を突き抜けて向こ
う側の地面を砕いた。

……何が起きたんだ？

「高速で移動して元の場所に戻ってきたただだよ」

秋留が言った。

まさか見えていたとでも言うのか？

「……だけ？ 随分簡単に言ってくれるじゃないか！」

ああ、秋留よ、そんなにマツハを逆撫でしてどうするつもりなん
だ……。他のメンバーも心配そうに秋留の事を見ている。

「お姉ちゃん……」

ジェットに介抱されて復活したクリアが心配そうに秋留に近づい
て言った。

「大丈夫だよ、クリア」

そう言っただけで秋留はクリアの頭を撫でた。

「あ、秋留……」

俺も心配そうに秋留に近づいていった。しかし秋留に両手で突き
放されてしまった。秋留が白い目をして頬を膨らませている。

……俺も秋留に頭を撫でてもらいたかったんだが……駄目だった
ようだ。

「さて！」

そう言っただけで秋留が両手をグルグルと回し始めた。準備運動を始め

たようだ。

「そんな事をして俺に勝つ事など出来ない！」
そっぽを向いてマツハが言った。

しかし目だけはチラチラと秋留の方を観察しているようだ。秋留のやる気マンマンな顔にマツハも少し心配になってきたようだ。

秋留は更に腕をグルグル、足首をグリグリと動かしている。

……まさか、本当にマツハと同等の速さで動けるといのか？

「……おい、まだか！」

マツハが叫んだ。

「ふふ、はい、コレ」

そう言って秋留がマツハの両手に果物を手渡した。

「！」

マツハが取ってきた果物と同じものだ！ マツハ同様に何も見えなかったぞ！

「……」

俺達の驚きようは尋常ではなかったが、マツハはそれ以上に驚いているようだ。あんぐりと開いた口が戻るような気配が全くない。

……。

暫くの沈黙。

「……い、イカサマだあ！」

マツハが拳を秋留に突き出した。

駄目だ！ 間に合わない！ 秋留の可愛い顔に海より青い青タンが！

しかしマツハの拳は空を切った。

秋留はいつの間にかマツハの後ろに立っている。

「……そりゃイカサマだよ、イカサマでもしないとマツハの速さに追いつく人なんてこの世にいないもの」

秋留が言った。

「……そ、そうだよな、俺より速い奴なんていないよなあ、あはは
……がっはっはっはっは！」

マツハが腰に手を当てて豪快に笑った。

「秋留だったな……気に入った！」

マツハが秋留の肩に手を置いた。

……こいつ、どの動作も俺の眼でも全く追う事が出来ない。こんな霊獣を使う魔法剣士に俺達はよく勝てたよなあ。

「ふふ、ありがと……それじゃ、霊獣としてこの秋留のために力を貸してもらえますか？」

ああ、そうか。

秋留はこのマツハを新しい霊獣にするために俺達とここまでやってきたのか。

「この際手段などどうでも良い、俺と同じ事が出来た秋留に喜んでこの俺の力を捧げよう！」

そう言くとマツハの身体から一つの光が秋留の身体の中に入った。いった。

唖然としている俺達に向かって秋留が丁寧に解説してくれた。

霊獣との契約では、霊獣の身体の一部を自分の身体に取り込む事により、召喚が可能になるという事だった。

どんなに離れていても霊獣の身体の一部を通して、召喚士からの呼びかけが届くという仕組みらしい。

「さて、秋留も新しい霊獣を手に入れたし、そろそろ聖都に戻るか！」

秋留の召喚士講義に飽きてきていたカリューが言った。こいつは脳みそまで筋肉だから頭を使う事が苦手なんだろうな。

「あ、そういうえば」

思い出したように秋留が言った。俺達を見送ろうとしていたマツハの方を振り返る。

「ここで伸びていた三人組は私達と同じように貴方と契約しに来た人？」

「！ 何者かが近づいてきているな」

秋留とマツハの会話を邪魔するかのように複数の気配が近づいて

くるのが分かった。

「……奴らは霊獣の力を利用して対魔族兵器を作ろうとしている研究所所属のハンター達だ」

マツハがウンザリして言った。

「どうやら狙われたのは一度や二度ではないらしい。」

「……しかも今回は今までで一番の団体さんのご到着のようだ」

マツハは両拳をゴキゴキと鳴らして準備運動を始めた。

「霊獣を兵器利用……どこかに連れ去られちゃうって事？」

「ああ……既にこの辺りの霊獣で拉致された奴がいるんだ」

「……許せない！」

秋留が杖を構えた。

マツハの話だと、霊獣を奴隷として使うという事なのだろう。優しい心の持ち主である秋留には我慢出来ないに違いない。

マツハと会話をしている間に三十人ほどの人間が俺達の周りに立ちほだかった。全員、岩で伸びていた男三人組と同じ真っ赤な制服を着ている。

「お前達は何だ？ その霊獣をこちらに引き渡せ」

他の奴らよりは少し立派な赤い制服を着た男が前に出てきて言った。その声には何の感情も籠っていないように思える。

「どこの研究所？ 霊獣を兵器利用するなんて話は聞いた事無いわよー」

交渉担当の秋留が前に出て言った。

「……マツハめ、余計な事を……」

隊長らしき男は背負っていた銃を構えた。連射可能なマシンガンタイプのようだ。

「邪魔するなら排除させてもらおう」

隊長の台詞に周りの男達も一斉にそれぞれの武器を構える。どの武器も、威力よりは素早さを選んだ武器に見える。マツハ捕獲を目的としているためだろう。

「悪いな、面倒ごとに巻き込んでしまって」

霊獣の癖に律儀な奴だ。済まなそうにマツハが頭を下げている。

「いや……気にするな。霊獣の兵器利用なんて悪の組織がやる事だ！」

カリューが嬉しそうに武器を構えた。

ここに到着するまでの戦闘では満足出来なかったに違いない。目の前の獲物を危険な眼つきで睨んでいる。このカリューの眼つきで男達の何人ががたじろいだ。

「銃を持っている奴は任せろ」

そう言つとマツハの姿が消えた。

俺達も一斉に飛び出す。

「マツハを生け捕れ！ 邪魔な人間達は殺しても構わん！」

副隊長らしきヒゲ面の男が叫んだが、カリューの剣の一閃で悶絶してしまった。ちなみに、いくら凶暴なカリューでも今は剣を鉄の鞘に入れたままで攻撃している。

……あまりの威力に瀕死のダメージを与えていそうなのだが。

カリューが頑張りすぎなので敵があまり近くには来ないが、時々飛び道具を投げようとしている男の足をネカーの硬貨で貫く。

「！」

頭のすぐ横を銃弾が掠めた。……奴ら、銃を手に固定しているようだ。マツハが頑張つて攻撃をしかけているのだが、武器を固定しているため弾き飛ばす事が出来ない。

しかも対打撃用に内側に何か防御力増強のための防具をつけているようだ。

ちなみにカリューの攻撃はそんな防具は関係なくダメージを与えている。ジェットもクリアやシープットのお守りをしながら敵の防具の隙間をぬって攻撃を仕掛けている。

「皆張り切ってるな」

「そうだね」

あまりやる事のない俺と秋留は敵の動きに注意しながら会話を続けた。

「そつだ、さっきのマツハとの勝負、凄かったな。どうやったんだ？」

「ああ、あれね」

秋留は先程の準備体操のように手をグルグルと回し始めた。

「？」

「ふふ、準備運動じゃないのよ、幻想術を使っていたの」

そついう事か。

確か、幻想術は不思議な身体の動きで相手を惑わせて幻覚を見せるのが主な能力だったはずだ。

俺達が準備運動だと思っていたのは、術を使っていたのか……。

どんな魔法でも使いこなす特殊な秋留の今の職業は幻想士である。

「うははははは〜！」

またしてもカリューが興奮してきている。この赤づくめの男達はそれなりに戦闘能力が高いようで、カリューも倒し甲斐があるらしい。

「……あんまり興奮すると危険だな」

「……そつだね、アレ、持ってるんだよね？」

秋留に言われて俺は背中の鞆を確かめる。カリュー用のアレはいつでも使用出来るように、しっかりと鞆の側面に装備されていた。

「大丈夫だ、貰った投げ針はちゃんと持ってきてる」

投げ針。

この針の先端には特別な薬品が塗られている。

「ぐっ！」

カリューの背中に敵の振るったハンマーが命中した。一瞬体勢を崩したカリューだったがそのまま剣を振るって敵の頭を強打する。

「まだまだあ！」

カリューの戦い方が人間離れしてきている。時々四本足で行動している時も出てきた。

「危なくない？」

いつの間にか俺と秋留の後ろに移動してきたクリアが言った。勿

論非戦闘員のシープットとクリアの忠実なペットである赤い毛並みのドーベルマン、紅蓮も一緒だ。

「ちよつとヤバいかもな」

俺は背中の鞆から投げ針を取り出しして構えた。

「うおおおおおおおおん！」

カリューが吼えた。

カリューの鋭い爪が敵の男の顔に斜めの傷をつけ、後方の敵の首筋には鋭い牙で噛み付いた。そして両手で持った剣では同時に二人の敵を殴打する。

「う、うわあああ！」

「ぎゃあああ」

「ひえええ！」

真つ赤な服の男達が顔を真つ青にして悲鳴を上げ始めた。今まで高速動作で姿を消していたマツハも思わず動きを止めてカリューの変わりようを凝視する。

髪の色と同じ、青色の毛並み……獣の顔から飛び出した鋭い牙と可愛げのある耳……。そして感情を表すかのようにご機嫌にフルフルと動いている長い尻尾。

そう。

実はカリューは完璧に人間に戻った訳ではないのだ。興奮状態が続き、体内の獣遺伝子が活発になると獣人化してしまうのだ。

今回は人間に戻ってからはじめての獣人化だ。聖都の腕の良い魔法医から聞かされていたのだが……。

「これが獣人化ですか……」

ジェットが思わず身震いをする。

赤い男達も同様で恐怖に負けそうになるのを抑えながら負傷者を担ぎながら逃げ出し始めた。

「撤回！ 撤回！」

カリューに一番狙われていた手練れの隊長が叫んだ。もう打撲傷やら引つかき傷、牙で噛まれた跡だらけだ。

「うおおおん！ これに懲りたらもうココには来ない事だなあ！
正義感たつぷりのカリューが叫んだ。

顔は凶暴そのものなのでヒーローには程遠いが。ヒーローへの遠
さでいったらマツハと良い勝負かもしれない。

「……」

カリューがその場で立ちすくんでいる。

それを黙って見守る俺達……。

するとカリューは剣を背中に戻して両手をシゲシゲと見つめ始め
た。

興奮すると獣人化してしまう事はカリューには言っていない。言
った途端に興奮して獣人化してしまいそうだったから。

次に自分の両手で顔をペタペタと触り始める。

突き出た口、口から飛び出した長い舌……。

「な、懐かしいか？ カリュー？」

「うおおおおおおおおん！」

俺のトドメの一言でカリューが泣きながら俺達の方へと突っ込ん
できた。

俺は黙って右手に持っていた獣遺伝子を抑える抑制剤入りの投げ
針をカリューの腕に投げ刺した。

第一章 靈獣の親子

「……うーん」

岩にもたれたカリューが唸っている。自分が獣に戻ってしまった悪夢を見ているに違いない。しかし今のカリューの姿は戦闘前と同じ、少しもみあげが豪快なだけのただの人間の姿だ。

「人間にはよくある事なのか？」
『無い無い』

マツハの質問に俺達人間は全力で答える。……ジェットは純粹な人間ではないが。

「……うーん」

まだ唸っている。余程悲惨な悪夢に違いないが、現実もあまり変わらぬぞ。戻って来い、カリュー。

「う、ううう……」

そろそろ唸り声が気になり始めた。暑く苦しい男の唸り声など聞きたくないぞ。

「こら！ カリュー！ いい加減起きろ！」

堪忍袋の緒が切れやすいクリアが叫んだ。

かつてのご主人様の命令により、カリューが飛び起きた。ついでにグッスリ眠っていた犬の紅蓮までもがシャキッとお座りのポーズを取っている。

……カリューもお座りをしている。

「！ お、俺の身体は！」

そう言ってお座りの体勢のまま手足や顔、尻尾が無い事を確認する。

「……はあ、夢だったのかあ」

安心しているカリューに投げ針を見せる。

「あああああ！」

カリューが立ち上がってそのまま逃げようとする。

「カリュー！」

クリアが叫ぶと同時にカリューの身体がその場で硬直した。

「ブレイブもあんまりカリューをいじめないように！」

秋留に注意をされて大人しく投げ針を鞘に戻す。カリューは生気が抜けた顔を俺達の方へと戻した。

「俺は人間に戻ったんじゃないのか？」

その場にドサツと座り込む。

確かに人間に戻ったと思って今日まで約一週間……カリューは人間の姿をどんなに喜んでいただけか。最近では落ち着いたが、戻つてすぐは手鏡を常に携帯して自分の顔を眺めていたからなあ。

一緒に聖都を歩いている時は少し恥ずかしかったが。

「興奮し過ぎると一時的に獣人化する体質になったみたいなの」

秋留が申し訳無さそうに言った。

秋留が罪悪感を感じる必要はないのだ。実はカリューの体質を変えた根本的な原因は、俺が起こしたと言っても過言ではないのかもしれないのだが……過去は忘れよう。

「そ、そんな人間じゃねえ！」

「そうだな」

優しい俺の一言にカリューが激怒して殴りかかってくる。俺はそれを冷静にヒラリと避けた。

『ブレイブ！』

秋留とクリアが同時に叫んだ。ちよつとふざけすぎたようだ。

「もう駄目だ……生きていく気力が無い」

カリューの身体の回りにドンヨリと重い空気が見える。

「カリュー！」

秋留が叫んだ。その声は聞き流す事が出来ない、物凄く威圧感のある声だ。

沈んでいたカリューも秋留の方を見上げる。

「この世界にはまだ沢山の悪が存在するわ！」

カリューと秋留を除く全員が思わずコケそうになった。

しかしカリューは秋留の台詞で少し気力が沸いてきたようだ。

「その悪を放っておいてカリューは平気なの？」

カリューがスクツと立ち上がった。その両目には生気が蘇ってきている。後一息か！

「それにね」

トドメの一押しか？

「獣人化すると身体能力が増大するでしょ？ 上手く制御出来れば悪を滅ぼすための大きな力となると思うけど？」

カリューの両目から炎が上がった……ように見えた。それ程の闘志を感じる。

「獣人化をコントロールか……ふっふっふ」

両拳を見つめカリューが笑い始めた。とうとう精神崩壊を引き起こしたか？

「ブレイブ！」

カリューが俺を指差して叫んだ。何だ？ 精神崩壊したとかいう思考をカリューにまで読まれたか？

「獣人を勝手に馬鹿にするが良い！ 俺はこの力を制御して、この世に平和を取り戻してみせるぞ！」

……なんだよ、そんな宣言かよ……と言いかけたのだが、余計な事は言うな、という目で秋留が俺を睨みつけているのが分かった。

「アア、オマエナラヤレルサ」

「けっ！ 白々しくて気のない返事だ！」

カリューはすっかり自分を取り戻したようだ。冗談も通じるほどに回復してくれたらしい。

「……さて、それじゃあ当面の悪である研究所についてマツハから話を聞こうかな！」

俄然やる気の出てきたカリューが端っこで仲間ハズレにされていたマツハの方を向いた。

「やっと俺の出番か。いつまで茶番を続けるのかと思ったぜ」

こいつはヒーローを目指している癖に口が悪すぎる。……いや、

ヒーローを目指しているというのは俺が勝手に決めた事だが。

「ちゃ……茶番……ま、まあ良い。その研究所ってのはどこにあるんだ？」

いきなり場所を聞くとはいカリユーらしい。場所さえ分かれば後先の事を考えずに施設を破壊しまくって、捕まっている霊獣達を逃がそうとするに違いない。

「場所までは知らねえよ」

マツハの回答にカリユーが落ち込む。場所が分からないという事は情報収集が必要になる。面倒臭がりなカリユーは情報収集などの地味な作業を嫌がるからな。

「奴らの組織の名前はユスティム。以前奴らの施設から逃げ出せた霊獣が言っていたんだが、酷い場所みたいだぜ？」

霊獣の力を利用して対魔族兵器の製造を行っているユスティム研究所。

結局マツハから聞けた情報はこれだけだったが、聖都に戻って情報収集すればもう少し正体が掴める事だろう。

それにしてもマツハの奴、出番を待ってた割りに少ない情報だ。

俺達は美味しい真水などを振舞ってくれたマツハに礼を言つと聖都を目指す為に帰り支度を始めた。

「ああ、そうだ」

俺達を谷の入り口近くまで見送ったマツハが別れ際に突然言った。ちなみにマツハは霊獣っぽい見た目ではないが、限られた環境でしか生きられないという制約には当てはまっているらしい。何があってもマツハはこの地を離れる事は出来ないのだ。

「以前知り合った霊獣親子を最近見かけないんだ」

マツハの話では、この谷に時々訪れてきて一緒に遊んでいた猿の霊獣親子が最近来ないらしい……。

いや、霊獣って一体何なんだ？ 子供とか普通にいるのか？ 一緒に遊ぶものなのか？ 同じ猿同士気が合うのか？

……俺は巻き起こる疑問を頭の片隅に閉じ込めて冷静を保った。

しかしカリューは今にも思った事を全て口に出してしまいそうな顔をしている。

「とりあえず色々疑問はあるだろうけど、話が長くなるから我慢してね」

秋留が優しく諭す。

「母親の名前が炎燐えんりん、娘の名前が煉蘭れんらんだ。クアン平野の中央辺りにある巨木にいるはずなんだが……」

俺達は地図を広げてクアン平野を確認した。どうやらこの谷自体がクアン平野の外れに位置しているらしかった。そういえば水平線まで見渡せる平野の遠くの方に、薄っすらと大きな木があったような気がする。

「聖都に戻る途中で寄り道してみましよう」

全大陸を旅した事があるジェットが俺達のマップ担当だ。ジェットの指は聖都に帰る道を少し外れた場所を指していた。

谷を脱出した俺達はクアン平原中央にある巨木を目指して馬車を進めている最中だ。

ちなみに馬車に乗り込んですぐに秋留から霊獣に関する説明を聞いた。

霊獣は力が強い程、ある程度の環境の違いでも生きていけるらしい。つまり、クアン平原を自由に移動出来る霊獣親子は谷に閉じ込められていたマツハよりは力が強いという事になる。

親子に関しては秋留も頭を悩ませていた。

霊獣の親子なんていう話は聞いた事が無いらしい。色々と雑学から魔法の事まで詳しい秋留が言うんだから相当珍しい事なのだろう。「そろそろ暗くなってきたな。ジェット、適当な場所で今夜は泊まるっ」

リーダーカリューの号令の元、俺達は何もない平原のご真ん中で野営の準備を始めた。

本来はテント設営や馬を繋ぐためにも大きめの木などがある場所

で野営をするのが普通なのだが、この平原には障害物すら探すのが困難な程……何も無い！

こういう時は馬車に積んである杭を地面に刺して、テントや馬を繋げる事になる。まあ、馬については賢い銀星がいるので逃げ出したりする事はないだろうけど。

『いったただつきまーす！』

俺達は仲良く声を合わせて夕食を食べ始めた。近くで狩った猪のようなモンスターの肉とコンスープだ。

「ふ〜！ 身体があつたまるな」

とろみのあるコンスープのお陰で身体の芯から温まる事が出来た。目の前の焚き火も暖を取るには十分だ。

今はもう十二月に入っている。

北の大陸であるこのアステカ大陸は一年を通して寒いのだが冬は更に寒い。十分に防寒対策をして眠りに付かないと一生冷めない眠りになりかねない。

……十二月か。そういえばカリユーの誕生日は十二月だった気がするぞ？ 何日だったかな？

……とにかく、人間として迎えられそうで良かったな、カリユー。

「なんだ、その目は？」

「変な目をしてたか？」

「何かに安心した親のような眼つきをしていた」

カリユーもなかなか感覚が鋭くなってきたようだ。何もかも顔に出やすい俺の心を読もうとした結果に違いないな。そう、俺のお陰だ。

「薪を拾ってきましたぞ」

ゾンビのジエツトが寒そうに焚き火に近づいて来た。死人のジエツトにも寒さがあるのだろうか。しっかりと防寒着を着ているのだが……。ちなみに一緒に薪を探しに行った死馬の銀星の鼻からは豪快に鼻水が垂れている。

……。

……いやいや、さすがに死人でカラカラなはずのジェットでも薪の代わりにするのはマズイだろ！

「……」

秋留が無言で俺の事を睨んでいる。まさか薪の代わりにするとう発想まで読まれていたのだろうか？

「細かい発想までは読めないけど変な事考えてたでしょ？」

「ああ、さすがに酷すぎる事を考えてた。ゴメン」

秋留に指摘された俺はジェットの方を向いて正直に謝った。

「？」

突然謝られたジェットは顔をかしげながら焚き火に薪を放り込んでいく。

「ご苦労さん、じゃあいつも通りジェットは睡眠に入ってくれ」

火に近づいてきたカリューが言った。

夜の早いジェットは野営の時でも真っ先に寝てしまう。お子様のクリアも焚き火の傍でコツクリコツクリと舟を漕ぎ始めている。

「クリア、寝るよ」

秋留がクリアの手を引いてテントに入っていく。

俺も秋留の後を付いていったが、テントの前で突き飛ばされてしまった。

テントは男用と女用で分かれているのだ。それはクリアがパーティーに加わる前でも一緒だった。

「じゃあ、カリュー頼んだぞ」

「おお」

俺はその後カリューと数回会話を交わすと眠気に負けてテントへと入っていった。

テントの中には陶器の入れ物に灰が詰められた簡易暖炉が用意されている。

この辺の設備もこの大陸に来てから購入したものだ。今まで北方面の大陸には来た事が無かったからなあ。冬がこんなに厳しいものとは知らなかった。

俺はスヤスヤと死人のように寝ているジェットの隣で眠りについた。

「皆さん、朝ですぞー！」

ジェットの声で目が覚める。ジェットは最後の見張り当番なので、ついでに朝食を作ってくれる事が多い。

今朝もテントを出ると中央の焚き火ではスープがグツグツと煮えていた。

「ジェット風キムチスープですじゃ」

ジェットは朝から良い笑顔で自信作のスープを指差した。……ジェット風って何風だよ！ という突っ込みは早朝なので元気が無くて出来ない。

俺達は各々ダルそうな顔をしながらジェットの作ってくれたスープで朝食を済ませた。

身体が物凄く熱くなったぞ。凄い効果だ。

「んじゃ！ 出発するぞ！」

ジェットが作ったスープのお陰で元気になったカリューが叫んだ。俺達は号令の元、精力的に準備を進めて日が昇る頃には野営地を出発した。

「モンスターが後方から近づいてきてるな」

出発してすぐに俺は後方から近づいてくるモンスターの気配を察知した。

「まだ少し遠いね」

クリアの台詞の通り確かにまだ遠いのだが、放っておくのは危険そうだ。体長は四メートル位はありそうな大型モンスターだからだ。「馬車を止めて迎え撃つか？」

戦闘大好きカリューが言ったが、危険過ぎるという事で作戦担当の秋留に速攻で却下された。

「荒れ狂う空を縦横無尽に闊歩する雷帝ヴォルトよ、汝の力を大地の民に知らしめ、全ての者に滅びの恐怖を……スプラッシュユサンダ

「！」

秋留が呪文を発動したと同時に、モンスターの上空に発生した真っ黒な雲から雷が落ちた。

「ぎゃおおおおおん」

モンスターの断末魔。

そして大爆発。

「え？」

馬車が大きく揺れた。ジェットが必死に手綱を捌いて馬車を操る。

「……」

暫く馬車が進んだ頃によく爆発が収まった。

「あの魔法ってモンスターを爆発させるんだっけか？」

「そんな効果はないわ」

という事はあのモンスターは死と同時に爆発するような特徴を持っていたのだろうか。

「気をつけないといけませんな。世の中には危険なモンスターが沢山いますぞ！」

「特に馬車を止めて迎え撃とうなんていうのは言語道断だよな」

「うるせえ！」

カリユーが俺の頭をポカリと叩く。

「それにしても……ジェットはよく全大陸を冒険出来たよな」

俺がボソリと呟く。

「ふおっふおっふお。今と同じですじゃ。良い仲間にも恵まれたんですじゃ」

そう言っただけ遠い目をしている。

ジェットの過去のパーティーか。一体どういうパーティーだったのだろう。そもそもジェットの若い頃はどんな感じだったのだろうか。

「奴ら、今頃は何をしているんじゃないかなあ」

「……何も言うのはよそう。」

「見えてきたぞ！」

遠くに大木が見えてきた。この辺りは大岩や小高い丘が多いため
に大木に気付くのが遅かったが……。これは相当なデカさだぞ。

「この木……ワシも見た記憶がありますぞ！」

どうやらジェットはこの場所に来た事があるらしい。何年前の記
憶だろう。

「……心なしか少し暖かくなったんじゃないか？」

カリユーが呟いた。

確かに今までよりは寒さが和らいだように思える。あの大木のお
陰だろうか？

「キキッキイイイイイ！」

大気を揺らして突然モンスター叫び声が辺りに響いた。まるで
俺達を威嚇しているかのようだ。

「もしかして霊獣親子のどっちかな？」

秋留が心配そうに辺りを見渡している。獣の叫び声は前方の大木
の方から聞こえてきたものだ。俺は御者席のジェットの隣に座って
前方を確認した。

「大気が……赤い？」

遠くに生える巨大な木が赤い霧に阻まれて鮮明に観察する事が出
来なくなってきた。しかも辺りの温度は巨木に近づく程に確実に上
がっている。今では厚手のコートが必要なくなるまでに暖かくなっ
てきていた。

「危険そうだね。そろそろ馬車を降りた方が良いかも」

頭脳担当の秋留の意見に俺達は馬車を降りて徒歩用の装備に切り
替えた。念のため防寒着はいつも通り厚手の物を装備していく。

「銀星、留守番頼んだぞ」

「ヒヒーン！」

ジェットが銀星の頭を撫でている。いくらエロ馬でも本当のご主
人様は分かっているようだ。

「準備は良いな？」

前回、蜂モンスターの大群にやられてからは一人で突っ走ること
はしなくなつたようだ。

……クリアのお叱りが効いたのかも知れないが。

俺を先頭にしてパーティーのメンバーは大木を目指して進み始め
た。ちなみに索敵が得意な俺が先頭、魔法の援護が可能な秋留、金
魚のフンのクリアと下僕その一とその二、その隣にジェット、殿を
勤めるのはカリューだ。

「あ、暑いな……」

俺は首元のマフラーを肩にかけるように外した。大木が大分近く
に見える所まで近づいて来ている。今では真夏のような暑さを感じ
るまでになつてしまった。

一年を通して寒いはずのアステカ大陸だが、この辺は常に暑い空
気に触れているせいか、地面の植物も色とりどりなものが多い。

「キイイッ！」

雄叫びと共に突然遠くから人間大の岩が放り投げられた。俺は両
手に構えたネカーとネマーを乱射して岩を砕く。

パーティー全員が一斉に戦闘体勢に入る。

「五十メートル位先から放り投げてみたいだぞ！」

俺達は大木の中央目指して走り始めた。

その間大岩や普通サイズの地面から引っこ抜いたばかりの新鮮な
木が、空から際限なく降ってくる。それを俺が銃で打ち砕いたり、
カリューが剣で切り裂いたりしながら攻撃地点を目指す。

「ウウウウウ……」

まるで火山口にいるかのように辺りは真っ赤になつているがその
中心に身長三メートルはありそうな獣が俺達の事を威嚇していた。

いや、実際の身長は二メートル位に違いない。全身を真っ赤な炎
で覆っているために大きく見えるのだろう。

炎に包まれた本体は猿のように見える。

「え〜っと……マツハの言っていた霊獣親子のどっちかかなあ？」

あまりの暑さに秋留の顔からも大粒の汗が垂れている。頭も朦朧

としているようだ。

「マ、マツハ……お前ら、マツハに何をしたあああ！」

「喋った！」

マツハに引き続き突然喋った事に少し驚いたが、それどころでは無かった。

火炎猿の叫びで開かれた口が何かを放出するかのようには俺達の方に向けられている。

「避ける！」

叫ぶまでもなく、冒険者の中では中堅レベルである他のメンバーは目の前の火炎猿の行動で危険を察知してその場を離れる。クリアとシールドはジェットが両脇に抱えてその場を離脱した。

その一瞬後に俺達の立っていた場所に火炎猿の吐いた火球が炸裂した。

猿の放った火球はどういう仕組みか地面の草花などを焼かずにはに四散する。そういえば火炎猿の全身は激しく燃えているのに両足の下草花も無事なようだ。

「キイイイッ」

火炎猿がジェットに飛び掛る。

「ぬううう！」

何とか炎の拳を避けたジェットだったがその身体が一気に燃え上がった。

……やっぱり良く燃える。

俺は雑念を速攻で捨ててネカーとネマーで火炎猿の足元を狙った。そう、傷付けに来た訳では無いのだ。

しかし火炎猿の身体に届く前に硬貨が燃え尽きてしまった。

「ちっ、普通の硬貨じゃ熱に弱いか！」

火炎猿が俺の方を睨み付ける。

ヤバイッ！

俺は火炎猿の飛び出す瞬間、脚の運びなどに意識を集中して、距離を大きく保つように回避行動を取った。

「うあつ！」

何とか火炎猿の突進の直撃は避けたが、攻撃に一番近かった左足が燃え上がった。

俺は咄嗟にコートを脱ぎ去り左足の炎を叩いて消した。しかしこの足ではもう素早い動きは出来そうにない。

「ウキヤアアア！」

「え？」

火炎猿の口から俺に向かって今にも火球が飛び出してきそうだ。

だ、駄目だ！ この足じゃ避けられない！

『ブレイブ！』

残りのメンバーが叫んだ。

俺の視界には火炎猿が放った火球がスローモーションのように近づいてきているのが見えた。

「ブレイブ！」

秋留の二回目の叫び声が聞こえる。

俺は自分の身体を包み込む炎の中から薄っすらと秋留の姿を確認した。

まだ生きている。

咄嗟に脱いでいたコートで火球を防いだのだ。身体のうちこちは重度の火傷を負ってしまったようだが、このコートのお陰で何とか即死は免れたようだ。このコートを売ってくれた怪しい男に感謝しないとな。

俺はコートを振り回して身体にまとわり付いた炎を吹き飛ばした。

「カリュー、少しで良いから時間稼いで！ でも相手を傷付けちゃ駄目だよ！」

火傷によりその場に倒れ込んだ俺の元に秋留が駆け寄ってきて片膝を付く。

「この者の中を流れる生命力を司る精霊よ……」

秋留は数種類の魔法系職業に就いた事があるのだが、回復魔法が得意な司祭の素質は無いらしい。今唱え始めた魔法は攻撃魔法主体

のラーズ魔法のうち、数少ない傷を癒す事が可能な……。

「その力を集結させ傷を癒したまえ、ライフスパイラル！」

俺の身体から痛みが引いていくと同時に体力がドツと吸い取られた感じがする。

ライフスパイラルは身体に残っている生命力を傷の治療に回す手荒な魔法だ。お陰で俺は指一本動かす事が出来なくなってしまった。「ちっ！ 傷付けずに時間稼ぎなんてっ！」

カリューが火炎猿の前をチョロチョロとしている。避ける事に全神経を注いでいるようだが、少しでも近づかれる度に火傷を負っているようだ。

「こらっ！」

俺の回復を終えた秋留がその場にスクツと立ち上がった叫んだ。目の前で戦っていた火炎猿が思わずビクツとする。

「何で攻撃してくるのよ！ 私達はマツハから炎燐と煉蘭の様子を見てきて欲しいって頼まれただけよ！」

お、秋留にしてはよく火炎猿親子の名前を覚えていたな。

……手のひらを見ている。どうやら火炎猿親子の名前を忘れないように手のひらにペンで書いていたようだ。

「キツキー！ 人間なんて信用出来ないiiiiiiiiiii！」

火炎猿が右手を地面に付きたてて、土の塊を秋留に投げつけた。

「！ 避ける！ 秋留！」

秋留は飛んできた土の塊を全く避けもせず、頭にダメージを負ってしまった。額から血が吹き出たが全く気にする素振りをみせない。秋留は何をやっているんだ！

俺は地面に身体を横たえながらもネカーとネマーを構えて火炎猿を攻撃しようとした。

「駄目ッ！」

「？ 何でだ！ ちょっとでも反撃しないと！」

秋留が俺の事を睨み付ける。

……何か考えがあるに違いない。ここは秋留に任せるしかないな。

「私は何もしないわ。信じて……」

火炎猿に秋留は優しく語り掛ける。

「うつききいいいい！ うるさああああい！」

再び火炎猿が土の塊を秋留に投げつける。今度は秋留の左足にぶち当たった。

「うっ」

秋留が地面に膝をついた。

「うきうつききききき！ 反撃して来い！ 人間なんて皆ブチ殺してやるうっうっ！」

苦しそうなうめき声を挙げながら秋留が火炎猿の方に顔を向ける。その顔には一方的に攻撃してきている火炎猿への怒りは全く無い。ああ、慈愛の天使秋留……。

どうしてそんな優しい顔が出来るんだ。その顔、俺にもしてくれないか？

「う……うつき……」

心なしか火炎猿の纏っていた炎が小さくなってきたようだ。あの炎は感情を表しているのだろうか？

「様子を見に來ただけだから……大丈夫なら良いんだ。もう帰るからさ」

痛む足を庇いながら秋留が何とか立ち上がった。

そして俺達の方を向く。

「帰ろう。後ろで暑さでバテてているクリアと紅蓮とシープットのためにも」

あ、存在忘れていたぞ。

俺は顔を反対側に向けた。確かに大きめの岩の陰でバテている二人と一匹が見えた。

「ま、待って！」

火炎猿が言った。その身体からは炎はほとんど放出されていない。しかし辺りの気温はそれ程下がっていないようだ。

「マッハ様と出会ったのでしょうか？ 貴方は召喚士では無いのです

か？」

今までとは違って随分と喋り方も落ち着いたものだ。

同一人物？ とは思えない。

「幻想士だけど召喚魔法も使えるんだけど……。マツハも呼び出せるわよ？」

そう言つと目の前の火炎猿は大きな目をキラキラとして喜び出した。

「うきやきやきやきや！ 呼んで！ 呼んで！」
うっ！

喜び過ぎて火炎猿を包む炎がまた勢いを増したようだ。もう少しの辛抱だ。

そしたらこの心身ともにホットな猿ともオサラバ出来る。

「不可視な超人マツハよ、我が前にその姿を現せ！」

呪文の詠唱が終わると秋留の目の前の空間が歪んで、昨日出会ったばかりのマツハが姿を現した。

「……お？ ん、煉蘭殿ではないですか……」

マツハが少しビビッているのが分かった。

そして煉蘭と呼ばれた火炎猿がマツハに抱きつく。

「マツハ様あ！ 会いたかったよ〜！」

「うおおおおおお！ 暑い！ 煉蘭！ それは勘弁してくれ〜！」

マツハは叫ぶと同時にその場から姿を消してしまった。

高速で移動したのだろうか。

「マツハ？ マツハどこおお！」

煉蘭が辺りをキョロキョロとしている。見つけ次第殺してしまいそうな剣幕に見える。

「召喚魔法だから……。あんまり長い間呼び出しておく事は出来ないの。ごめんなさい」

秋留が申し訳無さそうに言っている。

もしかしたらもう少し長く呼び出せるのかもしれないが、マツハの事を心配して返した可能性が大きい。

「……少しの間だけど安心した。まだお互い無事だったんだ……」

煉蘭は安心したのか、その場にドスンと腰を下ろした。

「無事？　じゃあ貴方の所にも赤い制服の男達が？」

秋留が言っていると煉蘭の纏う炎が大きく膨れ上がった。

「キキッキイイイイイ！　やっぱりお前たちもおおおおお！」

俺達は咄嗟に煉蘭から離れた。こいつの情緒不安定な所はどうにかならないのか！

「煉蘭や……」

巨木の方から近づいてきていた別の火炎猿が優しい声で問いかけた。煉蘭よりは一回り大きいように見える。……という事は目の前の煉蘭の親である炎燐か？

「お母さん！　動いちゃ駄目だって言ったのに！」

煉蘭は怒鳴りながら親の方へ慌てて走って行ってしまった。

暫くすると煉蘭に付き添われるようにして大きな火炎猿が俺達の前まで進んできた。親の方は身体が不自由なのだろうか。全身から発せられる炎もどこか弱々しい。

「煉蘭がご迷惑をおかけしました……」

「取り乱してごめんなさい」

親子揃って俺達の方に頭を下げている。

「マツ八様と契約なさったのなら、悪い人達では無いのでしょうか？　隙の無い鋭い目つきで親、母親だろう、が俺達の姿を観察している。娘と思われる煉蘭とは性格が正反対なようだ。」

ちなみにマツ八を霊獣として操っていた魔法剣士は良い奴とは言えなかったが……。あいつは元々悪い妖精　のせいで道を踏み外してしまっただけだからかな。

「マツ八が心配していたので様子を見に来たのですが……体調を崩しているのですか？」

心配そうに秋留が炎燐の身体を確かめている。炎が弱い事に秋留も気付いたのだろう。

「……赤い制服の人間達に捕まりかけて……」

そう言って炎燐が俺達に背中を見せる。その背中には大きな刀傷が付けられていた。

『酷いっ！』

秋留とクリアが同時に叫んだ。

「同じ人間として恥ずかしいぜ……」

悪を嫌うカリューは目に炎を浮かべて拳を握り締めている。あまり興奮すると獣になるぞ。

「ピシッ」

「パシッ」

赤い制服の奴ら、ユスティム研究所は亡霊カップルにまで罵られているようだ。

「俺達は捕まっている霊獣達を解放する！ 奴らの施設も破壊する！」

勿論正義感たっぷりと言ったのはカリューだ。

「……」

炎燐と煉蘭が俺達の事を見つめて黙り込んでしまった。急にどうしたのだろう。

「貴方達の強さは煉蘭との戦闘で見させて頂きましたが……危険過ぎます」

『！』

決して自分達の力を過信している訳ではないのだが……ユスティム研究所の奴らはそんなに強いのだろうか？でも、マツハをさらおうとした赤制服の奴らは俺達の、いや主にカリューの力で追い返したけどなあ。

「赤い制服の男達の中には特殊な能力を持っている者がいます……」

特殊な能力？ 強力な魔法が使える奴がいるという事だろうか？

「奴らは、人間を辞めてしまっています」

……。

……。

俺達は無言でカリューを見つめてしまった。

「お前ら皆殺しにされたいか？」

カリューがプルプルと両拳を握って怒りを抑えている。

思わず秋留も釣られてカリューを見つめてしまった失態をセキで誤魔化して炎燐に向き直った。

「ゴホンツ。人間を辞めてしまったというのは、例えば獣人化するとか？」

「秋留、その例えは露骨過ぎるだろ！」

カリューのツツコミを無視して秋留は真剣に炎燐と煉蘭を見つめる。その真剣さに火炎猿の親子もカリューが騒いでいるのを無視する事にしたようだ。

「獣人化する人間など聞いた事はありません。奴らはもっと人間らしい姿のまま……」

「獣人化する人間はここにいないぞ！」

カリューが秋留と火炎猿の親子の間に割って入ろうとする。自分の存在を認めてもらいたくしてしようがないようだ。

俺は黙ってカリューをその場から引きずり出した。

これ以上、話の邪魔をすると内容が理解出来なくなる。

「続けて下さい」

俺は睡眠薬も兼ねている獣人化抑制用の針を突き刺して大人しくなったカリューをロープでグルグル巻きにしながら先を促した。

「奴らは人間と他種族との合成を行っています」

「なっ！」

炎燐の台詞に大声を上げたのはジェットだった。穏便な方のジェットは突然立ち上がり今にも爆発してしまいそうな形相で炎燐を睨み付けた。

「ワシら人間は己でバサク種を作っていると言う事か！」

バサク種という言葉を知っている者、俺や秋留はその叫びに思わずドキリとした。勿論、スヤスヤと眠っているカリューもバサク種については当然知っている事だろう。

冒険者になって最初にブチ当たる大きな壁……それがバサク種と

言われるモンスターだ。いや、モンスターと言うのもはばかれる。

……バサク種とは魔族に改造された人間を指す。

魔族は襲った村などから活きの良い人間を攫い、モンスターとして改造してしまう事があるのだ。

魔族は人間を食らう。

その時、抵抗の激しい人間や味の悪い人間はバサク種に改造されると言われている。

そのバサク種の外見はまだ人間としての面影を残し、バサク種によつては人語がそのまま残っている場合もあると言つ。

「……これは大事になって来ましたな」

「……」

さすがの秋留も苦悶の表情を浮かべて言葉が出なくなっている。

「これは俺達冒険者だけじゃ解決出来ないな。治安維持協会の協力が必要じゃないのか？」

対モンスターや魔族を相手にしている組織が、魔族討伐組合。

対人間を相手にしている組織が、治安維持協会と一般的には相場が決まっているのだ。

それに、このままユステイム研究所に攻め入つたのでは、何も見返りが期待出来ない。一番簡単に金を稼ぐには冒険者組合からのクエストとして仕事を行う事なのだが……。

「とりあえず、ユステイム研究所の場所も分からないし、アームステルに戻つて情報収集しよう」

秋留の言う通り、色々悩んでも解決はしそうにない。

アームステルの魔族討伐組合に行けば、ユステイム研究所に関するクエストが見つかるかもしれないしな。

「……そうですね。他の人間達と協力すればあるいは……」

そうだった。

俺達の手だけではユステイム研究所の奴らには勝てないと炎燐に言われていたのだった。

「なあ？ 単なるバサク種のようなものじゃないのか？」

俺の質問に炎燐が黙り込む。

「ブレイブ、何で奴らが霊獣をターゲットにしているか分からないの？」

炎燐の変わりに秋留が答える。

なぜ、霊獣を捕まえようとしているか？ バサク種のような奴を作るためじゃないのか？

「そうか！ バサク種とはモンスターと人間の合成や、魔族の遺伝子が組み込まれた人間を指す……、奴らは霊獣との合成を狙っているのか！」

霊獣は一般的に強大な力を秘めている場合が多い。その霊獣の力を人間が得る事が出来れば……。出来れば？

「奴らは何を目的に、人間と霊獣の合成など行っているんだ？」

「……対魔族への力とするためじゃないかなあ」

秋留が言った。やはりそうなのだろうか。

しかし……。

「魔族に勝つために魔族と同じ事をするなぞ！ 愚行にも程がありませんぞ！」

再びジェットが叫んだ。

そうだ。

一刻も早くこんな事は止めさせなくてはならない。いくら金が大事だからと言って俺にも善い事と悪い事の違いは十分に分かっている。

俺達は火炎猿親子に別れを告げると、元気を取り戻したクリアとシープット、それに未だに寝ているカリユを引きずりながら馬車の元に戻り始めた。

「もう一回、マツ八様を呼べない？」

すっかり秋留に懐いた煉蘭が俺達の隣を歩いている。今は気持ちが悪く落ち着いているせいか、傍に煉蘭が居ても少し暑い位で済んでいる。

逆にこの寒さから俺達の事を守ってくれていた。

「うーん、魔力があんまり回復してないから、ちょっと無理かなあ……」
「嘘だろうな。」

秋留の強大な魔力があればマツハの十人や二十人なら簡単に召喚出来るだろう。まあ、あの暑苦しいヒーロー猿が十人も二十人も居たら相当にウザいだろうが。

「……秋留さん、私のこの力、是非役立てて下さい」
そう言った煉蘭の身体から光が秋留の中へと入っていった。

これで秋留はマツハと煉蘭を召喚出来るようになったという事が。戦力的には大幅なアップが出来たと言って良いだろう。

「ありがとう、煉蘭」

暫く進み、俺達は馬車の元へと帰ってきた。

「う、うーん」

カリユートの事を縛ったロープがブチブチといいながら千切れた。一応、モンスター捕獲用に購入した鉄線入りのロープだったんだけどな。

ま、カリユートはある意味、モンスター以上だしな。

「よく寝たぜえ！ ってブレイブ！ 俺に何かしただろ！」

「話を進める上でしょうがなかったんだ」

俺の即答にカリユートが思わず言葉を呑む。自分でもしっこかったと思っただろう。

「皆さん、出発しますぞ。少しでも早く奴らを止めないと、罪の無い霊獣が襲われる危険が増しますしな！」

ジェットが既に御者席に座って手綱を握っている。

「カリユート！ ブレイブと遊んでなくて良いから早く馬車に乗って！」

クリアの叫びにカリユートが勢い良く馬車に飛び乗る。

「ぶ。ぶっ」

笑いかみ殺した俺の顔をカリユートが睨み付ける。俺はそれをシカトして同じく馬車へと飛び乗った。

「それでは、皆さん、お気をつけて」

進みだした馬車を手を振って煉蘭が見送る。クアン平原の終わりまで見送りたかったようなのだが、あまり母親である炎燐を一人にしておくのは危険だ、という秋留の意見を煉蘭は素直に聞き入れた。「必ず、こんな事は止めさせる……」

寂しそうな煉蘭の姿を見ながら秋留が呟く。

煉蘭と別れた俺達の馬車を囲む空気が一気に寒くなってきた。ユースティム研究所……必ず奴らの組織を壊滅させて、たんまりと金を稼がせてもらおうぞ！

俺は身体からの熱気が逃げないようにコートの襟元を閉めると、揺れる馬車の上で眠りについた。

第二章 改造

「地味だあ〜」

隣を歩くカリューが呟く。

確かに情報収集は地味だが、冒険を進める上で重要な行為でもある。

冒険に出発する時にもパーティーのメンバーにはそれぞれ役割分担がある。俺は魔族討伐組合でクエストを受けたり、情報収集する事が多い。

一方、頭を使ったりする事が苦手なカリューは、消耗品の買出しや武器、防具の補充など、どちらかと言えばあまり頭を使う必要の無い事を担当している。

「さつきから地味地味五月蠅いな！」

俺はカリューに怒鳴った。

「お前はいつもこんな地味な事してるから、そんな地味な顔して地味な服装になっちまうんだ！」

確かにあまり特徴の無い顔と全身真っ黒のスーツ姿がベースではあるが、何て失礼な奴だ！

「確かに獣人化するような派手さは俺には無いな」

我ながら見事な切り返しにカリューが黙る。

霊獣をゲットする旅から戻ってきた俺達は、各自アームステルで情報収集する事になったのだが、そこでなぜかカリューのお守りまで押し付けられてしまい、むなしく歩き回っている。落ち着きのないこいつのお守りなんてしたくないぞ！

「お、あそこに変わった武器屋があるぞ？ 何か特別な情報が得られるかもしれないな！」

そう言っただけでカリューが勝手に武器屋に向かって歩いていく。

子供じゃないんだから、勝手にチヨロチヨロするな〜！

「いらっしゃい〜！」

早歩きで店内に入るカリュー続いて店のドアを開けた。入り口横のカウンターから若い男の店員が声をかけてきた。

店内は薄暗く、カリューの言う通り、変わった武器が並べられている。

「ユステイム研究所って知ってるか？」

カリューは店内で武器を眺めている。あの野郎〜！ やる気全く無しだな！

ちなみにあまり会話が上手く運べない俺は、情報収集が苦手だ。

直接金に関連してくる魔族討伐組合でのクエストに関する情報収集などは良いのだが……。

「ゆすり研究？ 兄ちゃん、詐欺にでも手を染めるのかい？」

俺はちゃっかり新しい短剣を買っていたカリューを引きずって店を出た。

「またハズレか。情報収集の仕方が悪いんじゃないのか？」

「お前に言われたくないわ！」

俺はカリューの頬をグーで殴った。……頑丈な顔をしていやがる。俺の手が少し痛くなったぞ。

「お！ あっちの防具屋は安売りしているみたいだぞ！」

「お！ マジか？」

金大事な俺は安売りや限定品などの言葉に弱い。俺はカリューと先を競うように閉店安売り中の防具屋に向かって走り始めた。

「なかなか良い情報は無いもんだなあ」

「……まあな」

俺達はアームステルの外れ、城壁近くの喫茶店で休憩していた。

カリューが座っている椅子の両側には武器や防具がギッシリと詰まった買い物袋が置かれている。

この大荷物を秋留やクリアが見たら何ていうだろうか……容易に想像が出来る。

「はあ……」

思わず俺の口から溜息が出た。

「参ったな」

カリューが言った。俺の溜息はカリューの荷物を見てついたものだぞ？ ちなみに俺の椅子の隣にも小さな紙袋が置かれている。良い小手が手に入ったんだ。

「おい」

ミルクと砂糖をたっぷり入れた紅茶を飲んでみると、後方から声をかけられた。盗賊の俺の耳は大分前から何者かが近づいてきているのを捉えていたため、すでにこつそりと銃を構えている。

ちなみに、そんな動きを察したカリューも何気なく剣に手をかけているようだ。

「あんたら、ユステイムを探しているんだって？」

銃を持つ手に力が入る。

「……何か知っているのか？」

「ああ、求人情報誌に載っていたぞ？」

……。

……………。

「おい、ブレイブ！」

カリューに突然声をかけられて放心状態から復活した。どうやらあまりのショックに意識を失っていたようだ。目の前ではカリューが先程の男から受け取った無料の求人情報誌を眺めている。

「アームステルにも出張営業所があるみたいだぞ？」

ユステイム研究所……そんなに堂々と改造するための人間を集めているのだろうか？

「でもなあ。ユステイム郵送会社……なんだけど？」

「え？」

ユステイム郵送会社。魔族討伐組合にも登録されていないごく普通の企業のような。

俺とカリューは念のため買い込んだ荷物を一度宿に預けて、再び

アームステルの街へと出かけた。

今日は眩しい程に太陽が照り付けているが、相変わらず寒さが和らいでいない。

俺はコートの前を閉じながら周りを見渡した。

「結構、中心街に近い場所にあるな、ユステイム郵送会社……」

カリューが求人情報誌を片手に道を歩いていく。まるで仕事を探しているようにも見える所が情けない。

「カモフラージュ……」

「かもな」

俺は腰に装備した両銃をしっかりと確かめた。マガジンにも弾となる硬貨が一杯まで装填されている。

「その角を曲がった所だ」

辺りには買い物客や行商などの姿が見える。いたって普通の通りである。

そんな場所にユステイム郵送会社はあった。

真っ赤な屋根に真っ白な壁。いかにも頼んだ荷物をきちんと郵送してくれそうな建物だ。

今も大きな荷物を手押し車に積んだオバさんが入っていく所だ。

「カモフラージュだとしても実際に郵送もしてみたいだな」

カリューが近くのゴミ箱に求人情報誌を投げ捨てて言った。もうあの情報誌の役目は果たし終わっただろう。

「どうする？」

「荷物を郵送してもらおうフリをするか？」

「獣人にもなる人間をこの世の僻地に郵送してもらっ……」

そこまで言った俺にカリューが拳を繰り出してきた。それを冷静に避ける。

「冗談だよ。無難に求人情報誌を見て来た、と言えば問題無いだろう？？」

俺の台詞にカリューが自分の格好と背中に装備した剣を見る。

「武器、防具を付けたこの格好でか？ 一目で冒険者と分かるだろ

？ 冒険者が仕事無くて郵送会社で仕事を探すのか？」

こいつ頭の中が筋肉で詰まっている癖に鋭い事を言いやがる。

でもそういう事に気がつくなら、宿屋に戻った時にどうするのか
決めとけ！ 一応リーダーなんだし！

「まあ、入ってみれば分かるか。怪しい事してるなら、俺達の姿を
見れば何か反応があるかもしれないしな」

カリユーは言ったが、郵送会社は実は冒険者と深いつながりがある。

大荷物を持ち歩けない冒険者は、冒険者用の倉庫を借りている場合が多い。その倉庫にまとまった荷物を郵送会社を通して送る事が多いのだ。

しかしこの場で話し合ってもしょうがない。寒いしな。

俺達は比較的綺麗なユースティム郵送会社の扉を開き、中に入ってしまった。

店内はそれ程広くなく、客も先程入っていったオバサンの他に一人しかいない。

目の前のカウンターの向こうには郵送を待つ荷物が山のように積み
まれている。

「どのようなご用件でしょうか？」

入ってきた俺達に店員の一人が近づいて来た。真っ黒の髪を頭の上で縛った三十歳位の女性だ。

俺達冒険者の姿を見ても特別に警戒しているようには見えない。

「求人情報誌を見て来たんだが」

カリユーが言った。

「……」

目の前の女性が俺達の上から下を眺める。

「配達員かしら？ それは助かるわあ！」

そう言っただけで女性店員は右手にあったドアを開けて奥へと俺達を案内し始めた。客の往来が激しい表とは違って、通路は薄汚れ、脇に

はダンボール箱などが高く積み重ねられている。

「あはは。掃除要員も足りないのよねえ」

俺の視線を感じてか、女性店員が照れるように言った。

暫く歩いて俺達は左手にあった扉の中に案内された。店員用の休憩室のようだ。

「今、店長を呼んでくるわね」

俺達を休憩室の椅子に座らせると、女性がドアの外へと消えていった。

「……………どう思う？」

「うん、俺は年上はあまり好みじゃないな」

俺は思わずズッコけた。

「お前の好みを聞いてるんじゃない！」

と大ボケカリューに突っ込んだが、カリューの好みは年下だったのか、と少し納得している自分が悲しい。

……………秋留も年下だからな。まさか……………。

「あつはつは、冗談だよ、そんなに真剣に考え込むな！ それより、ここはあまり研究所っぽくないよな」

「冗談？ 一体どこまでが冗談だったのだろうか？」

……………と俺は雑念を捨てて、とりあえず休憩室の中を観察し始めた。いくつか並んだ従業員用のロッカーと灰皿の置かれた目の前のテーブル、遠くに掛けられたカレンダーにも特別な情報は書かれていない。

「まあ、大概、研究所とか悪の組織は地下に作られているもんだからなあ」

どこから仕入れた情報だがは不明だが、カリューが呟いている。地面の下を覗んでも何も見えんぞ〜！

その時、休憩室のドアが開いて、またしても一人の女性が現れた。眼鏡をかけた……………う〜ん、また三十歳位だろうか？ 俺と同様に童顔なのかもしれないが、もしかしたらもっと年かもしれない。

「店長のミザと言います」

『どうも』

俺とカリューは同時に会釈をした。その間もいつでも武器を取り出せるように警戒しておく。

「えーっと、冒険者の方々でしょうか？ 配達員として働いてくれるのかしら？」

俺とカリューは顔を合わせた。

「ヤバイ、何を話すか全く考えてなかった。」

「ああ、まあ」

カリューがかるうじて答えた。こんな時に秋留がいてくれれば抜群の話術で相手から色々と情報を聞き出してくれるはずなのだが……。

「そう！ 貴方達腕っぷしも良さそうだし、立派な配達員になってくれそうね！」

胸の前で両手を握り合わせてミザが嬉しそうにしている。

「ちなみにどういふ場所に配達に行くんです？」

何か情報が得られるかもしれない。とりあえず色々質問すれば一つ位はユスティム研究所に関する事が分かるかもしれない。

「うちはアステカ大陸全体をカバーしているわ。他の大陸への荷物は港から別の支店に送られるから、この大陸を越えて配達する事は無いわね」

うーん、特に研究所に関する情報は引つかからないな。

「どういふ物を運ぶんだ？」

お、カリューの質問はなかなか良さそうだぞ！

「うーん、大きさもマチマチだし重さもそれぞれね。中には重要な物とかもあるから気をつけてもらおう必要があるわ」

「重要なものって？」

俺は咄嗟に質問した。

その食いつきっぷりにミザが不審そうな顔をする。ヤバイ、急に食いつきすぎたか！

「お客さんの秘密は守らないといけないから、詳しい事は言えない

わ……」

ミザの顔が何かを怪しむように曇っている。

何とかしてフォローをしないと……。

「人間を運んだりするのか？」

オブラートに全く包みもしない台詞をカリューが口走った。アホ
く！

「なっ！ そんな事しないわよ！」

そう言っただけで目の前のミザが席を立った。やはり怒らせてしまった
ようだ。これ以上の情報収集は……。

「お前、タダの人間じゃないだろ？」

カリューの台詞に俺は両銃を手にしてソファーから飛んだ。

カリューが素早く背中から剣を水平に振るう。

「はっ！」

目の前にいたミザがカリューの攻撃よりも早く頭上に飛ぶ。そし
て部屋の天井の角にピタリとへばりつく。

「……何で分かった？」

俺は小声でカリューに聞いた。その間も両銃をミザに向ける事を
忘れない。

「少し嫌な感じがした」

野生の勘という訳か。獣人になった事で神経系統が根本的に人間
とは異なってしまったのかもしれない。俺には普通の人間にしか見
えなかったのだが。

「どこからバレたのかしら……」

天井の隅からミザが聞いてきた。この身のこなしは常人では有り
得ない。ユスティム研究所の者か？

「……まあ、いいわ。活きの良い実験体を探していたしね……求人
出していた甲斐があったわ」

全く、笑えない冗談だ……。

ん！

「カリュー！ 壁っ」

俺は叫びながら床を蹴って短剣を構えた。壁に突き立てるために。ミザの台詞と共に床の下で不穏な音を聞いたからだ。そして轟音と共に部屋の床が全て抜けた。

置いてあったテーブルやソファ、それにロッカーが全て地下の闇へと消えていく。

そして、カリューも。

「アホブレイブ！ 壁っ、だけじゃ意味が分からんわああ……」
そして、鋼鉄の壁に跳ね返された黒い短剣を握り締めながら、俺もカリューの後を追って暗闇へと落ちていった。

「このアホカリュー！ あんなストレートに聞いたりするからこうなるんだ！」

俺はカリューの方は見ずに罵る。

「悪の手先と交渉する術は持たん！」

カリューの応答に俺は投げれる物を探して辺りを見回したが、勿論何も見つからない。銃をぶっ放そうか迷う……。

「ちつくしょー！」

俺は頭上を仰いで叫んだ。頭上だけではなく、俺達の四方八方が全て頑丈な鋼鉄製の檻で囲まれている。

やられた。

ミザはユスティム研究所の関係者だったようだ。

そしてあの郵送会社も研究所に関連していたようだ。時々やってくる活きの良い奴を選別するための施設として……。

いや、普通に郵送業務も行っているのだろう。

ミザも俺達が普通の冒険者なら配達員として雇うつもりだったに違いない。交渉術、話術に長けていない事が悔やまれた。

「情けない……」

怒りを鋼鉄の床にぶつける。

「……おい、ボキッって音がしたぞ」

「放つとけ」

俺は痛む拳をさすりながらカリューに答えた。

「……い！」

「……い！」

「……おい！」

……うーん。誰だ、俺の眠りを妨げる奴は。

瞼を震えさせながら俺は眼を開けた。

「うっ、眩しいなっ」

世界が真っ白になっている。何も見えない。俺は手で影を作ろうとしたが、体が異様に重たいせいかな身動きが取れない。

「ブレイブツ！ しっかりしやがれ！」

この五月蠅くて耳障りな声はカリューだな、気持ち良く寝ていたのに……。

「このハゲっ！」

「！ てめえ！ カリュー！ 誰がハゲだあ！」

勢い良く起き上がったせいで、固定されていた金属製の椅子がガコンツと動いた。……固定？

「うわっ！」

誰とも知らない男の叫び声が聞こえた。その後、一瞬こめかみに鋭い痛みが走る。

「いつ！ 何しやがる！」

俺は見えない何かに拳を振り上げようとしたが、相変わらず何かに縛り付けられているようで体が動かない。

それでも徐々にこの明るさにも慣れてきた。

辺りがボンヤリと見え始める。先程の痛みのせいかもしれない。

俺の目の前では巨大なライトが俺の体全体を照らしている。眩しい訳だ。そう、まるで手術台のようだ。

……。

ま、まさか……。

俺の隣には『しまった』という顔つきで、白衣を着た男が注射を持って佇んでいる。

「ブ、ブレイブ！ 大丈夫かつ！」

俺は体中をアドレナリンが駆け巡るのを感じながら、カリユーの声ができる方、左に顔を傾けた。

カリユーも金属製の頑丈そうな椅子、俺の椅子よりも何倍も頑丈そうに見える、に縛り付けられている。

「問題無いですか？ カミングス？」

「あ、ミザ支部長、検体が突然大声を上げたせいで、ナノゲノンが頭に注入されてしまいました……まあ、大丈夫かと……」

ミザ……支部長？ 今はヘンテコなヘルメットを被っているせいで顔を確認する事は出来ないが、壁にへばり付いて俺達を嘲笑ったあのミザか！

やはりコイツはユスティム研究所に関係があったのか。しかも支部長と呼ばれているということは、それなりに地位が高そうだ。

……って冷静に状況を判断している場合ではない。

俺はコイツらにナノゲノンとかいう変な薬を頭に注入されてしまったのか？ 先程のあの鋭い痛みは……。

「うおおおお！ 貴様らあ！」

放心している俺の隣でカリユーが唸り声を上げ始めた。その声がドンドンと野性を帯びていく。

「ブレイブに何してやがるううう！」

金属が割れる音が部屋に響いた。

「また暴れ始めたぞ！」

「麻酔ガスを噴出させる！」

辺りが白いモヤに包まれ始めた。俺の意識が遠ざかっているのか、麻酔ガスのせいなのかは不明だが、俺は再び深い眠りへと落ちていく。そうか、あの鋼鉄の箱の中でもこのガスを吸わされたんだな……。

「うおおおおおんっ」

意識を失う寸前でカリユ一の雄叫びが聞こえた。

そして鈍い痛みと共に俺は空中へと投げ飛ばされた。

「ブレイブッ！ 何とかしてくれ！」

どうやら金属椅子に縛り付けられていた俺を無理矢理引き剥がしたようだ。お陰でベルトで固定されていた四肢と腰に激痛があるが、そのお陰で意識が少し戻ってきた。

しかも椅子から引き剥がして空中に投げ飛ばしてくれたお陰で、まだ汚染されていない空気を肺に入れる事が出来た。

集中だ。

チャンスは一瞬。

恐らく俺の武器などは外されているだろう。確かめる必要は無い。白いモヤに包まれてはいるが、大体の人間の位置は一瞬で確認出来た。

カリユ一は麻酔ガスが直撃して今にも倒れこみそうになっている。その向こう側の大きな扉の両脇に、銃を構えた兵士が二人警戒しているのが見える。

俺は上空で体勢を立て直して右手を天井から下がるライトへと伸ばした。

勿論、ただのライトに人間の体重を支える程の強度は無いため、脆くもライトが外れる。

「馬鹿めっ！ ライトにぶら下がるなんて出来る訳無……」

「知ってる、さっ！」

別の場所で何やらモニタを監視していた白衣を着た男の台詞が終わる前に、俺はライトを男の腹にめり込ませた。

「うっ！」

ミゾオチを狙った。暫くは呼吸が出来ない事だろう。

俺はそのままその男を盾にするように後ろに回りこんだ。男の体に何か打込まれたのが分かる。恐らく扉の両脇に居た兵士が俺を狙って発射した麻酔弾だろう。

力なく崩れ落ちそうな男の頭を掴んで、怪しそうなボタンを押すとすんなりとヘルメットが外れた。

俺は肺の中の新鮮な空気が無くなる前に奪ったヘルメットを装着し、大きく息を吸う。

「奴は抹殺しろっ！ こつちの青髪と違ってただの人間だっ！」

この声はミザだな。

白いモヤの中にいるから安心してはいるようだが、声を発してる場所は特定出来たぞ。

それにしても、俺はただの人間か。

カリユ一の野郎が人間扱いされていなかった事に、危険の最中ではあるが薄っすらと微笑む。

金属の音が部屋に響いた。

音から察するに麻酔弾と実弾を入れ替えた音だろう。

先程倒れた男が座っていたパイプ椅子を握り、机の影から兵士達の方に放り投げた。

頭上でパイプ椅子が蜂の巣にされる音が聞こえる。

俺はその音に紛れるように机の影から飛び出す。その動きの途中で机の上にあつたペン立てを掴んだ。

「下だっ！」

兵士の一人が叫んだ。

俺は兵士と俺の間に先程のカミングスと呼ばれた男が来るように進路を取る。

「え？ こつちは駄っ」

カミングスの叫び声はそこまでしか聞こえなかった。二人の兵士が銃をぶっ放し、カミングスが床に崩れ落ちる。今度は実弾だったよな、ご愁傷様。

それにしてもあの兵士、全く躊躇いが無かったな。

だが時間稼ぎにはなった……。

「獲ったぜ？」

俺はペン立ての中から鋭そうなボールペンをミザの首元に突きつ

ける。

「ミザ支部長！」

兵士二人の動きが止まる。

さすがに一般従業員と支部長では命の重みが違うらしい。

「俺とカリユーを解放しろ！」

ミザの首筋にボールペンの先端を突き刺す。

ん？ やたらと硬い皮膚だな……。

「痛っ！」

俺は慌ててミザの体から離れた。何が起きたんだっ！

その瞬間を狙って二人の兵士が銃を乱射する。

「ちっ！」

自分の装備が手元に無い事が悔やまれる。部屋の反対側の書類棚の後ろに隠れたが、障害物としては小さすぎて身体のおちこちが激痛と共に削られる。

ん！

一人が持っている銃のカートリッジが空になった音が聞こえた。

攻撃が半分になると判断した俺は書類棚から飛び出して先程の机の陰まで移動する。

「ぐあっ」

机の陰に入る寸前に左足を打ち抜かれた。これではスピードも出せないし、何より手元に武器が無い……。

万事休すか？

頭を整理するために、ふと両手に視線を下ろした。

何だ？

指が動かないぞ……。

まるで凍傷にかかってしまったかのようなのだ。

「惜しかったねえ」

ミザの声だ。机から姿を出すのは危険なので奴の顔を確認する事は出来ないが……。

「あんたらは少し離れてな」

兵士二人がミザから距離を置いたようだ。
一体何をするつもりだ？

「冥土の土産に教えてやるよ、私の能力を……」

……冥土の土産か。

まさか貰う事になってしまつとは……。

いや、まだ諦める訳にはいかない。

……秋留。

俺はまだ秋留に自分の気持ち伝えていない。このままでは死ぬ
ない！

ん？ 何だ？

辺りがやたらと寒くなってきたぞ。激しい戦闘のせいで空調が壊
れたのだろうか。

！

俺は異常を感じて慌てて床から近くの机の上へと飛び出す。

そこを銃撃される事は分かっていたので、そのまますぐにまた机
の向こう側の床へと降りた。

その一瞬で確認出来た。

ミザの体から冷気が放出されていた。その冷気が床を凍らせたの
だ。お陰で両足の感覚がほとんど無くなってしまった。

「今の一瞬で確認したのか……私の状態を」

「お前、魔族か！」

ちくしょう、既にこの辺りの床まで凍ってきているようだ。

しかも貴重な検体であるカリューがミザの傍で倒れていた。この
ままだとカリューが氷漬けにされてしまう。

「あつはつは、魔族？ 違うよ。この身体はその魔族やモンスター
を倒すために研究された……」

そうか。

このユステイム研究所では霊獣と人間の混合種なんていうふざけ
たものを研究しているんだった！

とするとあのミザは、氷系の霊獣と掛け合わされた化け物って訳

か。

「つまり魔族と同じ化け物って訳だ！」

俺の隠れている机が氷の塊と化した。

それと一緒に背中が氷の塊に半分取り込まれる。……余計な事言
うんじゃないかった。どうやら怒りに触れてしまったらしい。

「もう冥土の土産は十分だろう？　そろそろあの世へ送ってやるよ」
氷に半分取り込まれてしまったせいで身動きが取れないが、確実にミザが近づいてきているのが分かる。辺りの気温がグングンと下がっていつている。

と、その時、天井の取り付けられていた赤ランプが豪快に光り始めた。緊急警報も同時に鳴り響き始めた。

「！　ちっ！　この場所がバレたか！」

ミザは叫ぶと残りの二人の兵士に撤退を命じた。

兵士とともに扉へ向かうミザの足音が聞こえる。

「おっと！　忘れてた」

ミザが俺の方を振り向いたのが分かった。俺の事は忘れてくれれば良いのに！

「これはプレゼントだ、まあ、見えないだろうが、氷の塊だよっ！　辛うじて機能していた両耳が空気を切り裂いて巨大な何か、恐らく氷の塊が俺の方に飛んでくるのを確認した。

今度こそ万事休すかっ！

「うおおおおおおおおお」

一際大きい叫び声。カリユーの声だ。

その叫び声のすぐ後に豪快な打撃音がしたかと思うと、巨大な氷の塊が金属の壁にぶち当たって粉々になった。

「仲間は……殺させないぞ！」

姿を確認する事は出来ないが、カリユーが俺を守ってくれたようだ。

（……たまたまさ、巻き添えを食うの怖かったんだ……）
？

何かの声が聞こえた気がした。

意識が遠のいていつているせいだろうか。頭が朦朧としていても考える事が出来ない。

「ブレイブ！ カリユー！ 大丈夫？」

秋留……。

この可憐な声は秋留の声だ。机と一緒に氷漬けにされているせいで、姿を確認する事が出来ないのが物凄く残念で仕方が無い……。助けに来てくれたのか。

（……違う、人間は他者を助けるような精神など持ち合わせてはいないさ……）

さつきからこのム力つく声は何だ……。

しかし体力が著しく消耗しているため、反論する事も出来ない。

俺は何者かが嘲笑っているのを聞きながら意識を失った……。

（……）

（……何者かに運ばれているようだ）

（……このままでは危険だと思いつながら抵抗する事が出来ない）

（……焦る事は無い、まずは休息だ）

（……全てを破壊するためのパワーを取り戻す必要がある……）

「……ブ殿！」

（……）

「ブレイブ殿！」

（……）

（……人間用のベッドか。目の前には心配そうな顔をしている老人の姿が見える）

(うむ。手に力は入る。体力は戻ってきたようだ)

……?

……いや、違う。

俺は一体、何をしようとしているんだ？ 目の前にいるのはジェ
ットじゃないか。

……それにしてもなぜ寝覚めに見る顔が秋留じゃなくて、ジェッ
トなんだ？

俺は首を動かして辺りを確認した。

秋留は少し離れた所で俺の方を心配そうに眺めている。その隣に
は恰幅の良い、白衣に身を包んだ気の優しいような女性がカルテを片
手に佇んでいる。

秋留の母の美冬^{みふゆ}だ。

ガイア教会本部の司祭として働いていると、以前秋留から直接聞
いた事があったのだが、まさか魔術研究部門の長を任されていると
は知らなかった。

実はカリユールの診断をしてくれたのもこの美冬さんだ。

魔術研究というよりは危険なマッドサイエンティストに見えなく
もない。カリユールの身体をアレコレと調べている時の美冬さんの顔
は正直怖かった。

……あ、この状況を見るに、俺の身体も同じように調べられてし
まったというか？

未来のお母様に対して何という失態だろう。

「……気分はどうだい？」

美冬さんがカルテに眼を落としながら聞いてきた。その後、観察
するような目つきで俺の眼を覗き込む。

(……何だコイツは……嫌だ……。)

(……研究所を思い出す……。逃げ出したい。)
「ううう……」

何だ？ 物凄く頭が痛い。キツイ兜を無理矢理被せられているか
のように……意識が遠のいていきそうだ……。

「ぬおおっ！」

その時、俺の目の前でジェットがバックステップした。

「お前から近寄るなあっ！」

自分の腕で滅茶苦茶に拳を振り回したかと思うと、正体不明の叫び声と共に小さめの部屋の中が光に包まれた。

ユスティム郵送会社の地下のような広さだろうか。その部屋が光に押し流されるように何も見えなくなる。

「やっぱり霊獣の因子が組み込まれてる！」

「麻醉弾撃ちます！」

美冬さんとその助手の声だろうか。

耳では普通に声が聞こえているのだが、身体が全く言う事を聞いてくれない。

まるで誰かに操られているようだ。

俺達のパーティーに纏わり付いている幽霊のツートンに以前身体を乗っ取られたが、あの時に似ている。

しかし外側から操られているようなイメージだったあの時とは違い、今回は内側から操られているような、細胞が一つ一つ勝手に動いてしまっているかのようだ。

「待って！」

秋留の声だ。

「ツートン！ カーニャア！」

暴走し始めた俺の身体に二人を乗り移らせて制御するつもりか？ 秋留も無茶な事をしてくれる……。と冷静になっている場合は無かった。

俺の身体の中でツートン、カーニャア、そして謎の人格がせめぎ合う。

「ぐあああああ！」

身体が三方向に引っ張られているような感覚を受ける。

というかツートンとカーニャアは連携して同じ方向に引っ張ってくれ！ お前からカップルの癖に協力するつもりないだろっ！

「うおおおっ！」

……。

どうやら叫び声をあげているのは俺の意思ではないようだ。

そうでなければこんなに気持ちが悪く冷静でいられるはずはない……いや、身体の痛さは伝わってくるので早く終わらせて欲しい気持ちはあるのだが。

その時、暴走する俺の右手が近くのテーブルの上にあったネカーを掴んだ。

そして仲間達の方に銃口を向けた。

その中には秋留の姿もある。

「ふざけるなあっ！」

俺は無意識に叫んだ。

左手で右手を頭上に掲げると同時にネカーから硬貨の弾丸が発射され、天井の蛍光灯が弾けとんだ。

「勝手に俺の身体を操って何しやがる！」

(俺の身体?)

「お前の身体じゃねえ！ この立派な身体は俺の物だ！」

……。

俺の中の何者かのみではなく、この場の誰もが俺の台詞に思わず黙った。

「どの辺が立派なの？」

聞き間違えたかのようにクリアが耳の穴をホジホジしているようだが気にはしない。

(ブレイブ？ ラムトの身体はどこにいった?)

そうか。

どんな仕組みなのかはサッパリだが、ラムトという奴は俺の中に組み込まれてしまった霊獣の一部という事か。ユスティム研究所の被害者……いや、被害獣か。そういう意味では俺も立派な被害者な訳だ。

……。

冷静に分析している場合ではない。

これで俺も仲良くカリキュアやジェットの非人間チームの仲間入りという訳か。

「情緒不安定みたいだけど、とりあえずは落ち着いたみたいね」

美冬さんが困ったような顔で俺を見つめている。

俺は何気なく近くのガラス戸に映った自分の姿を見た。

その両目からは涙が止め処なく流れ落ちていた……。

これは俺の中に組み込まれてしまった霊獣の涙なのか、上手く連れ携出来なかったためにツートンとカーニヤアが体内で争っている影響なのかは定かではない。

第三章 調査

「どこの出身だった：出身なの？」

俺の正面に座っている秋留が優しく問いかけてきた。

若干言葉の表現に迷ったようだが、何も無かったかのようにすました顔をしている。

ここはガイア教会本部魔術研究所の会議室だ。俺達の情報整理のために、美冬さんが場所を提供してくれた。

（バーム大陸にある鬱蒼とした森深く……僕は木々の隙間から力強く差し込む光を浴びて気ままに暮らしていたんだゲロ……）

「バーム大陸の森の中だつてさ」

（こらっ！ ブレイブ！ 色々省略するなゲロッ！）

「だあ〜！ 頭の中で五月蠅いなっ！ ちゃんと重要な所は言ったる？」

頭を掻きむしりながら叫ぶ。

「それにゲロゲロ五月蠅いぞ！ 普通に喋れないのか！」

（むうっ！ 失礼な！ この光の蛙ラムト様のアイデンティティを馬鹿にするかっ！ ゲロ）

とんだ奴が俺の中に入ってしまったもんだ。

もつと大人しい霊獣が俺の中に息づくならまだしも……光の蛙？ 使えない能力しか無さそうな響きだぞ……。

ちなみに傍から見たら俺は一人で何をやっているんだ？ と見えるに違いない。

俺の中にラムトという蛙の霊獣……いや、ただの蛙の因子が組み込まれてしまったのだ。

それがどんな仕組みかは全く不明なのだが、俺の頭の中で意識を持つ結果となつてしまった。お陰で俺は突然頭を抱えて叫びだすような変人扱いをされてしまう可能性が大きい。

「ブレイブよお、話が進まないからラムトの言葉をそのまま伝えて

くれるか？ ゲロゲロ付きで？」

カリューが笑いを堪えながら指摘してきた。

くっそ〜！

今まで散々カリューの事を馬鹿にしていた手前、文句を言う事も出来ない。

しかも俺の頭の中で喋っているラムトの声は他のメンバーには聞こえてないため、俺の独り言に聞こえるはずだ。それをこのカリューはまるでラムトの声まで聞こえているかのように内容を想像して馬鹿にしてやがる！

こんな時だけ要領の良い事しやがつてえー！

「で、やっぱり赤い制服を着た人たちに攫われたの？」

秋留は何事も無かったかのように俺、というか俺の中のラムトに質問しているようだが、その顔には笑いを堪えているのが丸分かりな感じで眉毛がピクピクと振動している。

（そうだ、必死に光って抵抗したんだが、全くひるみやしねえんだ……ゲロ）

……こいつ、実は無理矢理語尾にゲロって付けてやがるな？

頼むから俺の中だけしか存在しない奴が、アイデンティティーを気にしないでくれ。

「ブレイブ、泣いてなくて良いから、通訳お願い」

「赤い制服の奴らに攫われたんだとよ。身体を光らせて対抗したけど、全く役に立たなかつたらしい」

俺は泣き真似を止めて真面目に秋留に答えた。

「なるほどゲロ」

勿論、俺のこの状態を楽しんでいるカリューの台詞だ。殴りたい。

俺の事を小馬鹿にしているカリューの憎たらしい顔に一発……硬貨を打ち込みたい。

「どこに連れられていったか分かる？」

ちなみに秋留達の情報収集はどうやったのかは不明だが、ユステ

イム研究所の本部は見つける事が出来なかつたらしい。

ユスティム研究所のアームステル支社の存在を嗅ぎつけて侵入した所、奥からカリユールの叫び声が聞こえてきたので、慌てて助けに来てくれたという事だった。

(どこに？ うーん……ゲロゲロ)

「ゲロゲロだそうだ」

(なっ！ アホブレイブ！ 僕のアイデンティティ部分だけをそのまま喋るなっ！ はっ！ まさか俺のアイデンティティを奪うつもりだな？)

絶対しません、そんな事。

というかどこに連れ去られたのか、とっと思いついてくれ。

「ゲロゲロですか？ 知らない地名ですなあ……」

ボケボケジェットが真面目に考え始めてしまった。

「へー、ゲロゲロなんていう地名があるのっ？ 冗談だと思った！」

あ、最近存在感の薄いクリアまでがボケボケだ……。

そういえばコイツ、最近元氣無いな……。

(へー、ゲロゲロなんていう地名があったのかあ……僕のアイデンティティが取られた！ 訴えてやる！)

「だあああああっ！ お前らわざとか、天然なのか分かんが、疲れるわああああ！」

「ふう……」

「落ち着きますなあ……」

俺達は先程の会議室でジェットが淹れてくれたお茶を飲んでいる。あれからゲロゲロが地名ではないという説明をするために、三十分程を費やした……気がする。

自分の中のラムトに説明するのが一番空しかった。

俺の中に息づくんなら気持ちで会話が出来ればどんなに楽な事か……。

「どつぞ、砂糖菓子でございます」

シープットが果物の形をした砂糖菓子を目の前の机に並べていく。いつもシープットが背負っている大きな鞆をガサガサと漁っていると思ったら、こんなものまで持ち歩いているのか……。クリアがどんなわがままを言ってもすぐに対応出来るようにしているためだろ。

「場所は分らない……か」

熱血漢カリユーが残念そうに呟いた。

（面目ない……この恨み、何としてでも返したいんだケロが……）
ラムトの声も悔しそうだ。

結局、ラムトは頑張っと思いつくとしたのだが、記憶に無いらしかった。

そもそも過去の記憶がほとんど残っていないようだ。

……最早肉体を失ってしまったため、記憶を保存していた脳も失われている。むしろこの意識が残っている状態の方が不自然だ。

「また求人に乗っていたりしてな」

俺の他愛の無い冗談も場の空気を和ませる事は出来なかったよう

……。

（なっ！ そのキュウジンとかいうものに情報があるのか？ それならこんな所で油を売ってないで）

「ラムト五月蠅い！ 俺の冗談をイチイチ間に受けるなっ！」

俺は気持ちを落ち着かせる為に砂糖菓子を口に放り込んだ。

甘くて疲れが取れるようだ。

実は俺は大の甘党だ。辛い物はすぐに口の周りがヒリヒリしてしまっって好きではない。

（ぬっっ！ 何だ、この甘いのは！ うええええ、ゲロゲロ）

「汚いっ！ ラムト！ こんな所で吐くなっ！」

（ブレイブ、もっと旨い物食わせてくれ）

ツッコミ所満載で疲れる。

このままでは心労で倒れてしまいそうだ。

ぐったりしているとシープットと眼があった。何か言いたそうだ。

「何だ？ シープット」

「ラムト殿が吐くとはブレイブ殿が吐くという事ですか？」

「そんな事、知るかあっ！」

悲しい。

何が悲しいか、って秋留が俺を哀れんだ眼で見ている事だ。

ちくしょう！

俺は派手さが無くても十分だったのに、こんな訳の分からない蛙に乗り移られて変な個性が出るなんて、何も嬉しくなんか無い！

「あ、求人で思い出したけど、ユステイム郵送会社って魔族討伐組合で調べたんでしょ？」

秋留が俺に意見を求めている。

「ああ、でも情報は載って無かったぞ？」

「……レッドページで自分で調べたんでしょ？」

秋留がジロリと俺の顔を睨んで聞いてくる。

うう……。俺、なんかやつちまったか？

ちなみにレッドページは通称、赤本と言われており、大した情報は載っていないが、冒険者なら誰もが閲覧する事が出来る情報誌だ。その地域にある店の情報など、主にクエストの依頼主に関する情報を簡単に調べたい時にパラパラとめくったりする。

「そ、そうだぞ……ユステイム郵送会社の情報は載ってなかったな。中小企業だからか？」

「馬鹿っ！」

その迫力に思わず後ずさる。

秋留の声は時々、物凄い威圧感を受ける場合がある。言葉の魔術師……とでも言おうか。

「レッドページには大抵の企業の情報は載ってるの！ レッドページに載っていないなんて、ほとんど有り得ないのよ！ ましてや郵送会社なんていう冒険者を雇う事が多そうな企業の情報が無いなんて有り得ない！」

「う……そうなのか？」

俺は一緒に情報収集したカリューの方に向いて助け舟を求めた。しかしカリューは巻き添えを食らう事を恐れて明後日の方を向きながらお茶をすすっている。

俺は秋留の方に視線を戻した。

厳しい顔をした秋留が俺の方を睨み続ける。

「……知らなかったよ、今後気をつける……」

俺は何とか声を振り絞ったが、それでも秋留の厳しい視線はまだ俺の顔を睨みつけてる。

「軽はずみだった。すまん、悪かったよ」

「……ふう。気をつけてよね、今回は霊獣が体内で息づくだけで免れたから良かったものを……」

だけ？

まあ、死ぬよりはマシかもしれないが……。

(ぶぶ、怒られてやんの、ゲッコッコ！)

「だあああ、馬鹿にすんなあっ！」

「！ 何！ 何か私、変な事言った？」

秋留が机をバンと叩いて俺の顔に近づいてくる。

「ぎゃあああ、ごめんなさい、秋留に言ったんじゃない、ラムトに言ったんだよおおおお！」

俺は秋留の叫び声に押さえ込まれた感じで、部屋の隅に縮こまった。

ラムトとの楽しい共存生活を始めて三日が経過した。

今日も美冬さんの所に顔を出して、色々身体の状態を調べられている所だ。

「相変わらず何とも無い？」

美冬さんが何やら別の作業をしつつ、俺から採取した血液に何やら溶剤を加えている。ここ何日か通って分かった事なのだが、美冬さんはこの職場の職員に凄く信頼され好かれているようだった。

まあ、仕事も出来るし愛嬌のある顔をしている。

さすが秋留の母親と言った所か。

「若干寝不足かな。ラムトの奴、夜中でも雨が降っているとゲコゲコ鳴き始めるんだ……」

(ブレイブ、雨音を聞くと自然と歌いたくなるのが霊獣ってもんだゲロよ)

絶対嘘。

霊獣にはそんな習性ありません、それはモロに蛙の習性だ。

全く、こいつが霊獣として存在していた時にその姿を見たいものだ。絶対、蛙そのものの姿をしているに違いない。

「問題無いけど、いつまた前みたいに暴走し始めるか分からないからあ……」

そう言うつと美冬さんは席から立ち上がり、部屋の反対側の棚からガサゴソと道具を袋に詰めて、戻ってきた。

「これ、カリューが暴走した時に使用するものと同じ抑制針ね」

「……お、俺用ですか」

「そう、ブレイブ君用。危険だな？　と思ったら迷わず自分の腕にブスツと刺してね」

何だか無茶な事言われている気がするのは気のせいだろうか。

そもそもこの尖って痛そうな針を自分の腕に刺すのは抵抗があるな。しかも危険そうだと感じたらかあ……。それはどんな時だろうか？

俺はガイア教会本部の敷地内に設置されている魔術研究所から外に出た。

今日は細かい雪がサラサラと降っている。粉雪という奴だろうか？

(ゲコゲコ、ゲコゲコ……)

こいつは雪でも五月蠅くなるのか……。

まあ、もう放っておこう。そろそろラムトが発する雑音にも慣れしてきた気がする。

「では、お気をつけて……」

ガイア教会本部の敷地内は関係者以外、立ち入り禁止だ。

そのため、俺が正門に到達するまでは、ガイア教会の警備員が俺をエスコートする。

俺はその警備員に軽く挨拶をすると、コートのフードを被って街へと歩き出した。

(ブレイブ、あの団子はどんな味なんだゲロ?)

(お、あっちのはんぱくがとかいう奴はどうなんだゲロ?)

俺はラムトが発する雑音を無視してアームステルの通りを歩いている。これ位の雪の量はアステカ大陸では日常的なのだろう。通りには寒さに負ける事なく、店頭でアクセサリーを売る怪しげなアフロの女性や、飲食物を売っている子供の姿が見える。

(なあ、ブレイブ、何か食おうぜゲロ)

美冬さんの所に行く前に遅めの朝食を取ったため、今は昼を少し過ぎた位だが腹は減っていない。

(なあ、僕、腹減ったよ)

身体の無いお前がなぜ腹が減る?

(おい、さつきからシカトかよ?)

「腹は減ってないんだ」

俺は小声で答えた。

五月蠅いラムトを黙らせる為に大声を出したい所だが、さすがに街中で一人大声で叫んだら、変人だと思われるまうに違いない。

(え? 何だつて? 聞こえないぞ、ちゃんと喋れ、ブレイブゲロ!)

「ブレイブの後ろにアイデンティティーを持って来るな!」

思わず叫んでしまった。

俺の叫び声に周りにいた買い物客や店の店員が俺の方を一斉に振り向く。

「……ほらっ! そこ滑りそうだぞ、気をつける!」

俺はその場を誤魔化すために、近くを歩いていた子供を注意した。

その子供はアームステルに住んでいるのだろう。

慣れた動きで雪が薄く積もった通りを跳ぶように歩いていった。
まった。

「……ごほんっ」

結局、変人だと思われてしまったようだが、気にせず先に進む。
う。

……早くこの場から遠ざかりたい。

「嫌だわあ、私ここで荷物届けてもらった事あったのに」

「まあ、わたくしもですわあ！」

俺はノンビリとユスティム郵送会社、があつた場所まで歩いてきた。
た。

近くでは噂を聞きつけたらしいオバサン二人組みが大声で話し合っている。

郵送会社の建物の入り口には黄色いテープが貼られ、立ち入り禁止となっていた。

少し離れた場所の物陰にはあまり気配を消す事が上手くない治安維持協会員と思われる二人組みの姿も確認出来る。

俺達はユスティム郵政会社の地下で怪しげな実験が行われている事を治安維持協会に報告を行った。

全てを問題解決させてから、報告すればガツポリと金が懐に入ってくる予定だったのだが……なぜか俺の懐には奇妙な蛙の霊獣が入ってきてしまった。これが本当のガマガチか、って笑えない……。

(ここで僕はブレイブと合体してしまったのかゲロ……)

「嫌な表現を使うなっ」

先ほどのオバサン二人組みも消えたので、俺は少し大きめの声でラムトに突っ込んだ。

ちなみに治安維持協会に確認した所、人間が行方不明になっている事件などは、例年とあまり変わってはいないという事だった。

この世の中、悲しい事に色々な理由で行方不明はあるようなのだ

が、ユスティム研究所は本格的に活動している訳ではないのだろうか？

「！」

(どうした？ ブレイブ、何か身体が強張っているようだゲロよ？)
俺はラムトを無視してさりげなく辺りの気配をうかがった。

どうやら先ほどの治安維持協会とは別の位置から、何者かが俺の事を観察している……ような気がする。

こちらはそれなりに気配を消すのが上手いようだが、まだまだ修行が足りないな。

どうするかな。

(奴らか？)

ラムトの声の質が変わった。

そして俺の内側から何か得体の知れない怒りが湧き上がってくるのを感じる。

「馬鹿つ、落ち着け！ 奴らに気付かれるだろっ！」

俺は小声だがしっかりとラムトに伝わるように力強く注意した。

(……ゲロ、後ではんば〜が〜食わせる)

「……了解」

ラムトと会話をしている間も何者かが俺の事を監視している気配は消えない。

俺は何となくその場を歩き始めた。

(奴らは？)

「付いてきているな……だがユスティムの奴らとは限らないからな、暴れようとするなよ？」

(了解ゲロ)

さて、こいつらの目的は何だろうか。

カリューを狙うなら分かる。あいつらは非人間のカリューに興味を持ってみたいだからな。

しかし俺は只の人間……いや、違う、今は体内に霊獣の意識を取り込んだ……非人間だ。

……俺を狙っているのか？

俺は怪しまれないように人通りのそれなりに多い場所を歩いていく。

逆に人通りの少ない方に進めば、俺が追跡に気付いたことがバレる事が大きいからだ。

あいつらが何者か、何が目的かをはつきりさせないといけない。

暫く歩いて目の前が丁字路になっている場所まで来た。この辺りは店なども並んでいるため怪しまれ難い。しかも丁字路の左側には人の気配は無さそうだ。

俺は丁字路を左に曲がると、ゴミ箱、ショーウィンドウ、屋根の順番に手足を器用に使いながら、移動した。

(ブレイブ、そんな動きも出来るのかゲロ？ まるで人間じゃないみたいだゲロ)

お前のせいで純粋な人間じゃなくなったけどな。

暫く店の屋根の上で様子を伺っていると、怪しげな三人組みが通りに現れた。

「？ おい、奴が消えたぞ？」

「どこかの店に入ったのかもしれないな」

小声で話しているようだが、俺の耳には何とか聞き取る事が出来た。

盗賊になるために色々修行したからなあ……。

「俺はここで待機する、お前達は店の中を確認しろ」

リーダー格の男だろうか？

メガネをかけて頭が良さそうに見える……わけがない。頭がスキンヘッドだ。そういう場合はサングラスじゃないのか？

……奴ら全員、大きめの鞆を背負っているな。

折りたためば銃火器の一つ位なら楽勝で入りそうだ。

(いけないゲロ？)

……下っ端は何も知らない可能性がある。

狙いはあのリーダー格の男だ。

俺は屋根伝いに物音を立てないようにリーダー格の男の真上の屋根に移動した。

そして下っ端二人が別の店に入ったタイミングを見計らって屋根から飛び降りる。

「喋るなよ」

リーダー格の男の真後ろで銃を構えて小声で脅す。

もしこいつらがユスティム研究所の奴らだとしたら、近づき過ぎるのは危険だ。ミザのような能力を持っている可能性もあるからだ。「喋るなよ……首を縦か横に振れば良い……何の為に俺をつけてる？」

「……」

男の反応は無い。組織の秘密をバラす位なら喜んで死ぬようなタイプか？

（はい、か、いいえ、で答えられる質問じゃないゲロ）

……。

「俺を殺すつもりか？」

間を置いて男が首を横に振る。

信じて良いのだろうか？

どうもこういいう言葉のやりとりは苦手でしょうがない。こんな時、秋留がいれば……。

と突然、目の前の男が俺から距離を取った。

「！ 貴様っ！ 動」

俺はそこまで台詞を発した後に地面からの衝撃により空中に投げ出された。身体に痛みが走る。

「ぐあっ！」

（ゲロッ？）

何をされたんだ？俺は上空で体制を立て直しながら辺りを確認した。

……すぐ傍に街路樹サイズの木が出現している。

俺はどうやらこの木に吹き飛ばされたらしい。しかし、今までこの場所に木なんて無かったよな？　そもそもこんな十字路の近くに木があつたら邪魔だ。

「はっ！」

リーダー格の男が発した力強い声と共に、再び別の場所から木が生えて俺の身体を弾き飛ばした。そのまま民家の壁に叩きつけられる。

「ぐはっ」

背中を強打した事により息が止まる。

しかし常に張り巡らせている俺の五感が、銃のトリガを引くような金属音を感じた。さすがにどこから狙われているのかまでは、景色がグルグルと回ってしまっているので分からない。

しかし狙いを付けられる訳にはいかないという気持ちだけで、俺は咄嗟に叩きつけられた民家の壁を両足で力強く蹴った。

そのすぐ後に銃の発射音が……聞こえない。

俺は上下左右も分からぬまま地面を転がった。恐らく銃を撃とうとしていたのは、下っ端二人組みのどちらかだろう。その二人は……。

「大丈夫？」

この優しくて俺を包み込む可愛い声は……。

「秋留！」

眼が回っているので焦点が定まらないが、秋留の可愛い顔が確認出来た。

「……ツルツパゲには逃げられたみたいだね」

そういえば木の攻撃は止んだようだ。

「ミザっていうユスティム研究所の奴は氷を操ってたんだよねえ……
…そうなるさっきの木を操るツルツパゲも……」

秋留が困ったように道の真ん中に生えた木を見て言った。

「そうだな、ユスティムだろうな……！　下っ端二人は？」

「ブレイブを撃とうとしてた一人はブラドーがグルグル巻きにして

て、もう一人は路地で眠ってもらってるわ」

さすが秋留だ。

リーダー格は逃したものの下っ端は捕らえたか。拷問でも魔法でも何かしらの方法で奴らの目的や本拠地の場所が探りだせるかもしれない。

俺と秋留は壁に寄りかかっている真っ赤なサナギに近づいていった。

「この真っ赤なサナギはこの突然生えた木から落ちてきた新種の昆虫か？」

「……ブラドーが下っ端その一をグルグル巻きにしているの図です」
秋留も酷い事をする。

(酷いゲロ……)

霊獣までも酷いと思っっているようだ。

ちなみにブラドーは秋留の忠実な僕だ。ブラドーは秋留が名付けた愛称みたいなもので、実際はブラッドマントというモンスターである。

本来は宝箱の中などに潜み、普通のマントだと思っただけで装備してしまった冒険者などの首を絞め、尖ったマントの先端などを身体に突き刺し血を吸う残酷なモンスターだ。

その危険なモンスターを秋留は手懐けている。

クリアと同様に獣使いの素質もあるのかもしれないが、クリアのように獣やモンスターの言葉が分かたりはしないようだ。

「ありがとう、ブラドー」

秋留がそう言うとき赤いサナギのようになっていたブラドーが秋留の肩に戻っていった。……こう見ると普通のマントだが、いざという時は頼りになる。

……ちなみに俺が秋留に大して邪な気持ちを持つとなぜかブラドーが威嚇体勢になるのが前から疑問ではあるのだが……。

「……」
秋留がブラドーの中から出てきた下っ端の顔を覗き込んでいる。

「……死んでる」

「えっ？」

秋留の台詞に驚いて、俺も下っ端の顔を覗き込んだ。口から血を流している。既に息は無いようだ。

「おいっ！ ブラドール！」

俺はブラドールの方を睨んだが、勿論言葉が伝わるはずもなく、ブラドールは風に揺れている。

「ブラドールじゃない……舌噛み切ってる……」

秋留が下っ端の顔を観察しながら言った。

自殺か。

何があっても組織の事はバラさないように教育されているようだ。

「おいっ！ もう一人の方も！」

俺の声に秋留は走り始めた。俺も秋留の後を追う。

「……ああ……」

秋留がガツクリと肩を落とした。

路地には胸に木の枝が刺さっている下っ端の姿があった。

眠っていたら秘密を漏らさないために自殺する事も出来ない。恐らくリーダー格の男が俺達に攻撃をし掛けている間に、下っ端の息の根を止めたのだろう。

「何も手がかりなしか……奴らがなぜ俺を狙っていたのかも……」

「……それは分かるかもしれないよ」

秋留の元気が無いのは、下っ端二人が命を落としたせいだろう。

直接の原因が秋留では無いにしても、秋留は慈愛の天使のように優しい心を持っているからなあ。

「俺を狙った理由が分かりそうなのか？」

俺の台詞に秋留は背負っていた鞆をバンバンと叩いた。

「この人が持っていた鞆だよ。あっちのサナギの方はツルツパゲが丁寧に行っちゃったみたいだけどね」

さすが、秋留。

感心するばかりだ。

証拠隠滅を図る事を予想したのだろう。……秋留の予想を上回って証拠隠滅をされたようだが、この際気にしてもしょうがない。

「な、何だ、コレは……」

聞きなれない男の声に俺と秋留は振り返った。

そこには通りの真ん中に生えた木を眺めている治安維持協会の姿があった。

「ああー、うんざり」

「ああ、勘弁して欲しいな」

（長かったゲロ）

辺りはすっかり暗くなってしまった。目の前の建物の屋根の向こう側に見える時計台は二十時を指している。外の寒さにコートの中に埋まりたくなる。

あれから治安維持協会での事情聴取が行われた。

俺と秋留は約五時間程、身柄の確認や現場検証のために拘束された……さすがに人間が二人変死をしていたので、簡単には帰しては貰えない。

この世の中、残念な事に人殺しが後を絶たない。それは魔族やモンスターが人を殺す場合が多いのだが、人が人を殺す場合も少なくない。

そういう人同士などの事件の場合に治安維持協会が存在している。

「……あれ？　そっいえばその鞆……」

俺は秋留が背負っている鞆を指差した。

「下っ端から奪った鞆だ。」

治安維持協会では手荷物などを全て調べられたのだが……調べる必要のある一番重要そうな下っ端の鞆を治安維持協会員は調べなかった気がする……。

「治安維持協会に持ってかれちゃうと、色々調査に時間がかかったり、余計な事グダグダと聞かれそうでしょ？」

そう言いながら秋留は手をクルクルと回した。

そうか、幻想術か。幻想術は手をクルクルと回したり身体を動かしながら呪文を唱える特殊な術だ。人を惑わしたりするのが得意……つまり、幻想術の力で治安維持協会員の視線を秋留の背負っている鞆に向けさせなかった、もしくは見えなくした、と言った所だろう。

「さすが、秋留……ホント、感心するよ」

俺はウンウンと大きく頷いた。

「えっ！ そんな事無いつて！」

目の前で秋留がオロオロとしている。いきなり感心したので照れているようだ……困った顔もまた可愛いなあ。

(……秋留はブレイブの事が好きなのかゲロ?)

「なっ！ 急に何言い出すんだよっ！ そんな訳無いだろうっ！」

今まで黙っていたラムトが突然喋り出すので、しかも突拍子も無い事を……俺はひたすらオロオロとしてしまった。

「ぷっ！ ラムトに何か言われたの？ 私もブレイブも二人でオロオロしちゃって……バツカみたいね〜！」

「なっ、うっ……あはは、そうだな」

ラムトが言った台詞は勿論秋留に伝えられるはずが無い。

俺は笑いで誤魔化しつつ話題を変えるために、アレコレと考えを巡らせた。

「あ、そういえば秋留はたまたま通りかかったのか？ あの襲われた現場に」

よし、これはナイスな話題転換だ。

「え？ ずっと付けてたんだよ？」

「えっ！ 全然気付かなかったけど……いつから？」

「宿屋を出た時から」

俺は思わず放心状態となってしまうた。

秋留に付けられていたという事は……歩きながら俺、変な事とかしなかったよな？ 落ちている硬貨は今日は拾ってないし……硬貨

の落ちる音に過敏に反応した事は……二回しかしてない。

「って秋留は人の後つけるの上手いなっ！ 元盗賊だとしたってそこまで気配消すの上手い訳が……」

俺が狼狽していると、秋留が手をクルクルと回し始めた。

……また幻想術のサインだ。

え？

「幻想術使って俺の後を付けてたのだった？」

「ピンポーン」

秋留が俺の顔に指を向けて可愛らしく言った。

ああ、正解のご褒美は情熱的な抱擁だろうか……。

「うっ……」

気付くと俺の鼻先にブラドローの尖った牙が伸びていた。

「ブレイブ、またイヤラシイ想像したでしょ？」

「そ、そんな事……」

と否定した俺の鼻に軽くブラドローの牙が刺さった。

「いってえええええ！ ごめんなさいっ！ イヤラシイ想像しました！ もうしません！」

「あはははははっ」

俺はジンジンとする鼻に手を当てた。俺が両手に装備している手袋には傷薬が塗りこんである為、これ位の応急処置にはもってこいだ……対戦闘用だが。情けない……。

「で、でも何で？」

鼻を押さえながら喋っているの鼻声になってるが気にしない。

「ん？」

俺の鼻声にニヤリと笑いながら秋留が首を傾げた。

「何で俺の後をつけたんだ？」

「……ユステイム研究所……証拠が全部溶けちゃったの知ってる？
そう。」

俺とカリューが改造されかかっている時……いや、若干一名は改造されてしまったのだが、秋留達が助けに来てくれた。

危険を察知したミザなどの主要メンバーは脱出を図った。

意識を失った俺は知らなかったのだが、その後すぐに研究所全体が煙を発生して、全ての研究資材などの証拠品が溶けて消滅してしまっただけだ。

これも霊獣を研究して得た結果なのかは分からない。

しかし相当、秘密の漏洩などには気を遣っているのが、今回の下っ端二人の殺人でも分かり過ぎる程に理解出来る。

「……ブレイブも結局、証拠なんだよね。ユスティム研究所がやってた悪事を証明する……」

「あ、そうか」

（ん？ ブレイブ、何か証拠を掴んでいるゲロか？）

お前だよ、ラムト……。

このアマガエルならぬアホガエルめ。

「最初に言っておけば良かったかな？ 狙われる気がしてたから……」

「……いや、俺演技ヘタだしな。そんな事言われたらギクシャクして手と足が同時に動いちゃうよ」

そう言っただけはキョロキョロと辺りを見渡しながら、手と足を同時に動かしながら暫く歩いた。

「あははは……まあ、敵を欺くには味方から、ってね」

「つくづく感心するよ、秋留には。まあ、俺達パーティーの頭脳だからな」

それから暫く宿屋を目指して俺達は仲良く街の通りを歩いた。

治安維持協会のある場所が宿屋から歩いて三十分程の距離だからな。

……まだまだ秋留との楽しいお喋りは続けられそうだな。

「……そういえばお腹空かない？」

秋留がお腹をさすっている。

そういえば、ドタバタが続いたせいで、今日はまだ朝食しか食べてなかったんだ。

(腹減ったゲロ〜。もう歩けないゲロ〜)

お前は歩いてないだろ。

「そうだな、腹減ったな。少し遅くなっただけど一緒に夜御飯食べていくかっ！」

「うんっ」

なんてこった。

今日はユスティムの奴らに襲われたり治安維持協会に監禁されたりと不幸な一日だったが、まさか最後に秋留と二人っきりのディナーがとれる事になるとは！

(楽しみゲロ〜！ 何食べるゲロか〜?)

……秋留と二人っきりのディナーを楽しむぞ〜！

「ご馳走様でしたっ！」

「……あれっ！ もう食べ終わったの？」

ここは寒い地方には有難いアツアツの鍋を提供してくれる店の、その名も鍋屋。

俺的には二人で一緒に鍋を突き合っでも全く問題無かったのだが、秋留が個別の鍋を注文したので、仕方なく俺も個別の鍋にした。

いつか一緒の鍋を二人で仲良く食べ合えるような仲になれたら良いなあ……。

「あちっ」

「あはは、ぼ〜っとしてるからだよっ！」

俺は締め雑炊を食べ終わると、椅子の大きくもたれかかった。

「ふう、身体温まったな」

額に溜まった汗をフキンで拭う。

「うん、美味しかったね」

(旨かったゲロ、また食べたいゲロ！)

……両生類がアツアツの鍋を食べて喜ぶな。

それから少しのんびりと秋留とお喋りをした。店内の時計はもう

夜の十時を指している。

「すっかり遅くなったな」

「治安維持協会の登場は予想外だったからねえ」

秋留的には予想外だったかもしれないが、人が二人死んでしまったので、治安維持協会が登場しないからといって、さすがにその場を去る訳にはいかないだろうな。

「んじゃ、いくか」

俺は伝票を持って立ち上がった。

「あ、私が……」

「俺が払う」

俺、格好良い。有無を言わず秋留のために夜御飯を奢るなんて。ありがとうございます、えーっと、一万六千カリムになります！」

……う。結構高いのね。

まあ、確かに鍋自体も旨かったし、調子に乗ってサイドメニューも沢山頼んだけどさ……。

「ブレイブ、ご馳走様」

「おお、旨かったな」

俺と秋留は暖まった身体の熱を外に逃がさないために、必死にコートをかきあわせた。

「……急激に寒くなったな。とつとつ宿屋に帰ろう」

「異議なし」

俺と秋留は一目散に宿屋を目指して歩き始めた。

通りには雪が残っているが、それなりに移動にも慣れてきたので、滅多に滑る事も無くなった。まあ、もともと盗賊の俺はバランス感覚は良い方なのだが……。

「この公園抜けた方が近くないか？」

「そうだね」

夜中の公園には誰もいない。……これでもう少し暖かければ最高

のムードな気がするのだが……。

そもそもこの寒い時期に外の公園で遊ぶような子供はいるのだろうか？

その時、下ろした足の感覚がおかしい事に気付いた。

俺は咄嗟に秋留を右後方に突き飛ばす。

「ぐあああつ」

今日の午後にも体験したこの痛みは、あのツルツパゲの仕業だな！……また秋留に回復をお願いするしかないな。

俺は上空で体勢を立て直すとネカーとネマーを構えて、公園にあったジャングルジムの上に着地した。

またしても公園のと真ん中に邪魔な木を生やしやがって。

「！」

なんてことだ。

いつの間にか左足がジャングルジムに氷漬けにされている。

「ツルツパゲだけじゃない！ ミザも一緒だ！」

俺は秋留に向かって叫んだ。

「誰がツルツパゲだっ！」

声が聞こえてきたのは真後ろの木の陰あたりだな？ 先程上空で確認した。間違いない。

俺は上体を反らしてそのまま後方に銃を乱射した。

「ぬっ」

ツルツパゲの怯む声が聞こえた。悲鳴ではなかったので命中はしなかったようだが、俺の攻撃により、秋留がツルツパゲの場所を補足出来たはずだ。

「火炎の住人よ、全てを貫く炎の矢となれ、ヒートアロー！」

秋留の呪文により放たれた炎の矢が俺の後方の木を貫いた。

しかしその場所には既にツルツパゲの姿はない。俺は身体を捻ってツルツパゲの後を追って銃を連射したが、その攻撃も当たらない。

駄目だ、左足が固定されてしまっているせいで、上手い事体勢を立てる事が出来ない。

「！ 右っ！」

俺の叫びの意味を察したらしい。

秋留は咄嗟に前方に回転してミザの氷の攻撃を交わしてくれた。しかし、この暗さと奴らの素早さを考慮すると盗賊の眼じゃないと敵をロツクする事は出来なさそうだ。一時期盗賊をしていたレベルの秋留では荷が重過ぎる。その証拠に呪文を詠唱する余裕も無さそうだ。

俺は秋留が攻撃を食らわないようにひたすらジャングルジムの上から援護を行った。

……ちくしょう！ こんなんじゃラチがあかない。

こうなれば自分の足を切り落としてでも……。

「！ 次から次へ……とっ！」

風を切り裂く音に対して、俺は右手の武器を腰に装備している黒い短剣に持ち替えて迎撃した。

ツルツパゲが鋭い木片を飛ばしてきたようだ。

「どうにかならないのかっ！」

木片を飛ばして来た辺りに向かって左手のネカーの硬貨をぶつ放した。勿論、威嚇にしかならない事は知っている。

「ぐあっ！」

ちっ！ 油断した、今度は左手がネカーと一緒に氷漬けにされてしまった。

ミザの野郎、秋留を襲っておいて、やはりスキがあれば本来の目的である俺を先に仕留めるつもりかっ！

（俺が一瞬、スキを作るゲロ！ お前は残った右手で何とかするゲ

ロ！）

突然ラムトが叫んだ。

どうやってスキなんか作るつもりだ？

と、一瞬にして辺りの視界が一気に鮮明になった。

まるで昼になったかのようだ。

「ぎゃあっ……」

ジャングルジムの左手にあった木の陰から正に俺に対して攻撃を繰り返そうとしていたツルツパゲが両手で眼を押さえている。

俺は右手でネマーを構えて慎重にトリガを連続で引いた。

「がああっ！」

ツルツパゲの両足、ふくらはぎの部分を硬貨で撃ち抜いた。

「煉獄の番人煉蘭よ……」

秋留の魔法の詠唱が聞こえてきた。

対象は公園の砂場で両目を押さえているミザのようだ。

（どうだゲロ？ 結構な威力だゲロ？）

「確かに……」

しかし夜中に使うから効果があつたんじゃないか？

これを昼間にやってもあまり相手を怯ませたりは出来ないんじゃないか？

……ん？

そもそも何が光っているんだ？

「己が守りし門を解き放ち……」

秋留の呪文の詠唱が続く。

どうやら最近、契約をしたあの猿を召喚するつもりらしい。

……こりゃ少しは暖かくなりそうか？

俺は先程倒したツルツパゲの方も確認しつつ、油断をし過ぎない程度にラムトが発していると思われる光源を探した。

……全体が明るいという訳ではないようだ。

まるで俺の首の動きに合わせてその方向が明るくなっているような……。

「……この世の全てを灼熱の地獄と化せ！」

辺りの気温が一気に高くなったような気がする。

秋留の目の前に火炎猿の霊獣、煉蘭が現れた。

……その身体がまとっている炎は前に見た時よりも大分小さい。

召喚するとこんなもんなのか？

「キキイイイイイッ」

煉蘭の身体から伸びた炎の帯がミザに襲いかかる。

その攻撃に気付いたミザが自分の周りに氷の壁を張り巡らせる。

「ちっ！ 油断しちまったね！」

俺の目の前で炎対氷の対決が行われている。

氷が解ける時の蒸気により辺りの湿度が急激に上がった気がする。

このまま見ている必要も無いな。秋留に加勢しよう。俺はミザに向かってネマーのトリガを引いた。

バキツという音を立ててミザが作り出していた氷の壁に弾け飛ぶ。その衝撃で集中力が乱れたのか、ミザを覆う氷の壁が崩れ去り、代わりに煉蘭の炎の壁がミザを襲った。

「きゃあああっ！」

さすがに燃やし尽くしはしないだろうが、炎の攻撃を受けた事により、ミザが大きく悲鳴を上げた。

ミザは悲鳴を上げながら、身体から発する煙を砂場で転がりまわる事により消そうとしている。

「とりあえず、ありがとう、煉蘭……」

「……は、はい、秋留さん……後でもう一度……」

「うん？ 分かったわ。後でもう一回召喚するね」
何だ？

煉蘭に何かあったのだろうか？

「ふう、ブレイブも助かったよ……きゃああああ！」

俺に御礼を言いながら、振り返った秋留が俺の顔を見て悲鳴を上げ始めた。

俺は秋留の悲鳴に新たな敵だと思い、秋留の視線の先、俺の後方を振り返った。

……誰もいないし、気配も無い。夜空が広がるばかりだ。

再び秋留の方を振り返る。

相変わらず悲鳴を上げているようだが、何やら俺の方を指さしているように見える。

「なんだっ！ どうしたんだっ！」

俺は秋留を落ち着かせようと叫んだ。

「ひ、ひ、……」

何だ、俺が初めてカリユ一の獣人化を目撃した時と同じようなリアクションしているな。

……何か嫌な予感がする。

俺は広い額を触ってみた。

……。

気のせいだと思うが、辺りの明るさが弱まった気がする。

秋留も俺の事をジャンルグジュムの下から見上げながらコクコクと頷いている。

……。

さっきよりもしつかりと額を両手で覆ってみる。

さっきよりもより一層、辺りの明るさが弱まった……確実に。

「ぎゃああああああああ」

俺は悲鳴をあげた。

「……ホント、面目無い」

「……私こそ取り乱し過ぎたよ」

俺と秋留は、残った僅かな気力を使って、宿屋に戻ってきた。

今は宿屋の広いロビーに置いてあるソファーに座りながら、セルフサービスのコーヒーを飲んでいる所だ。

……まんまとミザとツルツルパゲには逃げられた。

俺の額が眩しく光っていることに動揺している間に、奴らはちゃっかりと逃げてしまっていた。奴らの傷具合から見て、自分達では動けなかったのではないだろうか？ ユスティム研究所の兵士や別の能力を持った奴らが回収したのかもしれない。

（そんなに身体が光る事にビックリしたんゲロか？）

「ラムトさ、お前も額だけがピカーっと光るのか？」

（額？ そんな馬鹿な。全身が光るに決まっているゲロ）

俺はがっかりとうなだれた。
そうか。

あの俺の額に注射器を刺した研究員……あいつが犯人だな？ 残念ながら既に他界してしまっているため、文句を言う事も出来ない。(まさかブレイブ……額だけが光ってたのか?)

「……………」

(ぶぶつ、ぎゃくっはっはっは！ グエッゲッコッコッコ！)

「ちくしょう！ 笑い事じゃねえ！」

俺はテーブルを叩いて立ち上がったが、これではまるで目の前のソファアに座っている秋留に怒っているかのようだ。

「すまん……………」

一言謝ったが、秋留はラムトの声が聞こえていないので、どちらに謝ったのかも良く分かっていないようだ。

「なんだが、色々やる事が増えてきちゃったね」

「はあ、そうだなあ……………」

まずはユスティム研究所の奴らを何とかしないといけない。あいつらがいる限り、俺は一生、ノンビリ出来ない気がする。

そして奴らの目的を知るために、秋留が回収した鞆の中身を明日、美冬さんに見せに行く必要もある。

後は煉蘭の元気が無かった事も気になる……最悪の状態にだけはなっていないと良いのだが…………。

俺と秋留がボケーっとしてっていると、ロビーの隅に置いてある大きな置時計が一回だけ鳴った。……深夜一時を指している。

「とりあえず今日は寝るか」

「そうだね。明日、っていうか今日色々頑張ろう」

俺と秋留は自分の部屋に戻っていった。

ちなみにさり気なく秋留の後について同じ部屋に入ろうとしたのだが、どんなに疲れていても一緒の部屋で寝てくれるとかはないようだ。

……振り向き様の右ストレートを食らった右頬がジンジンするの

も気にせず、俺は自分の部屋のベッドで深い眠りに落ちていった。

第四章 救出

<<第四章 救出>>

体力を回復させるため遅い時間まで布団に入って熟睡していた俺は、部屋の外でチェックアウトの客などが騒々しく支度をしている音で眼が覚めた。

……もうそんな時間か。重たい頭を振りながら俺はベッドから起き上がった。

「熱い風呂にでも入って頭をスッキリさせるか……まだ待ち合わせの時間には少し時間があるしな」

(もっと寝ていたいゲロ)

……そうだった。

頭がボーっとし過ぎて、俺の中におかしな蛙が入ってしまった事をすっかり忘れていた。

「俺の中で勝手に寝ていてくれ」

全く、この蛙は一体どんな仕組みで俺の中で生活しているんだ？ 死人のジェットトの生活と同じ位に謎が多い。

「遅かったな！ 時間ギリギリだ」

遅刻していないから問題無いじゃないか。

俺は心の中で文句を言いながら、朝から元気なカリューの顔をにらみつけた。……朝か。朝というには十一時という時間は遅すぎるが。

……まあ、カリューの場合はいつの時間でもアホみたいに元気一

杯だけだな。顔に出ないように心の中で笑う。

「昨日は大変でしたな」

いつも通りジェットはソファーに座ってマイお茶を飲んでいる。

……今日もシープットが砂糖菓子を用意してくれていたようだ。しまった！ 時間ギリギリに来たせいで糖分取り損ねた。

ソファーにはその他大勢が思い思いの事をして俺の事を待っていたようだ。

……俺と同じように昨夜忙しかった秋留はソファーで転寝をしている。可愛らしい寝顔だ。

「今日は大変な一日にならない事を祈ってるよ、ホント」

一日が大変になる事を予言しているかのように降り続けている外の雪を睨みつけながら、カリューの目の前に残っていた砂糖菓子を口の中に放り込んだ。

「朝から何だかよく食べるね」

歩きながらハンバーガーを頬張っていた俺にクリアが言った。そういうクリアもマスタードたっぷりの法兰克福トを食べている。

「お前に言われたか無い」

膨れっ面のクリアを無視して、俺は秋留の方を振り返った。

秋留はジェットとお茶の事について話し合っているようだ。そんな話をして面白いのか、秋留？ まあ、愛想笑いをしているようには見えない。

（はんば〜が……あまり旨くないゲロ）

人に食わせておいて文句を言うな。

俺達はゾロゾロと全員仲良く、宿屋から一時間かからない場所にある魔術研究所を目指している。

今朝、宿屋のロビーで秋留が敵から奪い取った荷物の中身を確認した所、注射針を打ち出すような折りたたみ式の銃が見つかった。

勿論、注射針の中には紫色の怪しげな液体が込められていた。……

……俺は危うくあの紫色の液体を注入される所だったのか。……毒薬

だろうか？

「この街にも少し慣れたなあ」

いつの間にか俺の隣に来たカリューが辺りを見渡しながら言った。フードを被っているため顔の表情を細かく観察する事は出来ない。

ちなみにいつ危険が訪れても反応出来るように、片手が塞がる傘などの使用を冒険者は好まない。冒険者では無いクリアはシープツトに傘を差させている……。ちなみにシープツトは傘には入りきれていないため両肩に雪が降り積もっている。あれが執事魂という奴なんだろうな。

「……カリューが獣から元に戻れたからな……この寒い大陸とも早めにオサラバしたい所か？」

「そうだな……ユステイム研究所はぶっ潰したいだが……ミザの話振りだと、他の大陸にユステイムの営業所があるって事だったからな……この大陸にはもうユステイム研究所は無いのかもしれない」

俺達は知らない間に厄介な相手と係わり合いを持ってしまったのかも知れない。俺はそんな事を考えながら唸った。

魔族やモンスター相手なら、俺達冒険者は動き易い。

しかし、相手が人間の企業ともなると立場が微妙になって来る。

治安維持活動を冒険者がするのは間違っているし、なぜか冒険者組合と治安維持協会は仲が悪いらしい。

「次はどこに行くか？」

カリューが振り返って全員に聞く。

「リーダーに任せるよ」

俺はカリューの肩を叩きながら言った。

「お……おうつ、任せる」

……俺が突然リーダーなどと言った事で、カリューはうるたえたようだ。

……俺が怪しげな組織に改造されそうになった時、カリューは必死に助けてくれたな。自分の事よりも仲間である俺の事を……。

……。

……はっ。

結局改造されてしまったんだから、キャリアに感謝する必要も無いか。助けるならもつと最後まできちんとしてあげやがれ、キャリアめ。「何、二人でヒソヒソ話してるの?」

クリアが俺達の間にはヒョッコリと割り込んできた。その後ろには傘を構えたシープットまで付いてきている。

「リーダーが次はどの大陸に行くか悩んでいる所だ」

「え? ……そっか」

元気に話しかけてきたかと思ったら、いきなり意気消沈しやがった。……女心と秋の空、という奴だな。どこかで聞いた事あるぞ。

……クリアは女なんて表現にはほど遠かったか。我儂な金持ちのお子様だ。

「人の顔見て何か失礼な事……」

「考えてない」

クリアに最後まで言わせる前に俺は即答して、前方を眺めた。建物の影からガイア教の総本山、アース・プレイヤ教会の尖塔が見え始める。

この聖都アームステルはアース・プレイヤ教会を中心にまるで山のように街々が配置されている。その街並みを見るためだけにこの聖都を訪れる人も多いらしい。

「おや、また貴方達ですか。魔術研究所の方へ?」

いつもの警備員だ。寒い中大変だな。

「ああ、頼む」

熱血カリキュールは人に対して何かをお願いするのも雑だ。俺も負けず劣らずの口下手だが。

「毎日ご苦労様です」

「いえいえ、仕事ですから」

秋留の労いの言葉に警備員の顔にも笑顔が広がる……。俺も秋留からの労いの言葉が欲しい。

「どうぞ、美冬所長からは自由に通すようにと言われてますので」

俺達は警備員が開けてくれた魔術研究所への扉を通り抜けた。研究所内の通路は相変わらず変わった臭いが充満しているが、ユースティム研究所と違い嫌な感じはしない。

「あら、また来たのね。今日はどんな御用かしら？」

秋留は口で説明する前に鞆から注射針を取り出して、美冬に渡した。

「……ちよつと調べてみるわ」

美冬が紫色の怪しげな液体を調べている間、俺達は次の心配毎のため、煉蘭を呼び出す事にした。

俺達は美冬の厚意で研究所に隣接している特別な建物を使用出来る事になった。

ガイア魔法などの試行のために、この建物の壁は対魔力効果があるらしい。辺りの気温が一気に上がってしまう煉蘭を呼び出すには丁度良い。

「煉獄の番人煉蘭よ、己が守りし門を解き放ち、この世の全てを灼熱の地獄と化せ……」

呪文の詠唱と共に目の前に煉蘭が姿を現した。

その身体を覆っている炎が以前見た時よりも物凄く小さく見える。

「……煉蘭、何かあったの？」

「秋留さん……お、お母さんが……」

やはり。恐らく口には出していなかったが、メンバーの誰もが気付いていたはずだ。

煉蘭が深刻な顔で何かを伝えたがっているなら、母親の事しか考えられない……。

「何があつたんだ？」

勿論、鈍感なカリユ一の台詞だ。空気の読めない奴め。

「奴らに……攫われちゃつたの！ うあああああん！」

うおっ！ 勘弁してくれ！

煉蘭の眼から大量の炎の涙があたりに飛び散り始めた。

ジェットは非戦闘員であるクリア達の前に立ちはだかり、飛来する炎の涙をレイピアを振り回して発生させた風で四散させている。

「落ち着いて、煉蘭、ちゃんと話を聞かせて」

秋留が落ち着く声で煉蘭をなだめ始めた。煉蘭の涙の量が徐々に少なくなる。

「ひつく……一人で森に食料を探しに行った時に、赤い制服の奴らに襲われて……」

炎の勢いは弱いが五体満足な所を見ると、どうやら赤い制服の奴らは返り討ちにしたようだな。

「戻ったら……お母さんが……いなかったの！ ひつく」

「……煉蘭を襲ったのは炎燐を攫うための時間稼ぎだったのね……」
奴らまだ懲りてないのか。

（許せないゲロ！ こんな可愛い女子を悲しい眼に合わせるなど……）

可愛い女子とは煉蘭の事だろうか？

ラムトと俺では全く趣味が合わないようだ。当たり前か。

「煉蘭、それは何時の話？」

秋留が聞く。

「昨日の昼……お母さんの気配を頼りに後を追おうとしたけど、もう境界の外に逃げられちゃってたの……」

境界……霊獣が移動可能なエリアの事か。

「……昨日の昼に攫われた……アームステルにあったユステイム研究所は壊滅させた後だよな」

『！』

秋留の台詞に一同が息を呑んだ。

つまり、アームステルのユステイム研究所を潰した後なのに、奴らはまだ活発に活動している事になる。

「奴らの研究所はやっぱりまだ他にあるって事だな！」

カリューが両拳を合わせてパキパキと指を鳴らし始めた。前回のリベンジが行えることに心底喜んでいるようだ。

「っていうか、奴らの研究所を一つ潰したの？」

「俺達を見くびりすぎだ！」

俺は煉蘭に指を突きつけた。実際の所、ユスティム研究所での俺達はボロ負けだったのだが、その辺の事実は隠蔽しておく。

「……あれ？ 貴方霊獣に転職でもしたの？」

……。

（何だつて？ お前、いつの間に霊獣になったんだ！）

「ぷぷっ」

カリューが真っ先に笑い始めた。

「あはははは！」

俺を馬鹿にするのが好きなクリアも笑い始める。

『あはははははは』

一同大爆笑。

（お前、霊獣になれたのか！ げっこっこっこっこ！）

霊獣に転職したとか言われる原因は全てお前だ！

秋留も悪いと思いつつも俺の事を見て微笑んでいる……。ああ、

何て素敵な笑顔なんだ。その笑顔が見れるなら、例え笑いものにな

れようとも、俺は本望だ。

「がっつはっはあ！ ひっひっひ！」

カリューが腹を抱えて笑い転げている。

「ひっつひっひ！ お前、秋留に召喚して貰えるんじゃないか？」

カリューが腹を抱えながら言った。

俺はユスティム研究所での教訓を生かして、ポケットに忍ばせて

おいた小石をカリューの顔面目掛けて投げつけた。

「いてっ！ 何するんだ、ブレイブ！」

「一度獣人に転職した事があるお前に笑われたくないわあっ！」

「何をっ！」

カリューと俺は顔を近づけてにらみ合った。白熱したカリューの顔がどんどん獣染みてくる。

その変化に自分で気付いたのか、カリューは首をブンブン振りな

がら冷静さを取り戻そうとしている。

「……やめだ、やめだ。とりあえず、ユステイムの奴らはまだ活動を続けているって事だな。理解した」

脳みそまで筋肉のカリユーもようやく、事態が理解出来たようだ。その時、秋留がガクリツと膝を付いた。それと同時に煉蘭の姿が掻き消える。

「はあ、はあ……召喚し続けるのも、もう限界……」

「お姉ちゃん、大丈夫？」

秋留にクリアが駆け寄る。

そうか、煉蘭を召喚し続けている間、秋留の魔力は消費され続けていたのか。ふざけている場合では無かったという事だな。

「はあ、はあ……とりあえず状況は理解出来たね」

「奴らは許せん、何度でも叩き潰してやるぜ、そして炎燐を助けるんだ！」

さすがカリユーらしい。

組織を潰す事がメインで、そのついでに炎燐を助けよう、という心意気のようにだ。

「……でもどうやって炎燐の居場所を突き止めるんだ？」

俺の疑問にカリユーの上気していた顔が一気に落ち着いた。

また情報収集が必要という事なのか？

「……そこは多分、大丈夫だよ」

クリアの肩を借りながら秋留が立ち上がる。

「何か方法が？」

「……煉蘭の台詞覚えてる？」

煉蘭の台詞？ 何か重要な事言ってたか？

俺は一同を見回したが、全員が首を横に振っている。

ん？ 意外にもシープットだけが得意そうな顔をして頷いている。

「シープット？ お前は気付いたのか？」

「ええ、ブレイブ様……煉蘭様は『お母様の気配を頼りに後を追おうとした』と仰ってました」

「！」

「「」名答！」

秋留がグッドの指でシートの指で微笑みかける。ちくしょう！俺の頭がもつと良ければあ！あの微笑は俺だけのものだったのにい！

「煉蘭を召喚しつつ、炎燐の居場所を聞いていけばきっと……」

「奴らの居場所も突き止められる、って訳だな！よしっ！早速奴らを追いかけてようぜ！」

カリューが両腕を頭上に掲げて意気込む。

「あゝ」

俺達が盛り上がっていると、いつの間にかこの建物に入って来たのか、魔術研究所の研究員がオロオロとしていた。

「美冬所長が呼びます」

「……まあ、ある程度は予想していたから、すぐに調べられたわ」

美冬さんが肩に手を当てて、疲れを取ろうとしているようだ。

毎日、忙しそうだから。俺達の面倒を見ている暇も無いに違い無いのだが、そんな素振りには微塵も見せない辺りが、さすがは秋留の母親と言った所か。

「遠まわしな言い方は好きじゃないから、結論を言うわ……これは霊獣の因子を消滅させる薬よ」

……。

……そうか、何となくは予想していた事だったんだが……。

……どうしてこうも、良くない予想ばかり的中するのだろうか。

確かに奴らのやっていることの証拠を消滅させるには、弾を数発撃ち込まないと倒せないような通常の弾丸よりも、対象を限定した一発の劇薬の方が効果があるという事でもあるのだろうか。

……考えたくもないが、通常の弾丸で俺を死体にしても、死体からロスティム研究所の悪事を証明する事が出来るかもしれないしな。

(……霊獣のお前の存在を消す、って事がゲロ？ そうすると俺はどうなるゲロ?)

「馬鹿野郎！俺は霊獣じゃねえ！この薬はお前の存在を消す為に作られたものなんだ！」

俺は思わず叫んだ。

しかし俺の台詞でラムトが何と言ったのか、大体は掴めたらしく、その場の誰もが深刻な顔を続けている。

(お、俺の存在を消すため……ゲロか?)

「そうだっ！ちくしょう！」

この気持ちは、何なんだ？

ラムトがいなくなれば清々すると思っていたのに……。そんな事を今まで思っていた自分が嫌になる。

「落ち着け、ブレイブ」

カリューが俺の肩に手を置く。

「お前もお前の中にいるラムトも、俺達を守る」

「カリュー……」

「そうですぞ、我々に任せて下され！」

「ジエツト……」

じっ。

俺は秋留の事を凝視する。

秋留からの励ましの言葉と抱擁はまだかな。

「……頑張ってフォローするけど、ブレイブ自身も頑張っ！」

ん、何とも控えめな激励だ。

しかし俺の眼前にブラドールの鋭い牙が伸びているので、文句も言えない。

「私モイザとなったら、ラムトのために紅蓮を身代わりに飛び出させてあげる！」

クリアの台詞に紅蓮が怯えた顔をする。

「あはは、冗談だよ、紅蓮！」

しかしクリアならやり兼ねない。それは紅蓮も思ったのか疑わし

そんな顔をしている。

「私はあまりお役に立てないかも知れませんが……」

「大丈夫！ 紅蓮の次に飛び込ませるのはシープットだから！」

「そ、そんな！ あんまりです、お嬢様！」

相変わらずシープットはクリアに苛められているな、哀れだ……。

(う、嬉しいゲロ、声も姿も分からない俺のために……)

「ピシッ」

「パシッ」

声も姿も分からない幽霊カップルも頑張ってくれるようだ。

「……ツートンとカーニヤアもサンキューな！ ラムトも俺の中で喜んでるよ」

気付くと少し離れた場所から美冬さんが俺達に優しいような笑みを投げかけていた。

「ふふ、貴方達、良いパーティーね」

「当たり前だよ、私がいるパーティーなんだからっ！」

「そっか」

「そうだよ」

秋留親子が仲良く話している。

美冬さんも将来は俺の義理のお母様になる訳だから、今のうちに仲良くしておかないとな。

「秋留の事を悲しませる奴なんて、このパーティーの中には一人もいませんよ！」

俺は秋留の肩に手をかけて言った。

秋留が俺の事を睨みつけたと同時にブラドールの牙が俺の頬に赤い筋を作る。

「あはは、確かにあんたたちは良いパーティーだよ！」

そこまで言うとな美冬さんは真剣な顔付きになって話続ける。

「その調子でユステイムの奴らを止めて。ただし、あんまり無理はしない事！」

俺達は無言で力強く頷くと、時間を惜しむかのように、そそくさ

と魔術研究所を後にした。

魔術研究所を出た俺達は、一度宿屋へ戻ると荷物を整えて馬車へと向かった。ノンビリしている暇は無い。この間にも炎燐の状況はどんどん悪くなっていつている可能性がある。

「寒い中悪いが、頼んだぞ、銀星」

ジェットが銀星の首を撫でる。銀星はヒヒーンと大きくいなないた。それに合わせて他の二頭もブルルンと鬨志を燃やす。ちなみに俺達の乗る馬車は人数が増えた事もあり、馬三頭で引っ張る事になっている。

中心に銀星、そして同じく雄馬である茶色の毛並みをしたパンとブレットがサイドから補助する。

……茶色の毛並みの馬にパンとブレットという名前を付けたのは、秋留だ。クリアに聞いた所、本人達がパンとブレットという名前が気に入ってしまったため、反論の余地は無い。

秋留は時々、そういう狙ったのか天然なのか判断が付かない所がある。俺に言わせるとそこがより可愛い所なのだが。

「じゃあ、早速出発するぞ！ 準備は良いなっ？」

「おー！」

カリユ一の掛け声でジェットが御者席から馬達の手綱を操る。

俺達に乗せた馬車は、雪空の中、アームステルの街を出発した。

今度こそ、ユステイムの奴らをぶちのめしてやる！

「うん！ 大分、近くなって来たよ！」

「分かった、ありがとう……」

「ううん、秋留さんこそ、私のために……」

「同じ人間として許せないからね、ユステイム研究所のしている事は」

アームステルを出発して既に二日が経過した。この極寒の地での

野宿もそろそろ慣れてきている。しかし寒さにはいつまで経っても慣れそうにはない。

「ふう……」

煉蘭から進路に関する情報を聞き出した。秋留は度重なる煉蘭の召喚で若干疲れが溜まってきているようだ。

「大丈夫か？」

俺はさりげなく秋留の方に近寄って聞く。

「ふう、ありがとう、大丈夫だよ」

その笑顔にどこか力が無い。

「疲れた時には糖分が一番だぞ」

俺はそう言って秋留にチョコレートの包みを渡す。

「あゝ、ずるいゝ、アタシも食べたーい！」

ぬう、折角秋留のために買っておいたものなのに！ この食欲旺盛な野蛮人め！

しかし秋留の目の前で断る事が出来るはずもなく、俺はクリアにもチョコレートを差し出した。

まあ、秋留にも渡せたし、素敵な笑顔が見れたから良しとしよう。

「……やはり港町ザブンですなあ」

ジェットが方角を確認しながら地図を覗き込んでいる。

煉蘭が母親を感じている方角には、港町ザブンがある。あまり大きな港町では無いようだが、ユスティム研究所みたいな怪しげな組織には良い隠れ蓑なのかもしれない。

しかし心配なのは、港町だと言う事だ。

港町に施設があるのならまだ救われるのだが、港町から船で他の大陸にあるユスティム研究所に運ばれていってしまつと、追跡するのがより困難になる。

秋留が焦っている理由も恐らくそれだろう。時間は残されていないように思える。

翌日は一日中、馬車を走らせ続けた。

雪は降っていないのだが、地面は雪でぬかるんでいるため、馬車を走らせている馬達の体力もそろそろ限界に近い……いや、死馬の銀星は別にして、だな。

「頑張れば今日中には着けそうですなあ」

「そっか……銀星、パン、ブレット、後少しだから頑張つてね」

秋留が優しく一生懸命走っている馬達の首筋を撫でる。ああ、俺の首筋も優しく撫でてくれ、秋留。

「愛しい秋留様のために頑張る、だって」

クリアが馬達のいななきを通訳する。

俺もすんなり言ってみたいものだ。

愛しい秋留のためになら俺は何だってするんだぜ、と……。

馬を走らせ続けて、港町ザブンに到着したのは真夜中の事だった。俺達はその日の情報収集は諦めて、港町に一件しか無い宿屋で深い眠りについた……。

身体が重い。久しぶりにベッドで寝たせいで起きるのが辛い。このままもう一日くらい寝ていたい位なのだが……。

（早く起きろ、ブレイブ。今日はユスティムの奴らをぶっ潰すんだゲロ？）

朝からゲロゲロ五月蠅くされたせいで、すっかり眼が覚めてしまった。

俺はベットから起き上がると支度を始めた。

「たまには宿の朝食でも食べてみるか！」

（ナイスだゲロ！）

俺は一階の食堂に下りると海の幸定食を注文した。さすがに港町なだけはあるって、新鮮な魚介類をメインにしたメニューが多い。

（お、これは旨いだゲロ〜）

ラムトは蛙だよな？

魚介類食べて喜んでるなんて……ちょっと共食いに近いんじゃないか？

「おや？ 珍しく早起きですなあ」

きちんと身支度を済ませてジェットが宿屋の主人に鮭定食を注文すると、俺の目の前に腰を下ろした。

「こいつが朝から五月蠅くてよ」

俺は人差し指で自分の頭を叩いた。

（なっ！ その五月蠅い奴っていうのは僕の事がゼロ？）

俺は無視して旨そうな刺身を頬張る。さすがに港町だけあって料理が旨いし新鮮だ。

「あんたたち、冒険者かい？」

ジェットに料理を運んで来た宿屋の主人が聞いた。この宿には料理を運ぶような店員はいないようだ。小さな宿だしな。

「そうですじゃ。何か困った事でもありましたかな？」

俺たちの保護者でもあり人生経験の長い……長すぎるジェットがいてくれて助かった。俺ではこうもすんなり見知らぬ爺の応対は出来そうにない。

「こんな辺境の港町まで何しに来たんだい？」

「……ここから更に北上して大きな港町からワグレスク大陸に向かう予定ですじゃ」

俺たちはどこにいいのか、どこにあるのか分からないユスティムを探しているんだっただな。この宿屋の主人ももしかしたらユスティムゆかりの者かもしれない。

ジェットは全大陸を制覇しているため、嘘の説明にも無理がない。

「そうかい、ワグレスクは憎ったらしい魔族の本拠地だからな！ 気をつけていくんだぞ！」

そう言つと宿屋の主人は店の冷蔵庫からデザートを取り出して俺たちのテーブルの上に置いた。

「俺からの餞別だ！ これで魔族を少しでも多くぶっ殺してきてく

れ！」

……過激な爺だが、プリンのサービスとは嬉しい事をしてくれる。

あれから俺は一度部屋に戻り、仲間達と待ち合わせをした時間に宿屋の玄関で待ち合わせをした。小さい宿屋なので立派なロビーのようなものは無いが、三つある椅子に秋留とクリアとジェットが仲良く座っていた。

「ん？ カリユーはまだなのか？」

いつも元気なカリユーの姿が見えない。

「外で素振りしていると書いておりましたよ」

少し離れた所でポツンと立っていたシープットが答えた。まずは情報収集だけなのにシープットは大きな鞆を背負っている。どんなクリアからの要求にも答えるためだ。

「んじゃあ出発するか……」

俺たちは外に出ると、寒い中素振りをして体中から湯気を立てているカリユーを連れて、港町を出た。

「この辺でいつか」

港町から少し離れた場所で秋留が言った。炎燐の居場所を特定するため、再度煉蘭を召喚するのだ。

「煉獄の番人煉蘭よ、己が守りし門を解き放ち、この世の全てを灼熱の地獄と化せ」

炎を巻き上げながら煉蘭が姿を現した。

「！　すぐ近くだよ！」

召喚された途端に煉蘭が辺りをキョロキョロし始めた。

「その町！　お母さんの心配がする！　……地下！」

「分かったわ！　必ず助けるから待ってて！」

秋留の台詞に煉蘭は大きく頷くとその場から掻き消えた。

「……大きな町じゃないから情報収集も気をつけないと、あつという間に奴らに感づかれる……」

秋留が港町の入り口を睨む。

この町のどこかにユステイム研究所への入り口が……。

「手っ取り早く、幻想術使っちゃうよ」

秋留が先頭に立ち、再び港町目指して歩き始めた。

そして目の前で掃除をしていたオバちゃんに話し掛ける。

「……あの、少し聞きたい事があるんですが」

「ん？ なんだい？」

オバちゃんは突然知らない人に話しかけられて少し嫌そうな顔をしている。あまり人との係わり合いは持ちたくない人種のような……俺と同じだな。

秋留が両手をクルクルと回し始めた。

「な、急にどうし…… たんだ…… い……」

オバちゃんの台詞が遅くなった。どうやら早速秋留の幻想術にかかり始めたようだ。

「この町のどこかに怪しげな入り口とかあったりしない？」

操っているとんでもない質問はしない。さすがに、ユステイム研究所はどこだ、などと唐突に聞いても知らない人物では答えようも無いしな。

「怪しげな…… 入り口？」

オバちゃんは秋留の顔をポカーンと見つめている。

「この港町に…… そんな怪しげな場所は…… 無いねえ……」

「そっか…… ありがとう」

ポーっとしていたオバちゃんが秋留の言葉でハッと辺りを見渡した。どうやら秋留が幻想術を解いたようだ。

「……ん？ アタシどうしちやったのかしら？」

「朝から精が出ますね！」

秋留がオバちゃんに微笑みかける。

「あ、ああ、そうだね。アタシの日課だよ」

「じゃあ、頑張って下さいね」

俺たちは相変わらずポカーンとしているオバちゃんを放っておいて町の中へと繰り出した。

「次は犬の散歩しているオジさんね」

秋留は次のターゲットを見つけると同じように幻想術をかけて、同じように質問をしたが、やはり有力な情報は得られなかった。

次もその次も……。

「はぁ……はぁ……」

秋留が肩で息をしている。幻想術も魔力を結構使うようだ。

「誰も何も知らない……」

相当焦っているようだ。

「おい、あんたら……」

近くに帽子を目深に被った男が立っていた。こいつからはまだ情報収集はしてないな。

「朝から町の中で何ウロウロしているんだ？ 何か探し物か？」

「ふう……」

秋留が一息ついて、両手をグルグルと回し始めた。

「！」

帽子を目深に被った男が秋留の動きを見て後方に大きくジャンプした……一般人の動きではない！

「幻想術か！ 俺に何をしようとしている！」

「おや、幻想術をご存知ですか？」

ジェットが秋留の前に歩み出る。その自然な動きの中で自然に腰に下げたレイピアをいつでも構えられるような位置に持ってきている。

「お、俺は元冒険者だ！ それ位知っている！ お前らこの町に何しに来た！」

すっかり警戒させてしまったようだ。

しかも男が騒いでいるせいで、遠くで様子を伺っていた町人達が集まろうとしている。その中には先ほど幻想術で情報を聞きだそうとした町人が何人が含まれているようだ。

「お、落ち着いてください……」

いつもならその声を聞いただけで心が平穏にある秋留の声だが、

今は魔法の連続で消耗しているらしく、声も掠れてしまっている。

「！ お前らどこから来た！ アームステルか？」

帽子を被った男は今にも襲い掛かってきそうだ。

「そつだが……何か不都合でもあるのか？」

カリユーが敵意をあらわに男に近づく。今にも剣を振りかざしそつだ。

「この辺に……研究所への入り口があるだろ？ 誰か知らないか？」
頭を使おうとしないカリユーのストレートな発言に、さすがに辺りの町人はポカーンと……していない！ どの町人の顔にも憎悪と焦りが入り混じったような顔になっている。

「お前らか……アームステルの研究所をぶつ潰した奴らは！」

『！』

気づいた時には俺達の周りに集まってきていた町人達が殺気を放ちながら何やらブツブツと……。

「呪文だ！ 散れ！」

俺は咄嗟にシーブットを、ジェットは近くにいたクリアと紅蓮を抱きかかえてその場を離れた。と同時に俺達のいた場所に炎属性や氷属性、風属性などの色とりどりのラーズ魔法が放たれた。

「緊急警報だ！ レベル四だ！」

帽子を被った男が叫んだ。命令を与えている所を見ると、どうやら少し偉い奴のようだ。

「お前らなぜアタシ達の邪魔をするんだい……」

最初に話かけたオバちゃんが俺達の方を睨んで話している。

……このオバちゃんはユステイム研究所を知らないんじゃないかなかったのか？ 秋留の魔法が不発だったのか？

「邪魔する奴は斬るぞ」

カリユーがオバちゃんの顔に鞘に入れたままの業火の剣を突き出す。おいおい、熱くなるなよ、カリユー。

「治安維持協会の奴らか？」

「いや、アームステルの研究所を壊滅させた奴らだ、冒険者だろう」

「バレてしまったのなら、この町から出す事は出来ないな」
「おいおい。」

民家から危険な台詞を発しながら続々と町人が出てくるぞ……こいつら全員、ユステイム研究所の奴らなのか？

「そうか……この人達にとってユステイム研究所は『怪しい場所』じゃなかったんだ……」

「え？」

クリアの様子を見に来た秋留が隣で言った。ちなみにクリアは俺が助け出した時にたまたま頭が地面にぶつかって気を失っている。

……こいつらにとってユステイム研究所は怪しい場所じゃない？
そうか、こいつらにとってはそれが日常なのか。だから秋留の幻想術でも居場所を吐かなかったんだな。

という事はカリューみたいに『研究所の入り口はどこだ？』と聞けばすぐに答えが返って来たという事か。

「ぬう、随分と沢山出てきましたな……」

見ると女性から子供まで、幅広い年層の町人達が続々と俺達の周りに集まってきている。こいつら全員、ユステイム研究所に関する奴らなのか……まさか……。

「ちっ！ まさかこの町自体が！」

鈍感なカリューでもこの状態の理由が理解出来てきたようだ。

（おいっ！ 俺が寝ている間に大変な事になってるゲロな！）
静かだと思ったらラムトの奴、眠っていやがったか。

（しかも霊獣の気配が近づいてきているゲロ！）

「何っ！」

俺は辺りの気配を探った。確かに遠くから何者かの気配が近づいてきているのが分かる。

「どうした、ブレイブ？」

カリューは鞘に入れたままの剣で今にも町人に襲いかかりそうだ。
「ラムトが霊獣の気配が近づいてきていると！」

「……豪精人達が来てくれたよ！」

少し離れた場所から様子を見ていた子供が叫んだ。ごうせいじん？ まさか霊獣と混合した人間を豪精人と呼んでいるのか？ 町人達はまるでヒーローが登場するかのような嬉しそうな顔をしている。「一般所員は非難している！」

遠くから歩いてきた一団の先頭の一人が叫んだ。その声に俺達の周りを囲んでいた町人達が家の中へと戻っていく。

「！ あんたら……冒険者じゃなかったのか！」

先頭で号令をかけているのは、宿屋で見かけた主人だった。真っ赤なバンダナに真っ赤なコートを羽織っている。……この赤で統一された制服は……。

「ソソソソさんの知り合いで？」

隣から話掛けたのは……あの木を操るツルツパゲ！ その隣には憎いミザの姿も見える。その少し後ろには十歳前後の男児……まさかあんな小さな子供まで……こいつ等……。

「宿屋に泊まっていたんだが、ルードの知り合いか？」

宿屋の主人の名前はソソソソとかいう変な名前で、あのツルツパゲはルードか……。奴はツルツパゲで十分だ。

「ソ、ソソソソさん！ 手配書見てないんですか？」

「え？ 知らないぞ」

「あいつらがアームステルの研究所を壊滅させた冒険者達ですよ！ 宿屋の主人改めソソソソが俺達の方をギロリと睨む。

「お前ら……魔族が憎いから冒険者をやっているんじゃないのかい？」

「凄みのある低い声でソソソソが俺達に更に近づきながら喋っている。」

その身体がゴツゴツとした岩のようになりつつある。やっぱりあいつらは霊獣の因子が組み込まれた……豪精人か！

「人間を滅ぼそうとする魔族は許さん！ お前に言われるまでも無いわ！」

カリユーが業火の剣を鞘から抜き出した。今まで回りを囲んでい

た町人達とは別格だからだろう。手を抜いたりすればこつちがやられる。

「魔族が憎いならなぜ俺達の邪魔をする！」

「魔族を倒すために魔族と同じ事をする等許せるはずがないわあっ！」

いつも冷静なジェットがレイピアを構えてソソソソに突っ込んでいった。それ程にユステイム研究所のやっている事は許せない！

「僕達の邪魔をすんなっ！ くそじじいっ！」

ジェットが繰り出したレイピアを後方にいた十歳前後と思われる男児がいつの間にか構えたのか、身長ほどもある大剣で弾いた。

「はあっ！」

男児が大剣を横に払った。それをジェットが上体を屈めて避ける。

「たあっ！」

「ふざけんなあっ！」

更に男児が大剣を振り回してジェットの胸を薙ごうとしていたのをカリューが大剣を蹴り上げて吹き飛ばす。カリューは子供にも容赦がないな。

「オジサン！ 邪魔すんなよっ！」

ぷぷっ。確かにあの男児から見れば、二十五歳のカリューはオジサンだな。あれ？ そういえば……。

（ブレイブ！ あの青髪をジャンプさせるゲロツ！）

「カリュー！ ジャンプだっ！」

ラムトの忠告に疑問を挟まずにカリューに指示を出す。冒険者は一瞬の気の迷いが死に繋がるから判断力は重要だ。

カリューは俺の大声に、咄嗟に空中にジャンプする。

カリューが立っていた場所に巨大な剣が地面から飛び出した。先ほどの男児が構えていた剣にそっくり……え？ 男児の手に剣が握られていない。

「黒い奴も邪魔するなあっ！」

（今度はブレイブの下からだゲロ！）

俺は男児の方に向かって大きく地面を蹴った。そうか、こいつら豪精人だから体内に霊獣の因子があるんだった。あのガキは剣の霊獣でも体内に飼っているのだろうか。

俺は危険なガキを一旦眠ってもらったために空中で銃を構えようとした。

（あ、ブレッツ）

「ぐはっ」

ラムトが何か忠告をしようとしたのだが、間に合わなかった。俺は下からの衝撃で更に上空に飛ばされた。ぐるぐると回る景色の中で今まで無かったはずの一本の長い木が生えていた。あのツルツパゲの仕業だな〜！

「いけ！ 紅蓮！」

上空で体勢を立て直すとクリアの号令が聞こえた。その合図と共に紅蓮がツルツパゲに遅い掛かる。

「邪魔はしない事だぞ、お嬢さん」

ソソソソがツルツパゲの前に出て、紅蓮の攻撃を防いだ……いや、ソソソソの腕をしっかりと紅蓮の牙が捕らえているのだが……。

「キヤイキヤイン」

紅蓮が思わず悲痛な泣き声をあげながらクリアの横に戻る。

ソソソソの腕が灰色に……まるで岩のようにゴツゴツとしているように見える。奴は秋留の操る岩の巨人の霊獣のような霊獣の因子が組み込まれているようだ。

「こ、コイツら……」

俺は地上に降り立つと両銃を構えた。

コイツらは全員豪精人か。まだ能力は見せていないが、少し離れた所から様子を見ている長髪の男の存在も怪しいな。

「おい、ラムト……あの長髪からも？」

（そうだゲロ、霊獣の気配が感じるゲロ……ん？ あの長髪からは前にも感じた事がある霊獣の気配を感じるゲロよ）

正体は不明だが奴も豪精人という事か。こいつらは呪文の詠唱も

せずに、それこそ霊獣のように突然不思議な技を繰り出してくるので始末が悪い。

「！」

銃の劇鉄を起こす音に俺は咄嗟に先ほどの木の陰へと入った。と同時に地面が吹き飛ぶ。

「あいつは逃がすんじゃないよ！ 豪精剤を打ち込んだんだからね！」

この声はミザか。木の陰から見るとミザの近くに銃を構えた赤い制服の奴らが十人程いた。

「生やすだけじゃないんだぜー？」

どこにいるのか分からないが、ツルツパゲの声と共に目の前の木が枯れるように一瞬で消滅した。

「ちっ！ さすがに……」

俺の姿を確認した赤い制服の奴らが今にも銃弾を発射しそうだ！

「ジャイアント・アーム！」

この可愛い特徴的な声は秋留だ。秋留が契約している岩の巨人ジャイアントロックの巨大な腕が、俺を狙った銃弾をことごとく防ぐ。

俺はその間に民家の陰に逃げ込む。その際、ネカーとネマーを乱射して赤い制服の奴らの中の一人を再起不能にする。

「この硬貨じゃ躊躇しちゃうからな」

俺は一人呟くと鞆から今はほとんど使われていない石の硬貨の袋を取り出すとネマーの中の硬貨と入れ替えた。ちなみにいつもモンスター相手に使っている硬貨は銅で出来た千カリム硬貨だ。一般的に使われている硬貨の中では一番最低ランクだ。

（甘いゲロな……ブレイブ）

そうか、ラムトに見られていたか。

確かにこれは甘い考えなのかもしれないが、俺はどんな悪党であっても人の命を奪うのには躊躇する。俺が殺されるかもしれないという時でもそれは変わらない。

実を言うと姿かたちが近い魔族を殺すのにも俺は躊躇してしまう。

「見つけ……」

「バレバレだ」

ゆっくりと近づいてこようとも俺の耳を誤魔化す事は出来ない。

民家の陰から顔を出した赤い制服の顔面に石の硬貨をお見舞いする。

(……石の硬貨でもそれだけ威力があつたら同じじゃないゲロか?)

続々と近づいてくる足音に俺は民家の屋根へと上る。ついでに鞆から取り出した小型の爆弾に小手で付けた火種で着火すると、屋根の下へ落とした。

(それも相手を死に至らしめるんじゃないゲロか?)

俺は屋根を伝って別の民家の屋根に移動した。後ろで大きな爆発音と共に人々の叫び声上がる。

「ラムト、俺のポリシーを教えておこう」

(何だゲロ?)

「弱い奴がたまたま俺が与えたダメージで死んでしまう事までは面倒は見れない」

(……納得だゲロ、ん！ ブレイブ！)

俺は咄嗟に民家の屋根から地面へと降り立った。民家の屋根に巨大な氷の塊が突き刺さる。

「さつきからよく逃げる野郎……」

俺は銅の硬貨が入っているネカーの方をぶっ放して、民家の陰から現れようとしていた奴を威嚇する。そして無駄口を叩きながら登場しようとしていた奴に飛び掛る。

「ちっ」

俺の攻撃を察知して目の前の赤い制服のツルツパゲ……あの木を操る奴が距離を取った。

「ツルツパゲ！ さつきから邪魔ばっかりしやがって！」

俺はツルツパゲを睨みつける。

「ふざけるな！ 俺の名前はルー、ぐはあっ！」

俺の台詞に反論しようとして隙だらけになったツルツパゲの顔面に石の硬貨を叩き込んだ。盗賊ブレイブ様相手にそんな隙のある行

動をしちゃあ駄目だぜ？

(心の中で格好付けてないゲロか？　ちなみに今の攻撃は卑怯だゲロよ)

とうとうラムトにまで心の声を読まれるようになってしまったか？

「……またゾロゾロと近づいてきてやがるな、奴らめ」

とりあえず気を失わせたツルツパゲを放っておいて、俺は敵が近づいてきている通路に入って、石の硬貨を再び発射した。

「ぎゃあっ！」

予想通りソロソロと歩いてきていた兵士が頭に石の弾丸を受けて地面に崩れ落ちる。その手から例の銃が滑り落ちる。

「！　そうか！」

俺は目の前に落ちていた銃を拾い上げてマガジンを取り出す。そこには俺の予想通りに怪しげな液体が入られた弾丸が込められていた。俺はマガジンを元に戻すと先ほどのツルツパゲの所に戻って、ツルツパゲの腕に怪しげな銃から発射された弾丸を撃ち込んだ。

「うっ！」

気絶しているが痛みは感じたようだ。うまくいくかは分からないが、これでこいつの木を生やす能力も失われるはずだ。

(姑息ゲロ)

相変わらず繰り返されるラムトの中傷を気にせずに俺は再び辺りの気配を伺う。

(どんどん来るゲロ！)

上空を確かめるまでもなく、空気を切り裂く音を感じた俺はその場から前方方向に逃げ出す。俺の足元に巨大な氷の塊が何本も突き刺さった。次は右回転……。

「！」

いつの間にか目の前に赤い制服の男が銃を構えていた。俺は持ち前のハンドスピードで銃口を上にならした。俺のわずか頭上を怪しい液体の入った弾丸が掠める。

「ぎよぶっ！」

ズボンの下に隠している鋼鉄の膝当てを男の腹にめり込ませた。
変な悲鳴を上げて男が気を失う。

（ヘックション！）

「うおっ！ 五月蠅いぞ、ラムト！ 俺の頭の中でクシャミするな
！」

（急に寒くなってきたゲロ！）

確かに辺りの気温が急激に下がりつつある。……この冷気はミザ
の野郎だな。

俺はツルツパゲから奪取した銃をネマーの代わりに構えた。ミザ
の野郎にもこの弾丸を撃ち込んでやる。

「！」

僅かな空気の振動を察知した俺は後方に宙返りを行った。

俺の居た場所に下から突然突き上げてきた鋭い氷の柱が出現する。

「ちっ！ ミザはこんな事も出来るのか！」

（辺り一面に力を放っているゲロ！ 俺でもどこから攻撃されるか、
奴がどこにいるのかも察知出来ないゲロよ！）

そう何度も避けられるものじゃないな。

しかもミザはその辺の一般兵士と違って、気配を絶つのが旨い。
どこに向かえば良いのか判断が出来ない。

「とにかく動き回ってチャンスを掴むしかない！」

走り始めたと同時に俺の目の前に巨大な氷柱が飛び出してきた。
それを斜め前方に走り抜けてその場を脱出する。

「くっ」

次に飛び出してきた氷柱が俺のすぐ真横に現れた。今のは危なか
った！

（危ないゲロよ！）

「ちよつと黙って……！」

ラムトへ文句を言っている時に突然俺の隣の氷柱が砕けた。俺は
咄嗟に上体を屈めてその場を走り抜ける。

鈍い音がして、近くの民家に弾丸がめり込んだ。

「逃げるなっ！」

声のした方へネカーのトリガを引いて、銅の弾丸を撃ち出す。

「うわっ」

男の叫び声の後、ドサツという地面に落ちた音が聞こえた。

まあ、直撃はしていないだろうが、これでまた一人再起不能にさせたかな。

それにしても、走りながらもすっかり集中していないと危険だな。氷柱が砕けなければ、例の弾が直撃していた可能性が高い。

「とっ！」

思考を中断させるかのように、目の前に再び氷柱が現れた。

ひとまず、広い場所に出たほうが良さそうだ。秋留達が戦っているであろう場所に戻るのも手だが、何だか格好悪いし、向こうは向こうで三人の豪精人を相手にしている筈だから、余裕は無い可能性が大きい。

「イテえええ！」

俺は左足に激痛を感じて思わず叫んだ。その場でゴロゴロと回転してひとまず建物の陰に身を隠す。

先ほど走っていた場所を確認すると、地面から釘のような小さくて細かい氷柱が何本も飛び出しているのが確認できた。

「こ、小癩な……」

(小癩さで言ったら、ブレイブといい勝負だゲロよ)

しかし、この足はヤバイぞ。俺は左足の傷口に左手を持っていった。手袋に染み込ませている傷薬が痛み位なら和らげてくれる。

「！」

またしても空気が振動している。俺は痛む足を引きずりながらその場を立ち上がろうとした。

「ぎゃっ」

一瞬にして意識が遠ざかりそうな激痛。下から突き上げてきた氷柱が俺の脇腹を切り裂いた。

(ブレイブ！ 大丈夫ゲロか！)

「ぬうう……」

額から脂汗が浮かぶ。傷は深いぞ……。

「やっと捕まえたよ」

俺はその声の方にツルツパゲから奪った銃を打ち込んだ。バキツという氷柱を砕いた音が聞こえたが、ミザには攻撃が届かなかつたようだ。

ここから離れなくては。

「逃がしゃあしないよ!」

今度は肩口にミザが放った氷の塊がぶち当たった。俺は遠のく意識を繋ぎ止めて、ミザがいるであろう方向へネカーを乱射した。

「あがくなっ!」

ヤバイ、大きな攻撃が来る。

俺は危険を察知して、小型爆弾に急いで火を付けた。そしてその場を必死に離れる。

「きゃあっ」

「ぐわあっ」

近くで発生した爆風に、俺の体は少し離れた場所にあつた民家の窓を突き破って中へ転がり込んだ。俺が吹き飛ばされる瞬間、ミザの悲鳴も聞こえたため、上手くいっていれば少しはダメージを与えられたかもしれない。

「くっそ!」

(大丈夫ゲロか!)

俺はいつも背負っている黒い鞆から傷薬の瓶を取り出すとキャップを開けて脇腹の傷と肩口に振りかけた。この傷薬は冒険者に好まれているアイテムで、体力の実とか言う魔法の実をすり潰して使い易くしたものらしい。

「ぶっはっ! はあ、はあ……」

余った傷薬を喉に流し込む。失った体力が少し戻った気がする。

「! ちっ!」

俺は痛む体に鞭を打ちながら、再び民家から飛び出した。民家に

再び大量の氷の塊が降り注ぐ。

俺は振り向いてネカーを頭上に向けた。そして飛んでくる氷の塊を一つ一つ粉々にする。

(ゲ、ゲロオ……)

ラムトがビビるのも分かる。

氷の塊が止まらない。ミザの野郎、ここで勝負を付けるつもりか。俺の体の回りには砕いた氷の破片が降り積もっていつている。

「業火の身体を持ち 煉獄の心を抱く者よ……」

この声は、俺のために天から降りてきた慈愛の天使……。

「灼熱の息吹を知らぬ哀れな者達を汝の舞で焼き崩せ……」

え！

でもこの魔法って、広範囲に熱風を放出する奴じゃ無かったか？

「コロナバーニング！」

「ぎゃあああああ」

(ゲコオオオオ！)

俺とラムトは叫びながらコートに包まった。このコートなら少し位の熱は遮断してくれるに違いない。

「ふう、大丈夫、ブレイブ？」

「無茶すんなー！」

俺は煙の出ている体を無理矢理起こして秋留に指を向けた。

「寒そうだったから」

秋留は俺の抗議は一切受け付けられないような厳しい眼をしている。

「どうやら機嫌が悪いらしい。」

「そ、そうか。確かに寒かったんだ、ありがとう、丁度良かったよ」

俺は何とか体を起こすとネカーと薬入りの銃を構えて、辺りの気配を伺った。

「あっちの屋根の上でちょっとボロボロになっているのはミザだな」

……

俺が爆発させた小型爆弾のと先ほどの秋留の魔法の攻撃で、ミザは結構ボロボロになっている。その顔が鬼のような形相になっている

「よし！ 協力するぜ！」

とは言ったものの、俺の体力も限界に近い。カリューとジェット
の援護も今の所、当てにはならないだろう。クリアが来ても邪魔な
だけだしな。

「ツートンとカーニヤアは？」

「……私の魔力が尽きかけているせいで、制御が出来ない状態だよ、
ジェットも今は機能を停止していると思う」

え？

そうするとカリューがああ岩の男と剣のガキ二人を相手にしてい
るという事か。いよいよ援護は期待出来ないな。

「！ 来るぞ！」

俺と秋留が離れた場所に氷の塊が落下する。

「きゃっ！」

次は炎の塊が秋留の目の前に落下する。

「ちっ」

薬が装填されている銃を長髪の男に向かって撃つ。

「かああああっ！」

長髪の男の口から放出された高熱の炎が奴に向かって飛んでいた
弾丸を消滅させた。こりゃあ、どっちも手ごわいぞ……。

長髪の男が建物の屋根から地面へと降り立った。少し奴に近づい
たせいか辺りの温度が少し上がったようだ。

ちなみにツルッパゲから奪取した銃のマガジンは今ので空になっ
てしまった。

俺はネカーとネマーを構えてミザと長髪野郎の両方に銃を乱射し
たが、ミザには氷の壁で、長髪野郎には炎を使って弾丸を防がれて
しまった。

（相変わらず石の硬貨を使っているゲロか？）

「とつくに銅の硬貨に入れ替えたさ！」

その硬貨も残り少なくなってきた。どこかで調達する必要がある
ありそうだが……。あそこの家は金を持っていそうだな。奴らを引

き付けつつあの建物に転げ込むのが良さそうだ。

ひとまずあの長髪野郎の方が金持ちの家に近いな。

俺はネカーとネマーを連射しつつ長髪野郎の方に走り出す。

「ブレイブ！ 無茶しないでね！ 隙を作ってくれれば私が一発お見舞いするから！」

建物の陰から秋留が叫びながら飛び出した。そして飛んできた氷の塊をブラドローの刃で串刺しにする。

よし、秋留に良いところを見せないとな。

俺は靴から最後の小型爆弾を取り出すと、長髪野郎に投げつけた。

長髪野郎は瞬時に爆弾だと気づくはずもなく、今まで通り炎を吐いて、辺りが振動する程の爆発を起こした。俺はその隙について金持ち宅の窓を割って侵入を果たした。

（ブレイブ、まさか泥棒するつもりゲロか？）

ラムトの言葉を無視して俺は室内を見渡す。

……あのタンスが怪しい。

盗賊の感を最大限に活用して怪しいタンスから引き出しを全て引き出す。

「ブンゴー！」

一番下の引き出しの奥に銭袋を見つけた俺は中身を確認して思わず動きが固まった。

（どうしたゲロ？）

「この輝きは……百万カリム硬貨！」

硬貨はその金額によって材質が変わる。

俺が普段使っている銅の硬貨は千カリム。一万カリム硬貨が銀、十萬カリム硬貨が金……。そして滅多にお目にかかれないのが、この百万カリム硬貨のダイヤだ。

それが何と二枚も入っている。想像以上だ……。

俺は黙って上着のポケットの左右にダイヤの硬貨を詰め込んだ。

そして銭袋に入っていたその他の硬貨を銭袋ごと腰のベルトに通す。

（ブレイブ、それは人としてどうなのかゲロ？）

「よくある事さ。敵を倒すために敵の金を使って何が悪い？」

(その百万カリム硬貨を使って、敵を倒すつもりがあるゲロか?)

……。

……。

……………。

「よし、奴ら二人をぶっ殺してやるぜ！ 待つてるよ、秋留」

(シカトされたゲロ……あ、ブレイブ！)

「了解！」

俺は先ほどぶち割った窓とは反対側の窓を硬貨で割ると、そこから急いで豪邸から脱出した。そのすぐ後に炎の塊が邸宅を吹き飛ばした。

「うおおっ！」

俺は爆風に流されて通りを転がった。もう少し百万カリムに見とれていたなら、あの建物のように崩れ去っていたに違いない。

(ドンドン来るゲロよ！)

ラムトの台詞に俺は辺りを見渡しながら、長髪野郎の姿を探した。

「くっ」

コートを翻しながら、長髪野郎からの炎の塊の攻撃を防ぐ。その余りの暑さに体中から汗が滝のように流れているのが気持ち悪い。

「見つけたぞっ！」

大分距離があるが、俺は補充したばかりの硬貨を使って、ネカーとネマーを撃ちまくった。

「無駄だああああっ！」

長髪野郎の叫びと共に口から吐き出された炎が硬貨を全て消滅させる。それでも俺は諦めずにネカーとネマーを乱射する。

「ぬっ！」

建物の屋根から攻撃していた長髪野郎が俺の硬貨の攻撃を肩口に食らった。

(攻撃が当たったゲロよ！)

「……どんな奴だって、あんなだけ連続で攻撃を繰り返していれば疲

れもするさ……硬貨を撃つだけの俺には大した疲れは無いけどなっ
！」

俺は勢いをつけて、目の前の四角い民家の平らな屋根へと這い上がった。路地を曲がるうとする長髪野郎の姿が見える。

「逃がすかつ！」

ここぞとばかりにネカーとネマーを乱射する。小さな呻き声が聞こえてきた所を見ると、どうやら何発かは当てたようだ。

（随分と攻撃的になったゲロな……）

……ラムトの軽蔑するような台詞を無視して俺は長髪野郎の後を追った。その間、炎の塊が何度か放たれたが、焦った奴の放った攻撃など当たりはしない。

（攻撃が荒いゲロ。まだ慣れてないようだゲロね）

「……そうか。俺達がすぐに炎燐の後を追いかけてきたからな。時間的に長髪野郎はまだ霊獣の因子を入れられて間もないはずだ」

（ブレイブもまだ慣れてないゲロな）

……額が光る能力になんて慣れてたくないわっ！

俺は心の中でラムトに突っ込みを入れると、少し大きめの広場に飛び出してしまった長髪野郎に向かって、硬貨の弾丸を浴びせる。

「ぐぎゃあっ！」

体の至る所を抉られて、長髪野郎が広場の中心に倒れこむ。俺は民家の屋根から広場に降り立つと、長髪野郎を見下ろす場所まで近づいた。

「ぜえ、ぜえ……」

目の前の長髪野郎は今にも死にそうな目で俺の方を睨んでいる。闘志はあるようだが、体力がもう底をついてしまっているようだ。まだまだ戦闘経験も少ないのだろう。元はただの一般人かもしれない。

「そこまでだよっ！」

ミザの声に、俺はネカーとネマーを両手に構えると声のした方向に振り返った。

そこには頭から下が凍り付けにされた秋留の姿があった。その氷付けの秋留の体を撫で回すようにミザが隣で構えている。

「武器を捨てるんだ……さもないと頭の無い氷の彫像が完成するよ？」

ミザの手に氷の剣が突然出現した。確かにあんな剣で切られたら……。

「ごめん、ブレイブ……守るとか言っという……私の事は良いから俺は秋留の台詞が言い終わる前にネカーとネマーを地面へと放った。

「ほらよ」

「ブレイブ……」

弱弱しい秋留の声を聞いて、俺が抵抗出来るはずが無い。何とかスキを見つけてミザの脳天に硬貨をぶち込んでくれる……。

「お前が大人しく撃たれば、この女は助けてやるよ」

そう言つて、ミザが銃を構えた。恐らく弾はラムトの因子を消す特別な薬品が込められているに違いない。そもそも弾丸なので当たる場所によっては即死してしまうだろう。

(……ブレイブ)

「何だ？」

俺は小声でラムトに答えた。

(俺がスキを作る。そのスキにお前の女を助ける)

「馬鹿っ！ 止める！」

「！ 貴様！ 動くな！」

俺の叫びとミザの叫びが交差した瞬間、俺の額がまるで太陽を見上げているかのように光輝いた。

俺はラムトの台詞で一瞬前に目を閉じていたため直撃は免れたが、ミザはそうはいかなかったようだ。

「貴様あつ！」

俺は先ほど放ったネカーとネマーを素早く拾い上げると前転して硬貨を乱射した。ミザも失った視界の中で薬品入りの弾丸を何発か

撃ち込んで来た。

「ぎゃああつ」

「ぐあつ」

ミザの悲鳴、そして、俺の右肩に走った激痛。……相打ち……嫌、俺の負けか……。体の中が熱い。頭が割れるように痛い。ラムト……ラムトの声が聞こえない……。

「ラムト、返事をしろ……」

「煉獄の番人煉蘭よ……」

俺は痛む頭を抱えていると、秋留の呪文の詠唱が聞こえてきた。体中の激痛により目を開く事も困難だが、どうやらミザを倒した事により秋留の氷の呪縛が解かれたようだ。それでもまだ動くのは困難なはずだ……。

「！」

俺の後方から凄まじい熱気が伝わってくる。

長髪野郎か。

しかし体が全く言う事を利かない。

「己が守りし門を解き放ち」

秋留が体を引きずりながら俺の方へと近づいてくる。

「う、うおおおおん……」

長髪野郎の弱々しい雄叫び……。どこか悲しさを感じるのは奴に取り込まれた炎燐の因子が泣いているせいだろうか……。

「この世の全てを灼熱の地獄と化せえええっ！」

「うおおおおんっ！」

俺の後方で巨大な力がぶつかり合った。

俺は前後左右も分からぬまま、熱風に押し流されて地面を転がった。地面に転がったただけなのに体中に再び激痛が走る。

「だ、大丈夫？」

転がる体を支える優しい手。

まだ目を開く事が出来ないが、この優しい声は秋留だ。……大丈夫

夫、と元気良く答えたいが口も動かす事が出来ない。

色々傷を受けすぎたせいもあるかもしれない。

しかし一番の傷は……。

「ミザはブレイブの攻撃で再起不能……こんな時にでも相手を殺さないなんてブレイブらしいね……」

……殺す気で硬貨をぶつ放したけどな。ミザの奴、運が良かったようだ。

「髪の毛の長い奴は……煉蘭に消し去られたわ」

そうか。

娘の手で母親を解放してやったんだな……煉蘭も少しは気が楽になったに違いない。

「……ラムトはやっぱり？」

ラムト……。

もう声が聞こえない。色々わめいてばかりで五月蠅かったが、いなくなった途端、この気持ちは何なんだ？

「！」

思わず体が強張ってしまったが、秋留が突然俺の頬を撫でた。

……泣いているのか、俺は？ ……いや、そんな事は無い。きつとラムトが別れの涙を流しているのだろう。

さよなら、ラムト。

短い間だったが、お前との生活は楽しかったぜ。

体中が傷だらけの俺と魔法力が尽きた秋留は、二人で肩を貸しながらカリユの下へと歩いていった。

「まだ決着がついていない可能性があるからね……急がないと」

「カリユの事だ、殺そうと思っても殺せるもんか」

先ほどよりも五感が回復したお陰で何とか掠れた声ではあるが、喋れるようにはなった。両腕も何とか動かさせそうだ。

「カリユの呻き声が聞こえた！」

五感が完璧には回復していないため、俺の耳には聞こえなかった。

俺と秋留は最後の力を振り絞ってカリユーの下へと急いだ。

「ガアアアアッ！」

「この化け物めっ！」

怪物のような声は奴らではない。獣人化したカリユーの唸り声だ。「この化け物め」の台詞は声の幼さから判断すると大剣の霊獣を操るガキだな。

「いい加減、大人しくしろっ！」

ソソソンの岩のような腕が獣人化したカリユーの頭部を掠める。避けきらなかったらしく、カリユーの頭から血が飛び散る。

どっちが改造された人間だか、あれじゃあ分からないな……つと頭の中で冗談言っている場合では無い。

「ちっ！ あいつもギリギリじゃないかっ！」

俺は震える手でネカーとネマーを構えようとした。

「あ！ お姉ちゃん！」

建物の陰からクリアとその下僕である紅蓮とシープットが飛び出してきた。おいおい、照準も合わせにくいし手元も安定しない今の状態で俺の視界に入ってくると危ねえって。

……こいつらも一応、仲間ではあるが、カリユーの助けにはならないわな……。

「とりあえず、お前ら俺の視界から外れる」

俺は震える手をクリア達の向こう側、ソソソンの方へと向けた。俺の台詞にクリア達が俺から離れる。

俺は足を引きずりながら、町の路地を五十メートル程進んだ場所で繰り返し広げられている戦闘の場所へと歩き始めた。

こんな所から銃をぶっ放したら、クリア達を戦闘に巻き込んでしまっ。

「私も行くよ。イザという時はブラドーも頑張ってくれるはず」

秋留の首にマフラーのように巻きついているブラドーが弱く動いた。コイツも秋留と一緒に氷付けされていたから、体力は限界に近いだろう。

俺は秋留に頷くとトボトボと歩き始めた。いや、気持ちの上では猛ダツシュしているのだが、体が言う事を利かない。

「ブレイブ！ 左上！」

俺は秋留の台詞に確認するまでもなく、左手に持ったネカーを左上に向かつて乱射した。

「ぐあっ！」

男の悲鳴が聞こえた後、地面にドサリツと何かが落ちた音が聞こえた。

「まだ雑兵がいやがったか」

「ユステイム研究所の拠点だからね。私も長髪と戦っている最中に何人がやつつけたけど」

ちっ。

こうなると五感が全快しないのはキツイな。秋留の魔法力が尽きている今では、回復魔法も掛けてもらえないしな。

……やっぱり少し高価ではあるが、秋留用の魔力回復薬を常備しておく必要があるそうだ。

「ぎゃっ！」

俺が考えにふけっている間にブラドーが目の前から突然現れた雑兵その二を鋭い刃になって串刺しにした。……まあ、急所には当たってないから運が良ければ生き残れるだろう。

「……さて、それじゃあ開戦と行くか」

「……うん」

俺はネカーとネマーを構えた。隣で秋留は三日月型のオブジェが付いた杖を構える。ちなみにその杖には墮天使のお守りとかいう黒い人形がぶら下がっている。

……。

「それ攻撃用じゃないだろ？ 俺の短剣使ってくれ。使い心地は良いと思うぞ」

俺は腰に装備していた黒い短剣を秋留に手渡す。

「あ、ありがとう」

「お、おう……」

秋留のお礼に思わず照れる……ってこの時間も幸せだが、早くカリューを助けにいかないとな。

俺は会戦の狼煙にネカーとネマーをソソソンに向かって乱射した。
「ぬっ」

ソソソンがカリューへの攻撃を止めて、俺達の方を振り返る。

その隙を逃さずにカリューが剣を振るったが、ソソソンの硬い体はその攻撃を弾いてしまった。そもそも俺の放った硬貨の弾丸も弾かれてしまっている。

……ソソソンには魔法攻撃が有効そうだ。

しかし肝心の秋留は魔力が尽きていて魔法攻撃を行う事が出来ない。

「！ お前らが戻ってきたって事は……ミザとルード、それに新入りのシャーディは……」

ここで秋留が短剣を構えて一步前へ出る。

「全員、消し炭にしてやったわ」

……正確にはシャーディのみ消し炭になった訳だが、ここでは突っ込まないでおく。

「き、貴様ら……なぜ俺達の邪魔をするうっ！」

ソソソンが叫びながら俺達の方へと走ってくる。体に合わせるように動きは遅い。

「ユスティムは魔族と一緒にだからよっ！ 私達は魔族討伐組合の冒険者！ あんた達を討伐して何が悪い！」

秋留が力強く叫ぶ。

俺はネカーとネマーをソソソンに乱射した。

攻撃の衝撃はあるようなのだが、ソソソンの動きを止める事は出来ない。岩のような肌を持っているようだが、その辺に転がっているようなただの岩ではないらしい。

「無駄だあっ！」

ソソソンの攻撃が空を切り裂く。

の秋留に向かつて小さく頷く。

……震える両手を気迫で押さえつけ、俺はネカーとトリガを引いた。

「！」

体に今までに無い程の衝撃が伝わる。銅の硬貨の時に発射の反動など感じた事は無かったのだが……。

強力な反動を発生させて、ネカーから発射されたダイヤの弾丸がソソソンの腹にめり込んだ。

「ぐぎゃあああつ」

ソソソンの鋼のように硬い腹にヒビと共に大量の血が辺りに舞った。

……あれ？

……ダイヤの硬貨……奴の体を突き抜けなかったぞ……。どうやって回収しよう？ 奴の傷口に手をつ突っ込んでほじくり出すしかないな。

「あつ！ ソソソンさん！」

カリューと激闘を繰り広げていた大剣を操るガキがソソソンの方に駆け寄る。その向こう側では決着が付いた事を確認したカリューが獣人の姿のままその場に崩れ落ちる。

今まで二人の豪精人を相手にしていたお陰で助かったぜ、カリュー！。

「ブレイブツ！」

秋留の叫びに俺はカリューから視線をソソソンの方へと戻した。

「！」

全く気づかなかったが、目の前に真っ黒の服を着て地面に付く程の長い黒髪をした女が立っていた。

俺は咄嗟にネマーを撃ちこんだ。

その攻撃をガキの操る巨大な大剣が弾く。

「タイムチェェさん……」

ガキが呟く。

どうやら突然現れたこの女はティムチエとかいう全くもって覚えにくい名前らしい。名前を覚えるのが苦手な秋留では絶対に正しく覚える事は出来ないに違いない。

「撤退しますよ」

ティムチエと呼ばれた女が小さく言った。

すると突然、倒れていたソソソソ、半泣きのガキが地面に突然チヤプンツと沈み込んだ。まるで池に落ちるかのよう。

残ったのはティムチエただ一人だ。

「ふむ……ひとまずその黒い人からは因子を消せたようです……
…良しとしましょう」

真っ黒い女に黒い人呼ばわりされてしまった。

こいつも何か特別な霊獣の因子を組み込まれた豪精人に違いないのだが……能力が全く不明だ。

「……私達にこれ以上関わらないで下さい……」

そう台詞を残して女はソソソソなどと同様に地面に沈んだ。

「ま、待ちなさいっ！」

秋留は叫んだが、相手からの反応は無い。

……厄介な相手と係わり合いを持ってしまったのかもしれない。
あいつの口ぶりからすると、これ以上、向こうもチヨツカイは出してこなさそうではあるが……。

「くっ……」

秋留は地面に両手をついて涙を流し始めた。

犠牲になった炎燐のため……そして俺の中から消えてしまったラムトのため……。

エピソード

<<エピソード>>

- - - - -
- - - - -
- - - - -

港町ザブンは治安維持協会員と魔族討伐組合の捜査員でこつた返していた。

ユステイム研究所という存在は、実はそれぞれの組織で秘密裏に調査は進んでいたようなのだが、今回のような町丸ごとが研究に係っていた事は前例が無いらしい。

ちなみにアームステルのユステイム郵送会社も危険視されていたようだが、捜査が秘密裏だったために、俺が調べた時も詳しい情報は得られなかったという理由があるらしかった。

事件に関わった俺達はそれぞれの捜査員から別々に質問攻めをされる羽目になってしまった……治安維持協会と魔族討伐組合は噂通り、仲が悪いらしいな。

「捜査にご協力ありがとうございました。この映像は大変貴重な物になります」

カカという名前の魔族討伐組合員が秋留の手からインスペクターを手渡された。

実は秋留は魔族討伐組合から目的は明かせないが、規模が大きくなる可能性がある事からあらかじめインスペクターを借りてほしい。戦闘が始まる前に町に一件だけあるガイア教会の尖塔に設置して隠し撮りをしていたようだ。

さすが秋留だ。ぬかりがないし、情報提供の謝礼として貰った百万カリムをメンバーと山分けするという太っ腹振りだ。

……相変わらず、惚れ惚れするぜ。
ちなみにインスペクターは頭の部分がカメラのようになってい
妖精だ。

このカメラで撮影した情報は別地へ転送したり、少しの間なら
インスペクター内に映像として保存しておけるらしい。この辺の技
術は魔族の本拠地があるワグレスク大陸から生まれたものらしい。

「で、そちらの調査の方はどうなんですか？」

秋留がカカ組合員にそれとなく聞く。この辺は機密情報だろうが、
貴重な情報を提供した俺達にカカは悪い顔せずに報告し始めた。

「何人が死者含めて負傷者を拘束しましたが……生存者はいずれも
記憶を失っているようで……」

「！」

俺達は一同驚愕した。

その中で秋留が一人冷静に呟く。

「記憶を失わせたのね……」

逃げ遅れた関係者に対して、殺す、記憶を消す……ユスティムの
野郎、何でもありか！

「許せない奴らだな！」

獣人から戻ったカリューが怒り心頭で叫んでいる。

「村人の数も圧倒的に少ないですね。秋留さん達から聞いた情報
中で現れた……ティムチエでしたっけ？ そいつが有力な関係者は
連れ去った確率が高いですね」

ティムチエ……案の定、秋留は最初「チムテ」と言っていたが、
俺が訂正して組合員には報告しておいた。

激闘を繰り広げた翌日には俺達は港町ザブンを後にして聖都ア
ムステルへと目指して出発していた。

宿屋の主人もいなくなってしまったので、港町ザブんにいつまで
居てもゆっくり休めないからだ。

秋留の魔力がまだ全快にならないため、俺達の乗る馬車はパンとブレッドが二頭で頑張つて引張つて行つてくれている。この調子だと五日位はかかりそうだ。

「アームステルに戻つたらどうするかな」

カリューが揺れる馬車の上で伸びをしながら話し掛けて来た。

ちなみに全世界を制覇したジェットは現在、秋留の所持品の中で灰になっているため意見を伺う事は出来ない。

「カリューの変異も一通りキリがついたしな」

「お前の変異もな」

カリューは言つてから口を閉じた。俺の変異はラムトの存在が頭の中に発生していたのが原因だからな。

「悪い」

「気にすんな、お前らしくない」

カリューの台詞に俺は答えた。

「……！ おい、それじゃあ、俺はデリカシーの無い男みたいじゃないか！」

「デリカシーの無い筋肉馬鹿男だな」

「なんだとおっ！」

俺とカリューは睨みあつた。それを楽しそうにクリアが眺めている。

相変わらずクリアが苦手なカリューは咳払いをすると、自分の座り位置に戻つていった。

「今回の冒険つて……何だか悲しい事が多かったけど……」

クリアが秋留に話し掛ける。

「うん……」

秋留も寂しそうに答える。

確かに今回の冒険では大事な人を守れず、敵には逃げられるで余り良い思い出は無いな。

しかし、冒険は辛い事ばかりじゃない。冒険を続けていく事の楽しさは無限に広がっている。

俺たちは冒険を終えた時の開放感や満足感を楽しむために俺達は冒険者を続けているんだろうな。

俺の予想通り、五日かけて俺達はアームステルへと戻ってきた。そしてアームステル滞在中ずっと世話になっている宿屋に到着すると、俺達は久しぶりのベッドの感触を確かめながら深い眠りについた。

翌日は久しぶりの快晴に恵まれた。

港町ザブンからアームステルに移動する途中は、何度か酷い天気に遭遇したからなあ。

俺達は宿屋の広いテーブルを使って今後の進路を決定するための会議を開こうとしていた。

「ん？ シープットがいないようだが？」

カリューが辺りを見渡しながら言った。

シープットも今や俺達の仲間だからな。今後の進路の決定の場には居てもらった方が良くと思うのだが……。

俺はクリアの方を振り向いた。

その顔がなぜか寂しそうだ。いつもの覇気が感じられない。

……まさか。

「クリア、シープットは？」

カリューが聞く。

こいつ、もう少し空気読め！

丁度その時、宿屋の入り口を誰かが入ってきた。恰幅の良い腹、成金趣味の服装……。

「やあっ！ 皆さん、お久しぶりです！」

クリアの父、パルメザン・レッジャーノ、その人だ。隣には不在だったシープットとその他数人の執事が大量の荷物を抱えている。

やはり来たか。

クリアは元々、カリューが人間になって大人しくなるまで、とい

う限定条件の下、パルメザンに許可を貰って俺達パーティーに入っていた。

「カリューが半分だが人間に戻ったという事でパルメザンが愛娘を引き取りに来たという事か。」

「……こちらの状況はシープットが報告していたに違いない。クリアが自分から報告するとは思えないしな。」

「このオツサン……誰だ？」

勿論、デリカシーの無い筋肉馬鹿男の台詞だ。

「……あれ？ そういえばパルメザンに会ったのってカリューが獣になっっている間か。だとしたら覚えて無くてもしかたがないな。」

「今まで、クリアがお世話になりました！ ぐっほっほ！」

相変わらず典型的な金持ちを表す偉そうな喋り方と笑い方だ。相変わらず好きになれない。

「おや？ そちらの方は……青い毛並みには見覚えがあるのですが……」

「あ！ ……あの時は別件で外れていたレッド・ツイスターのリーダー、カリューです！」

秋留が咄嗟の台詞で取り繕う。

「ほほお……まあ、色々あったようですが、皆さん、無事で何よりです！」

ほっ。

パルメザンが細かい事は気にしない阿呆で良かった。

カリューがパルメザンに会っていた時、カリューは青い毛並みの凶暴な獣、だったからな。説明するのが面倒くさくなる。

「ん？ どうした、クリア。お前から皆さんに挨拶しなさい」

黙って俯いているクリアにパルメザンが言った。

「こいつもカリュー同様に空気の読めない奴だな。」

「……」

黙ったままのクリアの肩が小刻みに揺れている。

「頑張って」

秋留が言った。

その言葉に赤い目をしたクリアが顔をあげ、俺達の顔を一人一人見渡しながら、声を振り絞るように話し始めた。

「皆さん、今までお世話になりました……アタシの冒険は……コレで終わり……です」

クリアが涙を流しながら言った。

秋留がクリアの肩を軽く抱くと、クリアは秋留の胸へと飛び込んだ。俺も飛び込みたい！

「そりゃあ急だな……言ってくれば何か用意したんだが
か〜！

我儘で自由気ままなクリアから、あらかじめそんな事を言ってくる訳無いだろっ！

クリアの台詞にクリアはツカツカとクリアの目の前まで歩いてくと、下からクリアを睨みつけた。

その迫力にクリアが後ずさる。

「クリアはもうちょっと乙女心を読むっ！」

「はいっ！」

うむ、だいたい俺の言いたい事をクリアがクリアに教え込んだ。クリアの台詞にクリアが裏声で返事をした事に対する笑いを必死でこらえながら、俺は心の中でグッドサインを出した。

「……と、兎に角、またな、クリア」

リーダーのクリアが引き続き怯えながら言った。この気分爽快な絶妙なやりとりが見れなくなるのは確かに寂しい。

「またな……か。うんっ！ 元気でね、クリア！」
満足そうにクリアが頷いた。

「今まで一緒に冒険出来て、楽しかったですぞ」

秋留の魔力が全快したお陰で、最近灰から復活したばかりのジエツトも言った。それにしてもこの時までには復活出来て良かったな、ジエツト。

……いや、秋留の事だ。恐らくそろそろクリアとこういう別れが

来る事は想像していたに違いない。

「楽しかったよっ!」

クリアがジェットに抱きついた。

ジェットは死人特有の独特な臭いを放っているのですが、クリアもいい加減慣れたようだ。

「これからは家族と一緒に色々学ぶんだぞ? 今回の事で家族の大事さ、よく分かっただろ?」

「むっ! ブレイブ偉そう!」

俺の台詞に泣きべその顔でクリアが言い返す。コイツ、俺に対する扱いは相変わらずだな。

「がっはっは! クリアもすっかり皆さんと仲良くなって!」

暫し、全員で笑う。

ジェット同様に復活したトゥートンとカーニヤアのラップ音も聞こえてくる……笑っているのだろうか。

「ゴホンッ、皆様」

今まで静かにしていたシープットが喋り始めた。さすが執事ともなると話し始めるタイミングも良いな。

「ご主人様がアームステルで有名な料亭を予約していますので、そろそろ、そちらに移動致しましょう」

高級料亭か。

久しぶりに旨い料理が食べそうだ。

「待って!」

クリアが席から立ち上がった。

「みんなとの最後の晚餐の場所は決めているの」

食堂ひげおやじ。庶民的なメニューを数多く扱う高級とは程遠い店屋だ。

「おほ、ここはまた随分と個性的な店だね!」

パルメザンは嫌な顔もせず店へと入っていった。

「みんなと一緒に来た時に料理が美味しかったから……もう一緒に
いられない、って分かった時にこの店で最後の晚餐しよう、って決
めたの！」

「ふむ、浪費癖、少しは減ったようですね」

「ジエットのお陰だよ！ それに安くても良い物はある！」

クリアがジエットにビシッと指を突き立てる。ジエットと話すク
リアの姿はまるで祖父と孫のようだ。

……それにしても食べたかったな、高級料理。

「おう、いらっしやい！ 団体さんだね！」

団体か……あの髭面のおっさんは気づいてないだろうが、更に幽
霊が二名いますよ……と心の中で愚痴る。……この団体で行動する
のも後僅かか。

その日、俺達は遅くまで食堂ひげおやじで安い旨い料理を食べ
まくると、夜遅くにいつもの宿屋へと帰った。さすがにパルメザン
は俺達の宿とは別の高級宿が立ち並ぶ通りへと歩いていったようだ
が。

静かな朝が始まった。もうラムトが騒ぐ事も無い。クリアの元気
な声を朝っぱらから聞く事も無くなる。

俺達は支度をすると宿屋を出た。

支度と行っても、見送るだけの俺とカリュー、秋留、ジエットは
身軽だ。

クリアは今まで立ち寄った村などで購入した土産などをシープツ
トに全て持たせているので、ある意味一番身軽だ。

移動に時間がかかるという事で、早朝から総出でクリア達を見送
るために俺達はアームステルの南門の前に向かった歩き出した。

移動の間、誰も喋ろうとはしなかったが、秋留とクリアはしっか
りと手を握りながら歩いている。

昨日も秋留とクリアは同じ部屋に寝ていたようなので、十分に別
れの挨拶は済んでいると思うのだが、まだまだ名残惜しいのだろう。

「や！ みなさん、お揃いで！」

朝からパルメザンは元気だ。その隣には、豪華な四頭引きのボックスタイプが目の前に止まっている。御者席にはパルメザンが連れてきた二人の執事が腰を掛けている。

「みんな、さよならっ！」

秋留との手を離し、クリアが元気良く言った。

「クリア」

カリユールが一步前へ踏み出した。

レッド・ツイスターのリーダーとして、締めの一言かな。

「クリア、それにシープット、紅蓮はレッド・ツイスターの立派なパーティーの一員だっ！ 冒険者になったら、その時はまた一緒に冒険しようなっ！」

そう言っただけで差し出したカリユールの手をクリアが思いっきり握り返す。

「うんっ！」

俺と秋留、ジェットも無言で二人の握手の上から手を重ねる。

慌ててシープット、そして手は届かないが紅蓮が俺達の握手を見上げる。

最後にパルメザンが一番上手に手を乗せた……いや、お前はレッド・ツイスターの一員じゃ無えって！

「仲間というのは良いものですなっ！ それでは、行くぞ、クリア」
クリアとパルメザンは豪華な馬車の中へと入っていった。

馬車の窓からクリアが顔を出す。

「ばいばいっ！」

クリアが大きく手を振った。その手にはしっかりと小さな人形が握られている。

「墮天使のお守りそっくりに私が作ったの」

俺の視線に気づいた秋留が俺に耳打ちする。

やっぱり既にクリアとの別れは十分にしていたようだ。そして手作りのプレゼントまで容易しているとはさすがとしか言いようが無

いな。

「寂しくなりますな」

街道を走り出した馬車を見送りながらジェットが言った。その目からは涙が流れ落ちていく。……年を取ると涙もろくなるらしいな。「そうだね」

秋留も泣いている。

そして横を見るとカリューが明後日の方を向いて鼻をすすっている。辺りからは「ピシッ」「パシッ」とどこか寂しげなラップ音も聞こえてくる。

ふっ。どいつもこいつも。

俺達は暫くその場で立ちすくんでいた。まだ朝早いせいか人通りはほとんど無いため変な風に怪しまれる事も無い。

「ピシッ」

「パシッ」

「ん？ どうしたの？ ツートン、カーニャア？」

どうやらツートンとカーニャアが何か秋留に話し掛けているようだ。

「……………ん、そっか……………」

クリアを見送って、少し元気が戻ってきた秋留が再び寂しそうな顔をする。

そして俺達の方を振り返って話し始める。

「ツートンとカーニャアもお別れだって」

「えええっ！」

俺とカリュー、ジェットは突然の話しに驚いた。

クリアは分かる。元々条件付きだったしな。人間だし別れがあるのも理解出来る。

しかしツートンとカーニャアは……………。

「今じゃ無いと駄目なのか？」

秋留の精神的なダメージを考慮して発言してみたが、どうやら、ツートンとカーニャアは俺達パーティーに憑いて、色々な場所を巡

れたお陰で満足出来たそうだ。

元々、クリアがいたデズリーアイランドで、浮かばれないカップルの霊を秋留が引き取って来たのが発端なのだが。

こいつらのお陰で色々貴重な体験させてもらったよ、ホント……。また寂しくなっちゃうね……」

秋留の発言なのだが……悪いけど、あんまり実感無いなあ。

「元気でな、ツートン、カーニヤア」

カリューが上空に向かって言った。

「あ、カリューの目の前で二人友、握手求めているんだけど……」

秋留のツツコミにカリューが慌てて前方に手を差し出す。

「うう、何かゾワゾワする」

カリューが助けを求めるように秋留の方に顔を向けた。

「ピシッ」

「パシッ」

「何だって？」

引き続きカリューが引きつった顔で秋留に助けを求める。こりゃ面白い見世物だ。

「クリアとの別れみたくしてくれ、ってさ」

……あ、じゃあ俺達も手を合わせるのね。

秋留の指示に従って、俺達はカリューの手の上にそれぞれの手を乗せた。

……確かにゾワゾワする。

「え、え〜と……ツートンもカーニヤアもレッド・ツイスターの立派なパーティーの一員……だっ！」

クリアの時と比べたらさすがに勢いが無くなったが、まあ、しょうがない。

「……て、転生したら、その時はまた一緒に冒険しようなっ！」

おお、カリューにしては上手くまとめたな。

「ピシッ」

「パシッ」

「ありがとう、だって」

その時、一瞬だが太陽の光に照らされて、俺の目の前に健康そうな角刈りの青年と、パーマを掛けた可愛い顔の女性が見えた気がした。

『あ!』

その二人が手を取りながら、空へと上っていく。

「……天国でも幸せにね」

秋留が両手を天に掲げて、まるで祝福しているかのように囁く。そして俺達四人がたたずむ広場に、まるで全ての悲しみを洗い流すかのように少し強めの冷たい風が吹いた。

「……何だか寂しくなったな」

宿屋のロビーで俺達四人はテーブルに広げた世界地図を見る訳でもなく、ただひたすらボーっとしている。

熱血漢のカリューの台詞にも熱さが全く感じられない。

「これからどうしますかな」

ジエツトは気分を変えるかのように身を乗り出して、テーブルの世界地図を覗んだ。

「暖かい大陸に行きたいなあ」

俺もボーっとしながら世界地図を見ながら言った。

心が何だか冷え切ってしまったので暖かい大陸に行きたい、という気持ちがあるのだが、そんな事はイチイチ報告はしない。

この冬の大陸であるアステカ大陸はこれからまだまだ寒い日が続くからな。

俺はふとロビーにかかっているカレンダーを眺めた。

「!」

そうだ、思い出した。

あの大剣を操るガキにカリューがオジサン呼ばわりされていた時にふと思った事……。

「カリュー、お前の出身ってデйм大陸だったよな？」
「？ ああ、そうだが……え？ まさか次の大陸……」
鈍いカリューでもさすがに気づいたか。

「お前の誕生日祝いも兼ねて、次の目的地はデйм大陸、なんてどうだ？」

『！』

俺以外の全員が驚いた。

「あ、カリューの誕生日って確か……」

秋留を筆頭にカリューまで自分の誕生日を思い出し始める。おいおい、そこはちゃんと覚えておけよ。

『十二月十二日！』

そう、カリューは明日で二十六歳を迎える。

「良いのではないですか、次の大陸はデйм大陸という事で？」
ジェットも笑顔で世界地図に指を突き立てた。

このルーガル星の中央にある巨大な大陸、デйм大陸。中央にある大陸という事は四季があるため、このルーガル星の北に位置するアステカ大陸にいるよりは断然寒さは和らぐはずだ。

「良しっ！ んじゃあ、次の冒険の地はデйм大陸だなっ！」

カリューが勢い良く立ち上がる。

再び熱血漢としての血が騒ぎ始めたようだ。

「その前に！」

カリューの後を引き継ぐように秋留も立ち上がる。

「明日はカリューの誕生日祝いを盛大に行おうよっ！」

『賛成！』

秋留の台詞に俺とジェットが答え、カリューが恥ずかしそうに全員顔を見渡す。

さて、色々別れが重なったが、俺達はもともと四人パーティー。もとに戻ったと思って心機一転、新たな大陸で再スタートを切るのも良いかもしれない。

次の目的地も決まり、意気揚々と今日の昼ご飯を食べるためにアムステルの街をぶらつく仲間の後ろを歩く。

首にぶら下げた、ペンダントの重さに微笑みながら……。

むふふ。

そう、残念ながら一枚はソソソソとかいう岩人間にネコババされたが、もう一枚はペンダントに姿を変えて俺の首にぶら下がっているのだ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8293e/>

盗賊ブレイブ@復活！自称勇者

2010年10月8日14時24分発行